

第24図 集石22号

集石22号 (第24図)

H-12区のV b層上面で検出された。礫は約170×100 cmの範囲に広がっており、密度はあるが特に集中する部分はない。構成礫は57個で、1点が凝灰岩で、他はすべて砂岩である。平均の重さは157gであり、掘り込みはみられず、小型の破砕礫は高さもほぼ均等である。炭化物や遺物は出土していない。

集石23号 (第25図)

H・I-12・13区のV b層上面で検出された。礫はほぼ300 cm四方に円形に散在しており、すべての集石の中で一番広がりがあるが、特に集中している部分はない。構成礫は124個で、すべて砂岩である。平均の重さは98gであり、多くが100g以下で、小型の破砕礫を主体とする。掘り込みはみられない。炭化物は出土しておらず、土器は3点出土している。

29は深鉢の胴部で、外面に貝殻条痕文、内部にケズリの痕がみられる。

集石24号 (第26図)

H-13区のV b層上面で検出された。礫は約250×180 cmの範囲に広がっており、特に集中している部分はない。構成礫は55個で、凝灰岩が3点で、他はすべて砂岩である。平均の重さは129gであり、円礫が破砕した小型のものが主体である。掘り込みはみられなかった。炭化物は出土しておらず、土器は1点出土している。

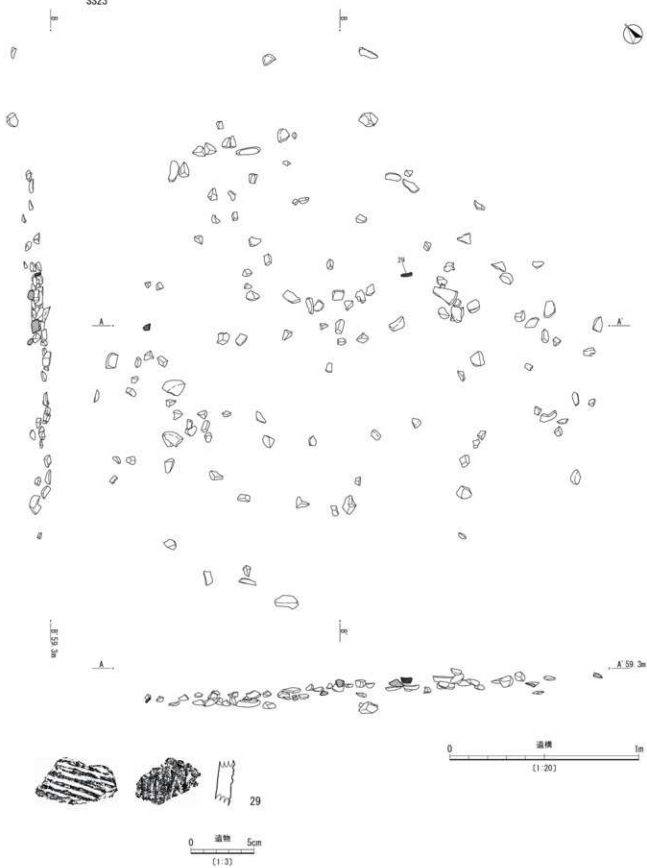
30は深鉢の胴部で、外面に斜方向の貝殻条痕文がみられる。

集石25号 (第27図)

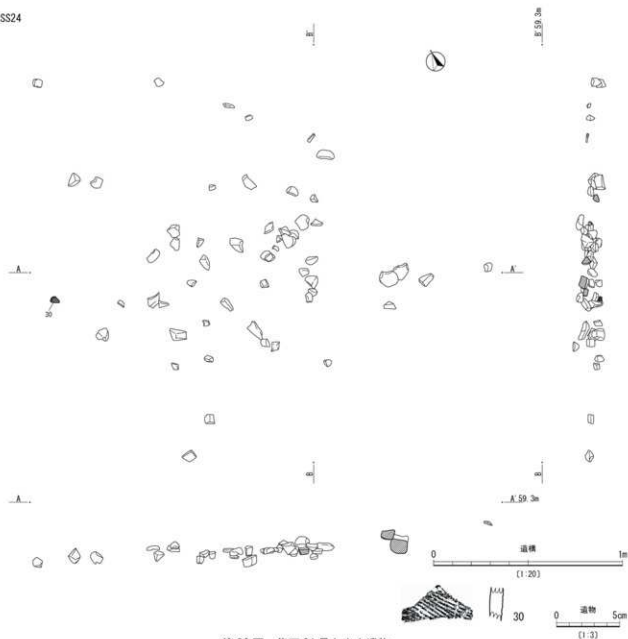
J-13区のV b層上面で検出された。礫は約280×170 cmの範囲に広がっており、特に集中している部分はない。構成礫は72個で、凝灰岩が2点、花崗岩が1点で、他はすべて砂岩である。平均の重さは77gであり、100g以下の小型のものが主体である。赤色化し、被熱したと考えられる礫が半数以上を占める。炭化物は中心付近より1点出土している。

31は深鉢の胴部で、外面に斜方向の貝殻条痕文がみられる。

SS23



第25図 集石23号と出土遺物



第26図 集石24号と出土遺物

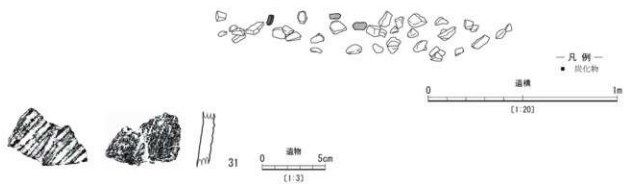
集石26号 (第28図)

I・J-13区のVb層上面で検出された。礫は約150×140cmの範囲に広がっており、特に中心部の約60×30cmに集中している。構成礫は30個で、頁岩が2点、凝灰岩が1点で、他はすべて砂岩である。角礫が破砕したものがほとんどで、赤色化したものも一部見受けられるが、明瞭な炭化物はみられない。平均の重さは90gであり、100g以下で小型のものが7割を占める。石材の構成比率や大きさ等が似ており、近いことから、集石25号と関連があると考えられる。土器等の遺物は出土していない。

集石27号 (第28図)

I・J-14区のVb層上面で検出された。礫は約250×200cmの範囲に広がっており、特に中心部の約60×60cmに集中している。中心部付近はわずかに凹むが、掘り込みはみられない。構成礫は115個で、頁岩が1点、凝灰岩が2点、安山岩が1点で、他はすべて砂岩である。角礫の破砕したものがほとんどで、赤色化したものや、ススの可能性のあるものが付着したものも一部見受けられるが、明瞭な炭化物は出土しなかった。平均の重さは60gであり、100g以下の小型のものが8割を占める。西側に集石28号が近接しており、石材の構成や大きさ等が似ており、関連があると考えられる。土器等の遺物は出土していない。

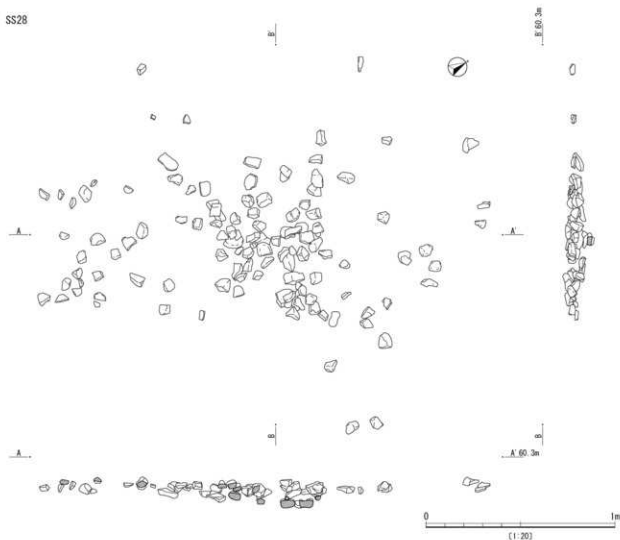
SS25



第 27 図 集石 25 号と出土遺物



第28图 集石26号・27号



第29図 集石 28号

集石 28号 (第29図)

I-14区のVb層上面で検出された。礫は約230×160cmの範囲に広がっており、特に中心部の約50×50cmに集中しているが、掘り込みはみられない。構成礫は119個で、頁岩が2点、凝灰岩が2点、安山岩が1点で、他はすべて砂岩である。角礫の破砕したものがほとんどで、約半数は赤色化している。炭化物は出土していない。平均の重さは84gであり、150g以下の小型のものが8割を占める。東側に集石27号が近接しており、石材の構成比率や大きさ等が似ており、関連があると考えられる。土器等の遺物は出土していない。

集石 29号 (第30図)

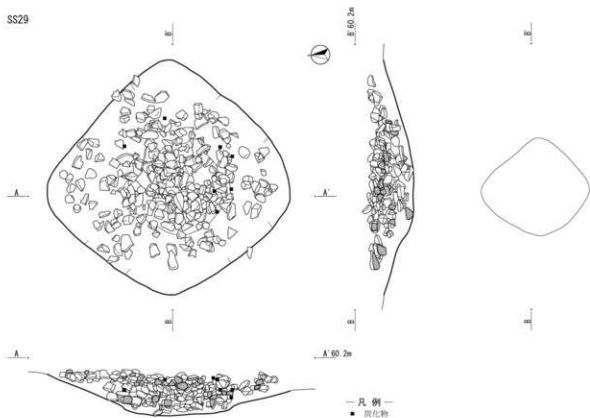
I-14区のVb層上面で検出された。礫は約110×100cmの範囲に密にまとまっている。平面形や掘り込みは形状となる。掘り込みの規模は検出面で100×100cm、床面で50×50cmであり、埋土は炭化物を含んだ、少量の黄色粒・白色粒を含む粘性の強い黒色土である。

構成礫は292個で、凝灰岩が2点、安山岩が2点、他はすべて砂岩である。平均の重さは51gであり、100g以下の破砕礫が9割を占める。炭化物は7点、礫間等より出土し、AMS年代測定を行ったところ、2σ暦年代範囲で7589calBC-7526calBC(95.4%)の結果が得られた。土器は出土していない。

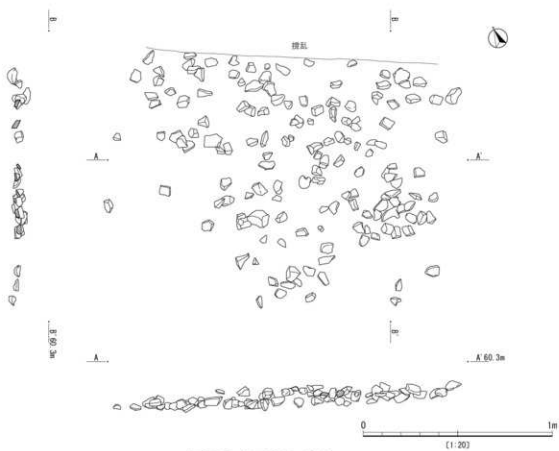
集石 30号 (第30図)

I-14区のVb層上面で検出された。東西方向に約200cm、南北方向には約130cm広がっているが、北側は擾乱を受けていたため、本来は更に広がりがあったものと推測される。礫が他の集石と比較して密である。掘り込みは検出されていない。構成礫は153個で、凝灰岩が1点、安山岩が2点で、他はすべて砂岩である。平均の重さは54gであり、角礫が破砕した小型のものがほとんどで、約7割は赤色化している。東側にある集石27～29号と近接しており、この付近は構成礫の数が多し集石が集中する。炭化物や遺物は出土していない。

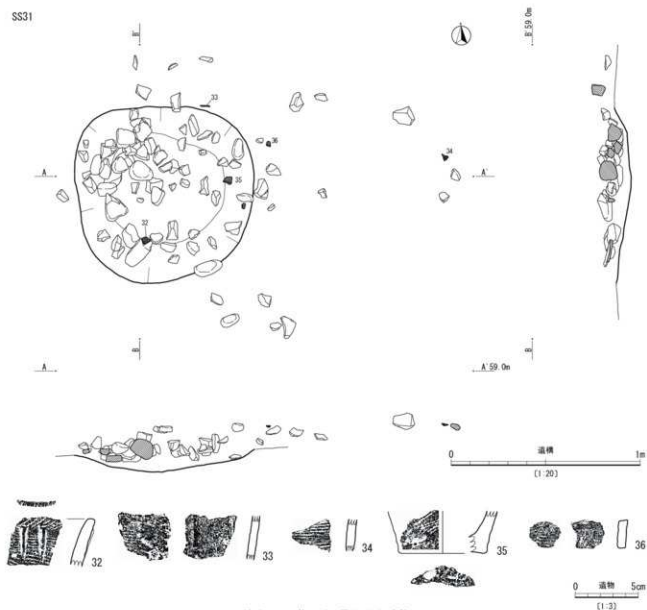
SS29



SS30



第30図 集石29号・30号



第31図 集石31号と出土遺物

集石31号 (第31図)

F-15区のVb層上面で検出された。礫は約180×140cmの範囲に広がっている。礫の集中部には約80×80cmの隅丸方形を呈する掘り込みがみられ、埋土は白色粒・黄色粒や微細な炭化物を含む黒色土である。構成礫は81個で、すべて砂岩である。平均の重さは190gであり、円礫や歪角礫が破砕したものが主体を占める。明瞭な炭化物は確認されなかったが、土器が6点出土している。

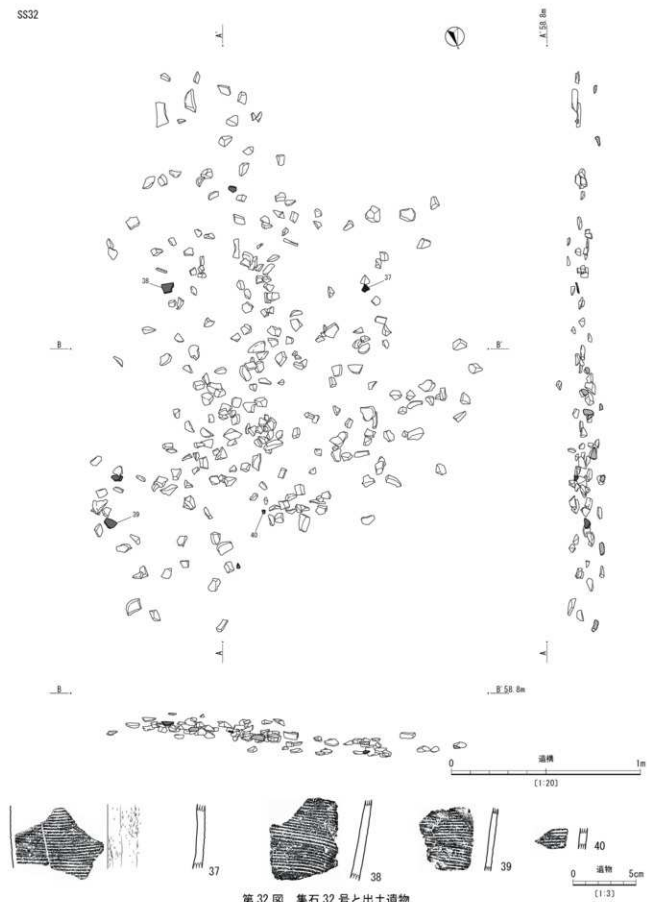
32～35は深鉢である。32は口縁部で、口唇部や口縁上端に貝殻刺突による刻み目が入り、その下に楔形突帯がみられる。33・34は胴部で、横方向の貝殻条痕が入る。35は底部で、外面は横方向にナゲ、その上から貝殻条

痕を施している。36は胴部片を再利用した円盤形土製品である。

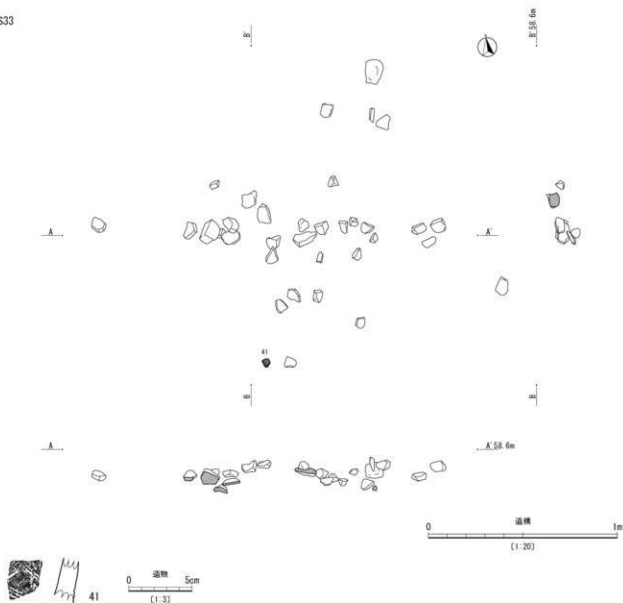
集石32号 (第32図)

F-15区のVb層上面で検出された。礫は約300×200cmの範囲に広がっている。礫が密になっている部分があるが、掘り込みはみられない。構成礫は254個で、すべて砂岩である。平均の重さは68gであり、200g以下の破砕礫がほとんどである。微細な炭化物は点在するが、明瞭なものは出土していない。集石31号に近接しており、関連があるものと考えられる。土器は7点出土している。

37～40はすべて深鉢の胴部であり、横方向の細かい貝殻条痕が施され、同一個体の可能性がある。



第32図 集石32号と出土遺物



第33図 集石33号と出土遺物

集石33号（第33図）

E・F-17区のVb層上面で検出された。礫は約200×140cmの範囲に散在している。掘り込みはみられない。構成礫は34個で、すべて砂岩である。平均の重さは136gであり、やや大きめの角礫もみられる。他の

集石と距離があるが、調査区西側境に近く、調査区外に関連する礫が広がる可能性がある。炭化物の出土はなく、土器が1点出土している。

41は深鉢の胴部で、斜方向の貝殻条痕が施される。

(2) 土坑 (7基)

土坑1号 (第34図)

H-6区のⅦ層上面で検出された。唯一調査区北側の集石群近くに位置する。検出面における平面形は約75×65cmの正円に近い楕円形を呈する。深さは検出面より35cm程度で、床面は約55×40cmの楕円形となる。埋土は色調等からⅥ層土主体と考えられる。遺物は出土していない。

土坑2号 (第34図)

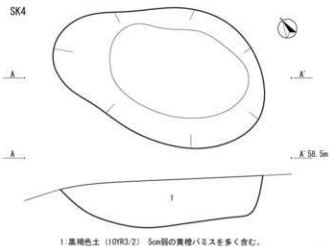
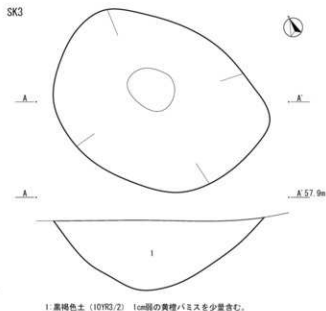
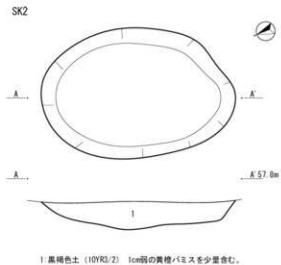
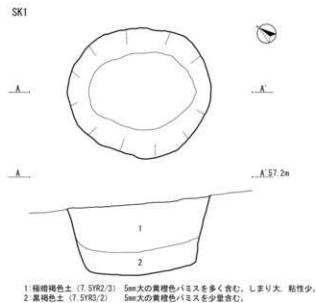
F-12区のⅦ層上面で検出された。集石18号の下位に位置しており、関連が考えられるが、礎等は出土していない。検出面における平面形は約100×70cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは15cm程度で、床面はやや凹凸のある楕円形となる。埋土は色調等からⅥ層土主体と考えられる。

土坑3号 (第34図)

F-12区のⅦ層上面で検出された。検出面における平面形は約110×90cmの隅丸方形を呈する。深さは検出面より35cm程度である。掘り込みの角度は緩く、床面は約20×20cm程度で他の土坑と比較し極めて小さい。埋土は色調等からⅥ層土主体と考えられる。遺物は出土していない。

土坑4号 (第34図)

G-13区のⅦ層上面で検出された。検出面における平面形は約115×75cmの楕円に近い不整形を呈する。深さは検出面より25cm程度で、床面は約75×45cmの楕円形となる。埋土は色調等からⅥ層土主体と考えられる。遺物は出土していない。



第34図 土坑1号～4号

土坑 5号 (第 35 図)

H-12 区の VII 層上面で検出された。検出面における平面形は約 165 × 85 cm の楕円に近い不整形を呈する。深さは検出面から 15 cm 程度で、床面は平坦で約 125 × 45 cm の楕円に近い不整形となる。埋土は他の土坑の埋土より黒色が弱く、どの層由来の土かは不明である。遺物は出土していない。

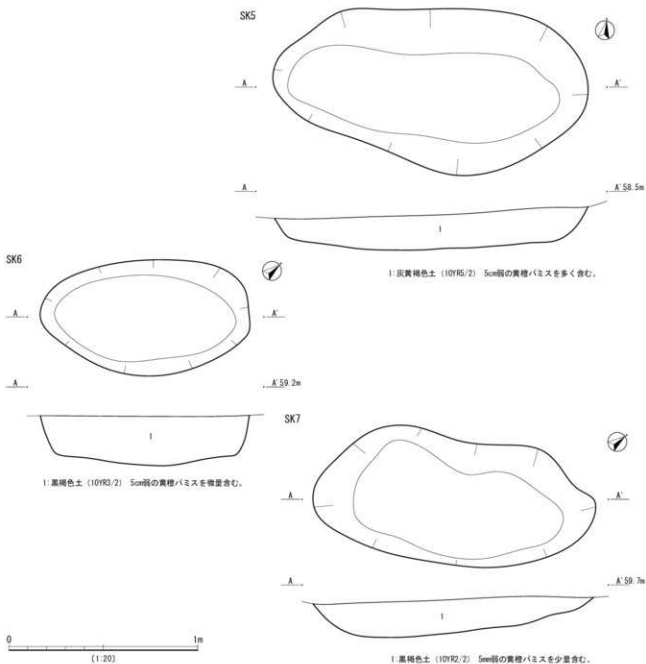
土坑 6号 (第 35 図)

H-13・14 区の VII 層上面で検出された。検出面における平面形は約 110 × 60 cm の楕円形を呈する。深さは

検出面から 25 cm 程度で、床面はやや凹凸がある約 95 × 45 cm の楕円形となる。埋土は色調等から VI 層土主体と考えられる。遺物は出土していない。

土坑 7号 (第 35 図)

I-14 区の VII 層上面で検出された。検出面における平面形は約 150 × 70 cm の不整形を呈する。深さは検出面より 20 cm 程度で、床面は平坦であるが、西側に向かってやや深くなる。埋土は色調等から VI 層土主体と考えられる。遺物は出土していない。



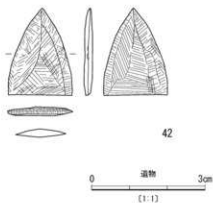
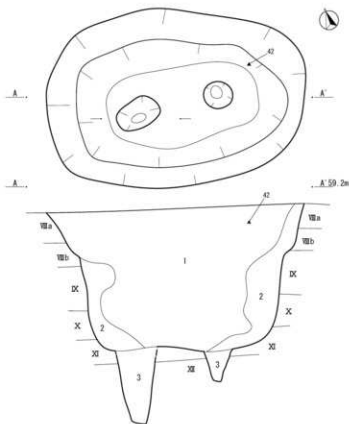
第 35 図 土坑 5号～7号

(3) 落とし穴 (1基)

H-13区のⅧa層上面で検出された。検出面における平面形は約135×95cmの隅丸方形を呈する。検出面からの深さ約25cm付近で段が付き、その下位は床面までほぼ垂直に掘り込まれている。床面はXI層で、約80×40cmの隅丸方形を呈し、平坦である。2つの明瞭な逆茂木痕がみられる。西側の逆茂木痕の深さは40cm程度、東側は15cm程度である。埋土に関しては、2及び3から、1の順に堆積したものと推定され、他の土坑と

比較し黒色が強いことからV層土と考えられる。埋土1中、検出面から10cm程度の深さで磨製石鏃が出土している。

42は磨製石鏃である。石材は頁岩で、厚さは2mm程度である。全体を磨き薄く仕上げている。鏃の中心から先端及び基部両端を結ぶ線を基準に、左右の側面をやや弧状となるように研磨し、二等辺三角形状に仕上げている。抉りはみられない。



- 1 黒褐色土 (10YR2/2) 少量の黄褐色が混入を伴む。
 2 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) と黒褐色土 (10YR2/2) の混合土。
 3 にぶい黄褐色土 (10YR7/3) 黒褐色土 (10YR2/2) を少量含む。



第36図 落とし穴と出土遺物

第4表 遺構番号振替表

縄文時代早期					
集石			土坑		
掲載番号	調査番号	掲載番号	調査番号	掲載番号	調査番号
SS1	SS8	SS12	SS3	SS23	SS24
SS2	SS11	SS13	SS9	SS24	SS21
SS3	SS13	SS14	SS31	SS25	SS22
SS4	SS12	SS15	SS30	SS26	SS20
SS5	SS10	SS16	SS29	SS27	SS16-2
SS6	SS7	SS17	SS32	SS28	SS16-1
SS7	SS1	SS18	SS27	SS29	SS14
SS8	SS6	SS19	SS28	SS30	SS15
SS9	SS5	SS20	SS26	SS31	SS17
SS10	SS2	SS21	SS25	SS32	SS19
SS11	SS4	SS22	SS23	SS33	SS18

中世	
大型土坑・土坑	
掲載番号	調査番号
大型土坑1	SK1
大型土坑2	SK9
SK8	SK2
SK9	SK7
近世	
土坑	
掲載番号	調査番号
SK10	SK3
SK11	SK2
SK12	SK5
SK13	SK4

3 包含層出土の土器

(1) 概要

包含層のV a層・V b層・VI層で出土している早期土器は1201点あり、うち371点を図化した。前葉から後葉まで多種あるが、主体となるのは円筒形を呈し、貝殻の条痕や押圧文が胴部にみられる前平式土器と志風頭式土器・加栗山式土器・小牧3A式土器・札ノ元VII類土器など前葉の土器である。型式分類のできなかつた破片が170点あり、この大半は前平式土器で、一部札ノ元VII類土器が含まれていると思われる。

前平式土器は円筒形土器で、胴部に貝殻条痕を施している。条痕は斜位(I類)と、横位(II類)、縦位と横位の2種あるもの(III類)とがある。口縁端断面はI類が三角形、II類・III類は矩形あるいは円形を呈している。口縁端近くに押圧文が付されるが、I類には1段のものが多く、II類になるとほとんど2段である。

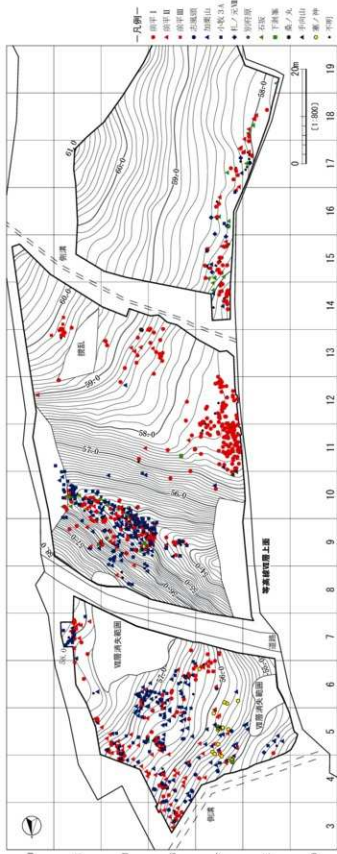
志風頭式土器は胴部に貝殻条痕の後、縦あるいは斜方向沈線文や二枚貝貝殻(以下、貝殻を省いて二枚貝と略す)押圧文を施した角筒土器である。

加栗山式土器には円筒土器と角筒土器とがある。胴部に貝殻条痕のあと、二枚貝腹縁押圧文を縦方向に施したもので、口縁部に楔形突帯が貼り付けられている。小牧3A式土器は楔形突帯を貼り付けるなど加栗山式土器と似ているが、角筒土器はなく、胴部の条痕を消したあと貝殻押圧文が付されない。札ノ元VII類土器は、小牧3A式土器と似ているが、条痕が浅い。貼付突帯は短かったり、細く、周辺は調整をしないものも多い。

他に中葉から後葉の別府原式土器、石坂式土器、下割峯式土器、桑ノ丸式土器、押型文土器、手向山式土器、塞ノ神A a式土器、塞ノ神A b式土器などが少量ずつ出土している。

別府原式土器は口縁端が丸みをおび、条痕は蛇行きみの横方向である。貼付突帯はない。石坂式土器は胴部条痕が綾杉状を呈するものである。下割峯式土器と桑ノ丸式土器は分厚い作りで、下割峯式土器は貝殻を連続して横方向に押し、桑ノ丸式土器は斜方向の短い条痕が施される。

前平式土器I類はF・G・6・7区にもやや集中しているが、G・H-13区と、F-11~15区など南半に多く出土している。II類は谷部にもあるが、7区以北に集中し、III類はI-13・14区付近に集中している。志風頭式土器は北側のF・G-3・4区に多い。加栗山式土器はE~H-4~6区の北側に多く出土しており、前平式土器に次いで多い。小牧3A式土器は谷頭に多い。



第37図 縄文時代早期の土器分布図

(2) 出土土器

① 前平式土器 (第38図～第46図)

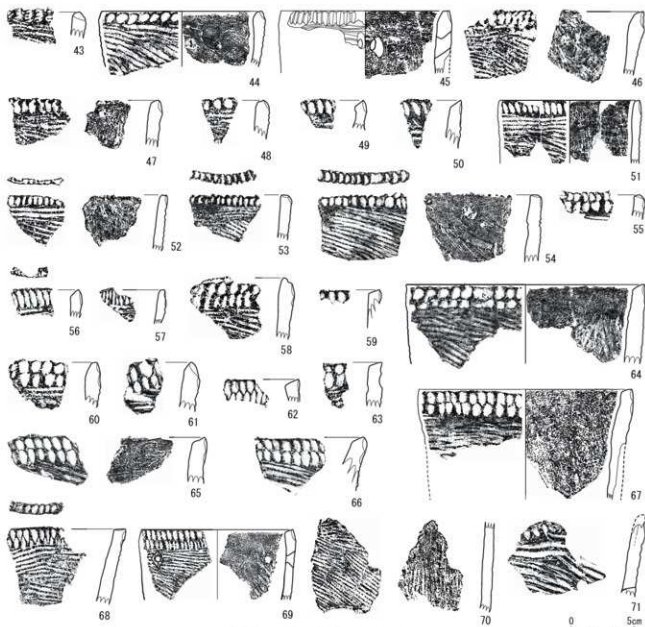
胴部に二枚貝腹縁条痕がある円筒形の土器である。口縁部は、外面から貝殻によって押し込んでいるが、そのまま内面が直立して三角形断面をなすものと、内面を三角形形状にナデて頂部が尖っているもの、内面を直にして平坦な口唇部を作り、そのままにしたものと、口唇部に押し込めるものがある。胴部条痕は斜方向のもの、横方向のものがあるが、条痕幅の狭いものもある。底は安定した平底である。内面調整は縦方向のケズリが多いが、ミガキに近い丁寧なもの、ナデ調整のものもある。

I類 (第38図～第41図 43～110)

外面条痕が斜位となるものである。口縁端は三角形状

を呈するものが多いが、矩形を呈し、口唇部に押し込めるものもある。口縁部は口唇部に貝殻腹縁を押し込めるもの、外面から内側に押し込めるもの、断面三角形を呈するもの、押し込める一段のもの、二段のもの、外面に押し込めたあと口唇部を平らにし、そこに刻みを施すものがある。図化した80点の他に210点の破片が出土している。

17は集石14号でも出土しているため、実測図は第19図に掲載した。口径21.8cm、底径14.8cm、高さ34.2cmの直に近い円筒形をしている。口縁端は平坦で、胴部は右下がりの傾斜の強い条痕だが、底部近くはそのあと横にナデている。条痕のあとと口縁部に縦方向の貝殻押し込めが1段みられる。内面は斜位の貝殻条痕のあととケズリに



第38図 縄文時代早期の土器 (1)

(1-3)

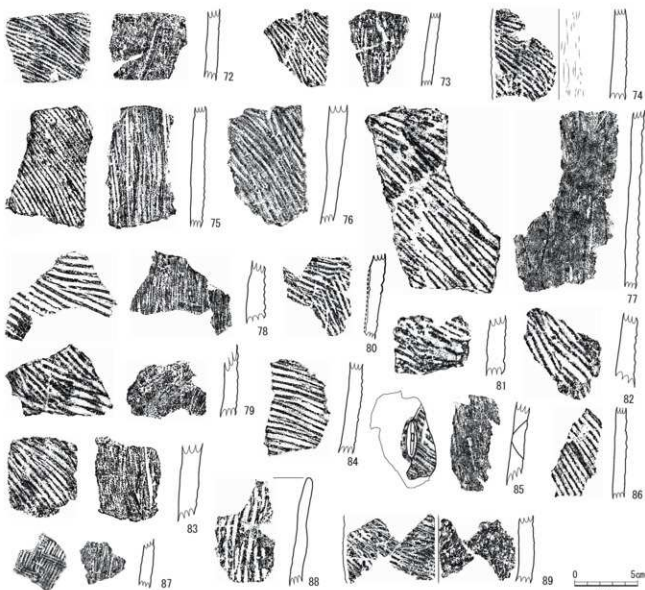
よって仕上げ、口縁近くでは部分的に貝殻条痕が残り、胴部の一部にも条痕がみられる。胴部から底部へは丸みをもって移り、底は丁寧にナデている。

43は内面横ナデ、外面横条痕のあと口唇部に二枚貝腹縁押圧を施すものである。

44～56は外面に条痕を施したあと、口縁端に一段押圧文を施している。小型のものが多く、押圧文は木の実様の丸いものを押したものと、二枚貝腹縁を押したものの(46・47)、枝状の細いものを押したものとがある。口径は44が12.8 cm、45が13.0 cm、51が11.0 cmと小型である。口縁端断面は三角形に近いが、51や52のようにやや矩形を呈するものもある。条痕は概して粗い調整である。胴部内面は縦方向のケズリだが、口縁近くは横ナデ調整をしている。45は内面口縁端近くを横方向に丁寧にナデ、口縁端を断面三角形にしている。外面は広く

剥脱し、口縁端近くに補修孔がある。外面から擦切孔を穿っているが、分厚いためか、内面からも擦切孔を穿っており、すれ違いの孔となっている。胎土にやや多くの茶石が含まれている。49・50・56の口縁内面は強くナデているために断面が三角形状を呈している。52～56は口縁端断面が矩形となり、口唇部に刻みが施されている。52・56の押圧は浅いが、53～55は深くしっかりしている。53は口縁端外面に二枚貝押圧文、口唇部に刻みが施されている。54・55は外面口縁端近くと口唇部に木の実様の丸いもの押圧文が施される。54の内面は斜方向のケズリで調整しているが、口縁近くは横方向に丁寧にナデている。

57～71は口縁端の押圧文が2段になるものである。押圧文は木の実様の丸いものと、巻貝殻頂のもの、二枚貝腹縁のものがある。口縁端内面は丁寧にナデて、口

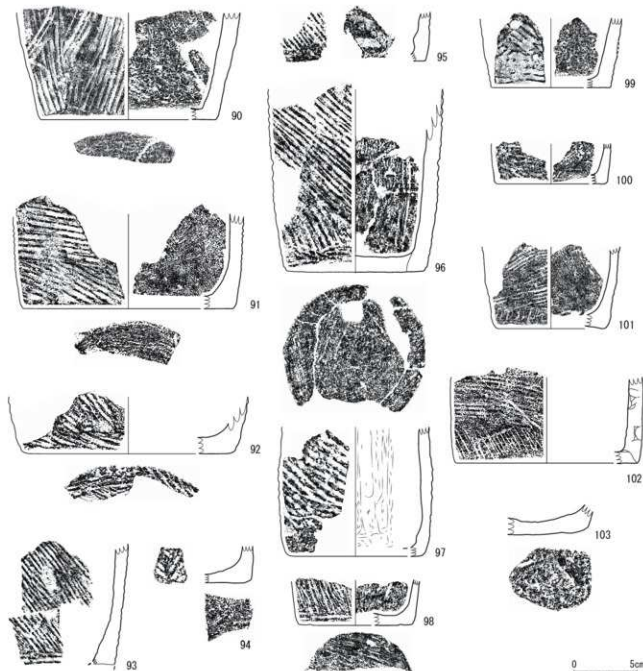


第39図 縄文時代早期の土器(2)

縁端部の断面を三角形に作っている。64の口径は19.0 cm、67の口径は17.0 cmと中型である。67の焼成度は良いが、外面剥脱が目立つ。68は外面押圧が2段になっているが、押圧は上段から下段へとし、そのあと条痕を施しているため下段の押圧文下部は消えている所がある。破片の右下部に擦切技法による補修孔がある。69は口縁端近くでやや内湾する器形で、外面には細い右下がり、横方向の条痕が施されている。口縁端近くには縦方向の貝殻押圧が2段に施され、そのあと口唇部は丁寧にナデている。内面は横あるいは斜方向の丁寧なナデ整形である。口縁付近に補修孔がある。外面から擦切り

によって孔をあけ、そのあと円形に整えている。70・71は口縁端が欠けている。

胴部(72～89)の外面は多くが右下がり条痕である。78・84のように横位に近いものと、75・76のように縦位に近いものもある。72～76・86などは幅狭で浅いが、77～85は幅広で深い条痕である。特に77は深い。内面は浅い縦方向のケズリ調整が多いが、74・76のように深い段となるものもある。74・76は硬質で、74は直径が10.5 cmほどである。87は左下がりの細い条痕のあと、部分的に右下がり条痕がみられる。88は白色石や長石・雲母などを多く含む硬質の土器で縦方向条痕であ



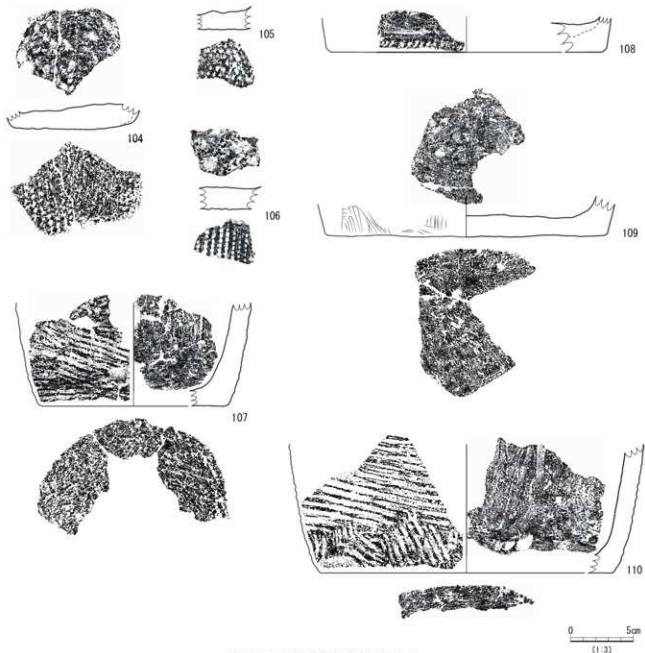
第40図 縄文時代早期の土器(3)

る。内面は一部剥脱しているが、オコゲが付着している。89は底に近い破片で、直径が14.5 cmほどである。

90～110は底部あるいは底部近くの破片である。底部は安定した平底で、胴部からやや丸みをおびて移っている。底径は8.5～17.0 cmと大小様々である。90～94は底部まで条痕が施され、92の底は網代状圧痕のあと条痕様のナデである。95～102は底部近くを横方向にナデている。95の胴部外面は幅の広い条痕であるが、底近くは丁寧にナデている。96の胴部外面は深い右下がり条痕だが、底部近くは横方向の条痕となる。円盤状の底部と、筒状の胴部を貼り付ける製作法である。胴内面の剥脱が目立ち、内面にはオコゲが付着している。底

はハケ目状ナデである。97は幅広の条痕である。98は内外とも磨滅している。外面は幅狭の条痕で、底近くに横方向の2条条痕がある。底には圧痕があるが、丁寧にナデ消している。101の胴部外面は浅くて幅の狭い右下がり条痕で、底近くに縦方向の刻み目がある。102は右下がりの細沈線が施されている。103の外底は網目状圧痕で、白粉が付着している。104・105の内底には指頭状圧痕があり、底は格子状圧痕のあと繊維状ハケナデで仕上げた分厚い底である。106の外底には格子状圧痕が付いている。

107～110は大型の円筒土器である。107は底径15.0 cmの胴部下半から底部の破片で、外面は底近くまで斜方



第41図 縄文時代早期の土器（4）

向だが、底近くは横方向の幅広条痕である。底部は貝殻で調整したあと、丁寧にナデている。ややずれている。胴部内面は縦方向のケズリで、底は丸くナデている。白色石粒が多く含まれている。108は内外摩耗した破片で、分厚い底である。外面の底近くは横方向となり、底との角に貝殻押圧が施されている。109の底部は底径22.4cmで丁寧にナデて仕上げ、内面には指頭圧痕がみえる。110も107と似た内部整形、胎土だが、外面の底部近くは縦あるいは右下がりの短い条痕を施している。底径は23.4cmである。

II類 (第42図～第45図 111～175)

外面条痕が横方向となる類である。口縁断面形状は矩形を呈し、多くの口唇部には押圧文が施されている。底近くは右下がりの条痕となる。210点出土している。

111は大型のもので口縁断面がやや内傾している。口縁近くは木の実様のもので2段に押し入れ、口唇部には棒状のもので押している。112～115は口唇部に刻み目がない。112・113は1段の口縁押圧である。112の内面は丁寧なナデ整形だが、そのあと口縁部近くをケズって口唇部を幅狭くしている。茶石を多く含む胎土である。113は薄い矩形となっており、114は口唇部が薄くなっている。114・115は2段の押圧である。

116～118は口縁部に1段の押圧のあるもので、119～136は口縁部近くに2段の押圧がある。口唇部に押圧文が施されている。口唇部の押圧文はほとんどが直に押しつけて浅い。119～122の押圧は上段が直、下段が左下がりであるが、123の押圧は上段が直、下段が右下がりになっている。

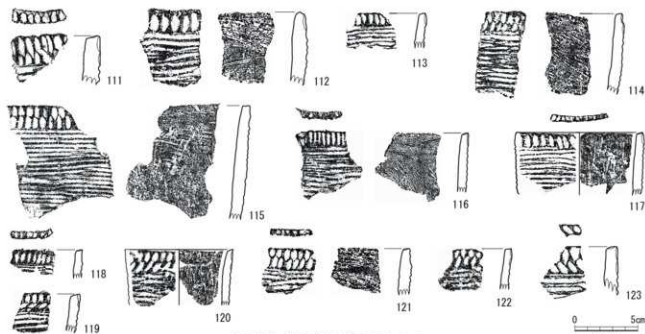
124は口径20.2cmで口縁近くに2段の幅広押圧が巡っ

ている。幅広条痕のあと上段から下段の順に押圧を施しているが、下段に比べて上段のほうが幅広である。内面は縦方向のケズリだが、口縁近くは斜方向から横方向へ移っていく。ケズリの施文具は幅7～9cm程で、外面にスガが付着している。125は焼成度の良い破片だが、内面・外面とも一部剥離している。口縁の押圧は下段から上段の順に押し、口縁部端の調整をしている。128は小型の土器で内面が剥離しており、口縁下部に擦切技法による補修孔がある。133は口縁部から胴部の破片で、焼成度が良く、外面の厚さ半分ほどが広く剥離している。口縁断面は矩形を呈し、口唇部と外面には木の実状の押圧痕がある。口唇部の圧痕は斜位に施され、外面は剥離のため1段しか残っていないが、2段になると思われる。内面は幅5～8mmほどの施文具で縦方向に丁寧なケズリがみられるが、口縁近くのナデがないため、部分的に段となる所もある。

134～136は口縁端が欠損している。134は内外とも表面が剥離している。

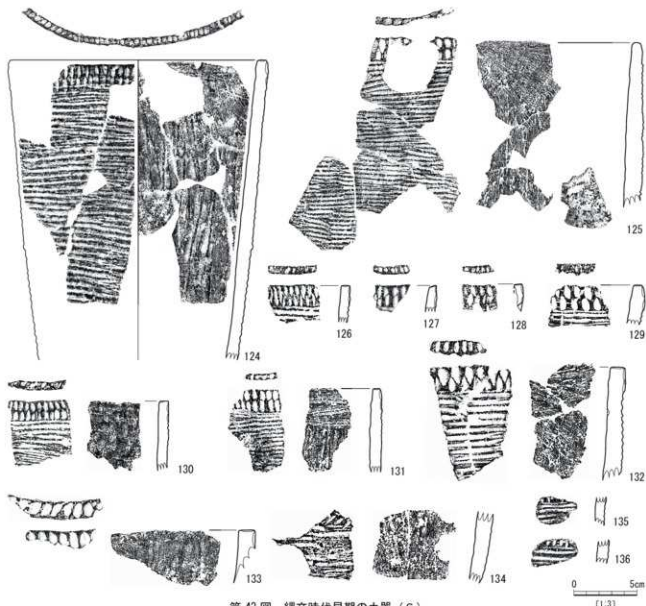
137～160は胴部で、条痕幅の狭いものと広いもの、深さの浅いものと深いものがある。内面調整は多くが縦方向のケズリだが、152などのように幅の狭い筋状となるものもある。137の内面はにぶい橙色を呈しているが、まだらに赤色っぽい筋がみられる。160は胴下部から底部の破片で、外面条痕は横方向だが、底部近くは右下がり条痕となる。上から下への条痕仕上げである。

底部(161～175)は安定した平底で、丁寧にナデられている。底径は8.0cmのものから14.4cmのものまである。胴部の横方向条痕が底まで至るものと、底近くは斜方向になるものがある。161は小型の薄いもので、



第42図 縄文時代早期の土器 (5)

[1:3]

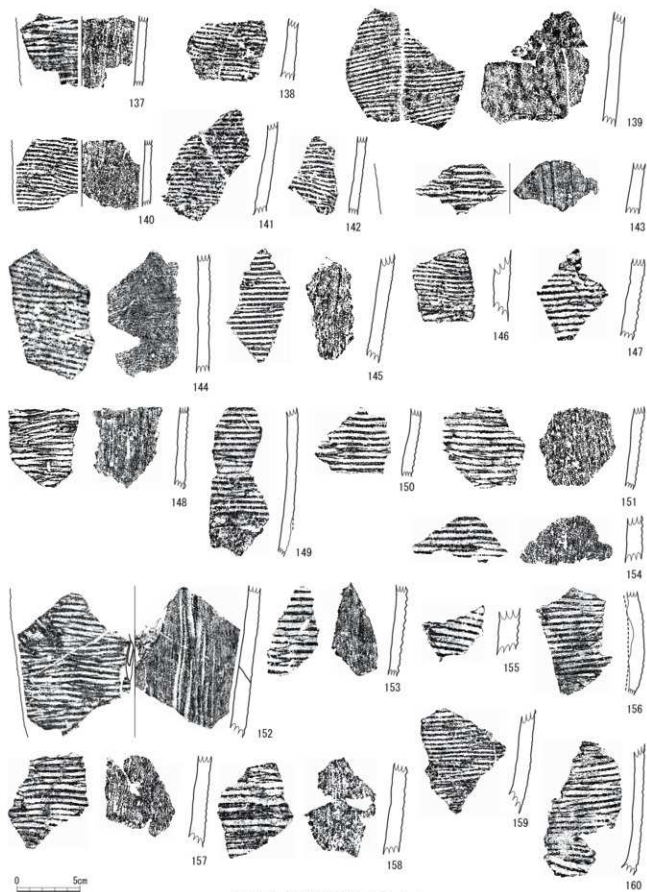


第43図 縄文時代早期の土器（6）

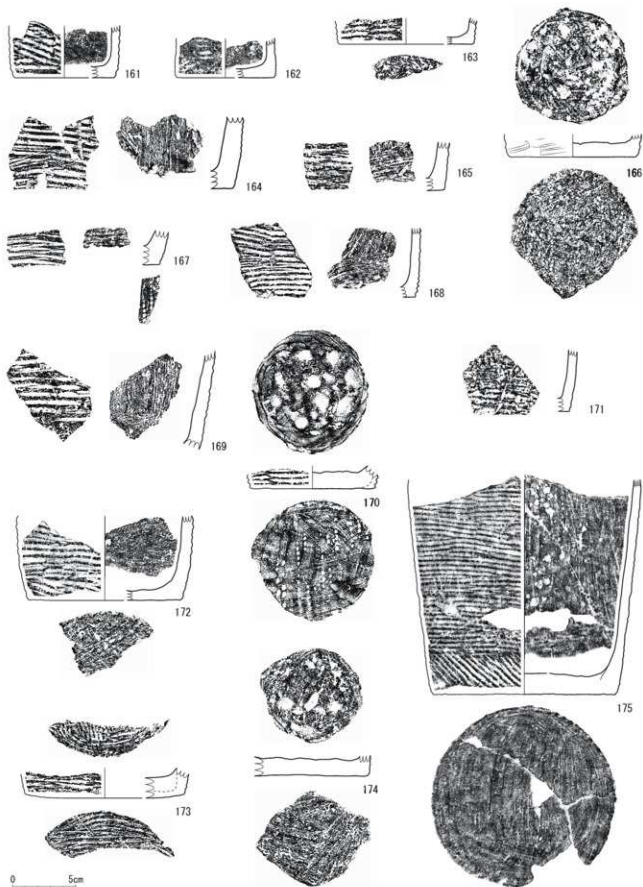
横方向条痕だが、一部分は底近くに斜方向条痕がみられる。162の外底は底近くを条痕のあとナデている。165・168の底には白粉がある。166の底は敷物痕を丁寧にナデ消しており、内底は押ししたあとナデで消している。169は底部近くをナデている。170は円盤状底部のまわりに円筒状の胴部を貼り付けている。外底には圧痕があり、そのあとナデ消している。内底には指頭状押し圧痕があるが、その中には繊維様圧痕らしきものもみえる。172の外底底近くは右下がり条痕となっている。内面にはオコグが付着している。173は分厚い底で、外底・内底とも条痕様ナデである。174の内底にも押し圧痕がある。作りは170と同じである。175の底径は14.4 cmとやや大型である。筒状の胴部と円盤状の底部を貼り付けており、底部内面は広く剥脱している。底部近く外底は斜位条痕となる。

Ⅲ類（第46図176～178）

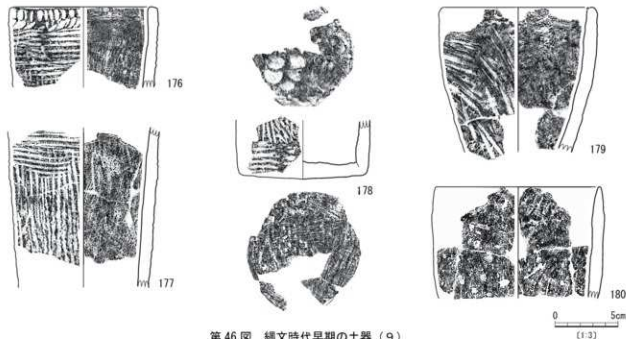
胴部条痕の上方が横方向、下方が縦方向となるものである。接合はできないが、器形・大きさ・色調・胎土などから同一個体と思われる。口径11.6 cm、底径9.5～10.0 cmと小型のもので、高さは20 cm前後かと思われる。口縁端の断面は矩形を呈しているが、口唇部の平坦整形はしていない。口縁端近くに2段の木の実様の押し文が施されているが、上段が縦方向、下段が右上がり方向である。上段から下段へ、下段は右から左へ押ししている。口縁端から6 cmほどは横方向、その下は縦方向条痕だが、底部近くは再び横方向の条痕である。底部外底は格子状圧痕を繊維状のものでナデ、白粉が付着している。外面上部にはススが付着している。内面は丁寧に縦方向のケズリ様ナデだが、口縁近くは丁寧にナデ仕上げである。円盤状底部に筒状の胴部を接合する作りで、接合部がや



第44図 縄文時代早期の土器（7）



第45図 縄文時代早期の土器(8)



第46図 縄文時代早期の土器(9)

やくぼんで、ここにオコゲが付着している。底部内面全体に指状の押圧痕がみられる。底部を作る時にナデから指で仕上げたものと思われる。

鉢形土器(第46図179・180)

口縁が内傾し、低い器形である。88も同様のものの可能性がある。179は口径12.0cmで、口縁端は丸みをおびている。外面は右下がり条痕だが、横あるいは縦に近い角度のものもある。口縁端近くに横向きの二枚貝押圧文が1条ある。180は口径13.0cmの筒状となり、口縁端は細くなっている。内外とも粗い縦ナデ・ケズリ仕上げだが、内側がやや丁寧である。雑な作りである。

② 志風頭式土器(第47図181～192)

地文が横あるいは斜方向の貝殻条痕文で、その上に沈線文や二枚貝押圧文を施す二重施文の土器で、いずれも角筒土器である。口唇部には刻みがある。多くの外面にスガが付着している。

181～185は口縁端近くに二枚貝押圧文を施すものである。181・182は同一個体である。丸みをおびた土器で、地文は斜方向貝殻条痕である。口縁端近くに縦方向の貝殻押圧をしたあと、その下に二枚貝腹縁による押圧文を施している。胴部は角部に巻貝殻頂の押圧があり、その間には2条の二枚貝腹縁によるX字状などの斜方向押圧文と、貝殻押圧文がある。183は角部の破片で、口縁端近くに斜方向の、角近くに縦方向の二枚貝押圧がある。184も斜方向条痕を地文とする破片で、口縁端近くに縦方向の貝殻押圧を施したあと、その下に横方向の細い貝殻押圧が施されている。角には縦方向に竹管様押圧が連続して施され、角から斜方向に二重の二枚貝押圧が施さ

れている。185は口縁端近くに横方向の二枚貝腹縁押圧を3段に施している。地文は右下がり方向の貝殻条痕で、その上に縦方向の鋸歯状沈線文を引いている。内面は縦方向のケズリだが、口縁端近くは横方向にケズっている。

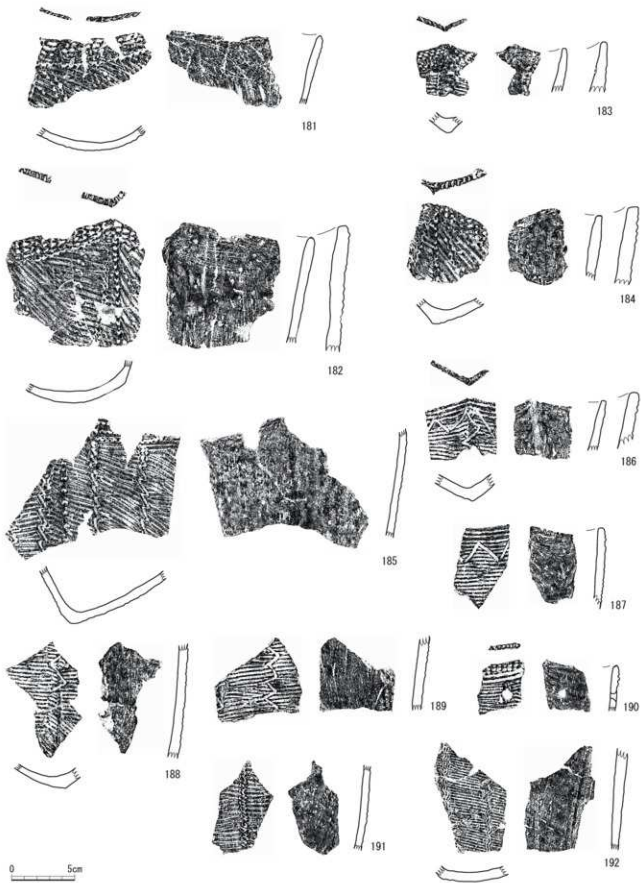
186～189は横方向の貝殻条痕のあと、口縁端近くに1条の横方向鋸歯文を引き、角と中央付近に1条の縦方向鋸歯文を引いている。188の縦方向鋸歯文は上半のみである。内面は丁寧な縦方向ケズリで、口縁近くはそのあとナデている。187はやや丸みをおびているが、角となる186と188は矩形を呈する。187の口唇部はナデているが、186の口唇部には浅い刻みがみられる。

190の口縁端近くは縦方向二枚貝押圧のあと、2条の横方向沈線文を引いている。口縁下に直径3mmの円形補修孔がある。

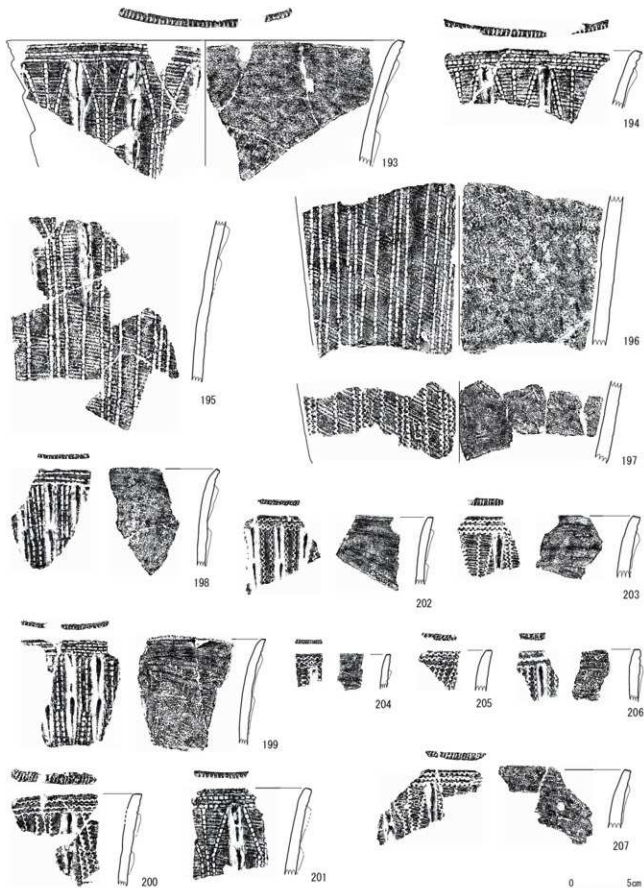
191・192はやや丸みをおびた胴部である。191は横方向条痕の上に二枚貝腹縁をくっつけて2列に押し込んでいる。192は細い斜方向条痕の上に角と中央に3列の柳描状沈線が縦方向に描かれている。

③ 加栗山式土器(第48図～第53図193～275)

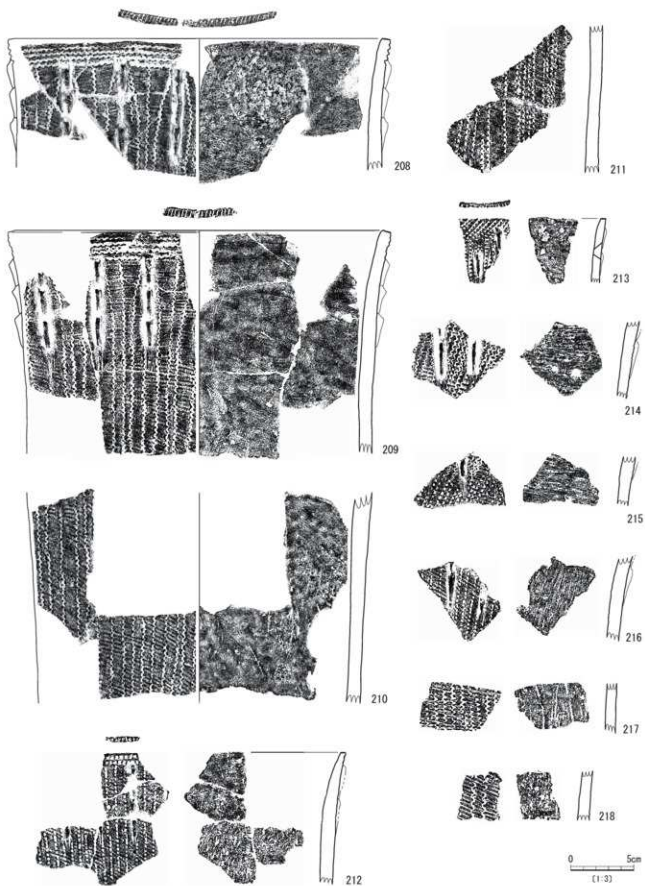
安定した平底からやや外傾して立ち上がり、口縁部はまっすぐ伸びるものと、外反するものがある。円筒形のものが多いが、角筒形のものもある。胴部は斜方向、あるいは横方向の貝殻条痕で、そのあと二枚貝腹縁押圧を縦方向に連続して施している。口縁部には楔形の突帯を2～3段ほど貼り付けており、楔形突帯間の貝殻押圧はY字状となるものもある。口唇部には刻みがある。底近くの外面には縦あるいは斜方向の沈線が施され、底部の調整は丁寧である。内面調整は縦あるいは斜位のケズ



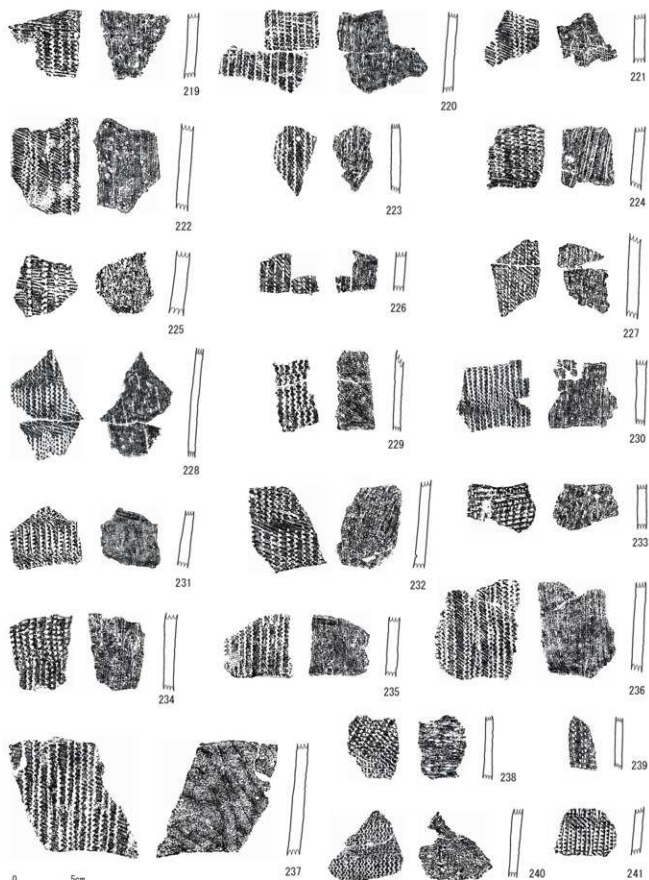
第47図 縄文時代早期の土器 (10)



第48図 縄文時代早期の土器 (11)



第49図 縄文時代早期の土器 (12)



第50図 縄文時代早期の土器 (13)

リだが、丁寧にナデたものもある。口縁近くは横ナデとなっている。

193～196は接合できないが、器形・文様・大きさ・色・胎土などから同一個体と思われる。口径は31.6cmで、外へ開きながら立ち上がっている。口縁端には3段の横方向二枚貝腹縁押圧文が施され、そのあと3段の短い楔形突帯の貼付文が付される。上端の楔の上は貝殻で押して、両側面はナデている。腹縁押圧文は寝かせて押しており、口縁部近くはY字状を呈しているが、胴部はまっすぐ押している。

197は大型の胴部で、縦方向押圧が直に押されている。

198～207は口縁端近くに3段の二枚貝腹縁押圧文のある口縁部破片である。198・199のようにやや外反するものと、200～207のようにまっすぐ外へ開きながら伸びるものがある。楔形突帯は長いものと、短いものがある。楔形突帯の側面はナデているものが多いが、200や202・206はナデていない。楔形突帯間の狭いものは縦方向貝殻押圧がまっすぐ押されているが、201・203・207は上の方がY字状に押されている。貝殻腹縁押圧は直に押すものと、198・199・201のようにやや寝かせて押すものがある。内面は横ナデ調整である。204は小型の深鉢で、器厚も薄い。205は小破片のため楔形貼付文の有無が定かでないが、胴部押圧は左下がりの斜

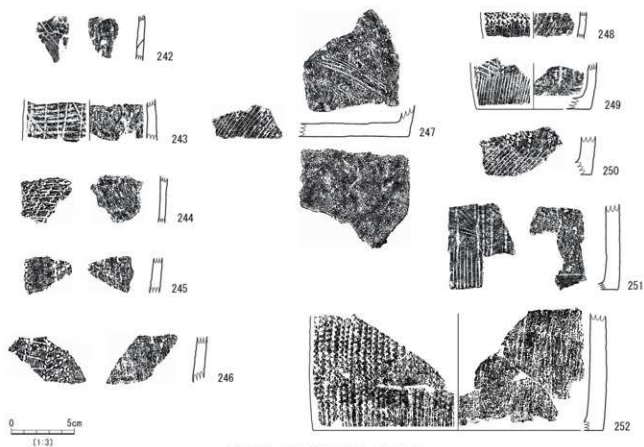
方向で、口唇内面がやや丸みをおびている。

208～211は接合できないが、器形・文様・大きさ・色・胎土などからみて同一個体と思われる。口径は30.4cmで、やや外反ぎみに立ち上がっている。口縁端近くに4段の横方向二枚貝腹縁押圧文が施され、そのあと3段の短い楔形貼付文が付されるが、貼付文の側面はナデられ、上端は二枚貝を押ししている。楔形突帯を貼り付けたあと、楔形突帯間に3列、楔の下に1列の二枚貝腹縁を直に押ししているが、楔形突帯間押圧の口縁端近くはやや外へ開いている。この押圧のあと楔形突帯の側面調整をしている。

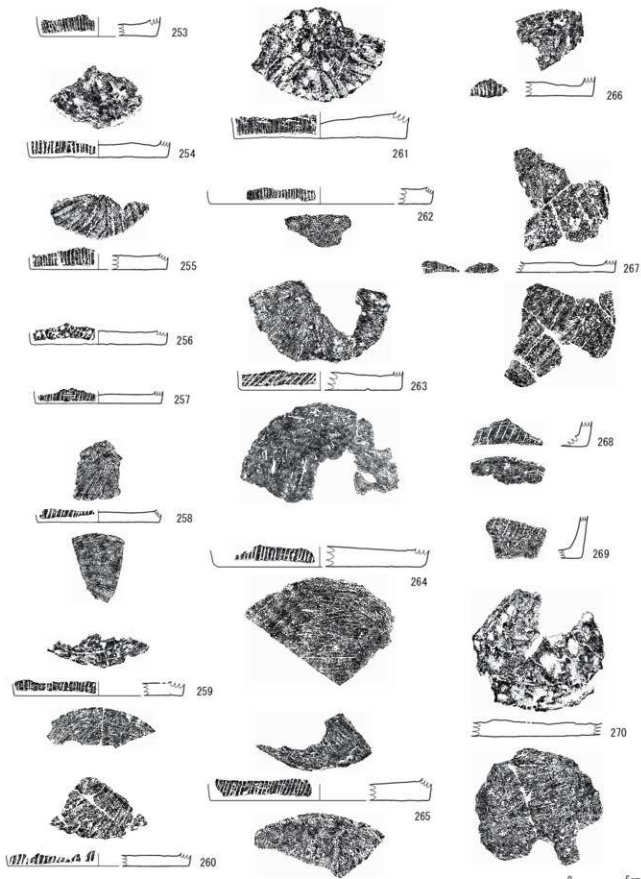
212はやや外反する口縁部だが、胴部の厚さに比べて口縁端は薄くなっていく。口縁端近くに二枚貝腹縁を寝かせて横方向に2段押圧している。斜方向条痕のあと、短い楔形突帯を3段貼り付け、突帯間に3列、突帯下に1列、二枚貝腹縁を寝かせて縦方向に押圧している。

213は小型の土器で、口縁端近くに左下がり方向の二枚貝腹縁押圧文があり、その下には縦方向に二枚貝腹縁押圧が密に付され、そのあと短い楔形突帯が幅狭く、割と雑に貼り付けてある。口縁近くに擦切りによる補修孔がある。

214～216は楔形貼付文のある胴部上半の破片である。214は二枚貝腹縁を斜方向に密に押し、そのあと楔形突



第51図 縄文時代早期の土器 (14)



第52図 縄文時代早期の土器 (15)

帯を貼り付けている。215も斜方向条痕のあと、二枚貝腹縁の押圧を施しているが、口縁近くは直に、その下は寝かせて押し、そのあと突帯のまわりをナデている。216は斜方向条痕のあと、長めの楔形突帯を貼り付け、そのあと突帯間に3列、突帯下に1列の二枚貝腹縁を押ししている。そのあと楔形突帯のまわりをナデている。

217～246は胴部破片で、斜方向条痕のあと、二枚貝腹縁を直に押ししたもの、寝かせて押ししたものがある。縦方向に並行して等間隔に近く押すものと、1列と3列に交互に押すもの(221～223)などがある。218は大型の貝殻を深く押ししている。228・231・232・241は押圧が途切れている。228・231の原体は長さが2.5～3.0cm程である。228は2.5cmの間に8ほどの肋がある。225～227は寝かせて、231は斜方向に押ししている。234は内外とも摩耗している。238の押圧は上の方が寝かせ、下の方が直と向きを変えている。242は薄手の土器で、縁切りによる補修孔が穿たれている。243は横方向条痕のあと、斜格子の沈線が引かれている。径10.5cm程と小型である。244は薄手の土器で、横方向条痕のあと斜方向の二枚貝腹縁押圧がみられる。245・246は縦方向押圧で区画し、そのあと左下がり押圧を施す部分と丁寧にナデた無文部を交互にしている。

247～252は底近くの破片である。縦あるいは斜方向の二枚貝腹縁押圧のあと、底近くに斜方向・縦方向の沈線が引かれる。胴内面は縦方向の丁寧なケズリで仕上げられており、底も丁寧にナデている。248は胴部外面の押圧が密な小型土器である。249も底径9.0cmと小型である。252は底径23.0cmと大型で、密な二枚貝腹縁押圧のあと、縦方向の沈線が施されている。

253～270は平坦な底部である。底径は9.2～11.0cmの小型のもの(253～258)と、13.0～17.6cmの大きなもの(259～265)とがある。立ち上がり部分には沈線が引かれているが、直立するものと、斜位のものがある。269はナデて押圧文を消したままにしている。底部は丁寧にナデたものが多く、254・263・266などの一部にミガキも見え、264・270は織維状ハケナデである。内底部は254・261・270のように指線圧痕を残しているものもあるが、多くは丁寧にナデている。262は

白石を多く含むなど胎土・色調が異質である。

271～275は角筒土器である。胴部(271～273)は右下がり条痕のあと、二枚貝腹縁を縦方向に押ししている。272はやや丸みをおびている。273は下に左下がり沈線が施された底部近くの破片で、274は角に横方向の細沈線が施された角の破片である。275の底近くは縦に近い左下がり沈線が施される。底は丁寧にナデられ、白粉が付着している。

④ 小牧3A式土器(第54図・第55図276～313)

安定した平底からやや外傾しながら立ち上がり、外反しながら口縁端部に至る器形をしている。口縁部には二枚貝腹縁押圧文が横方向に走り、その下に楔形の突帯文が貼り付けられている。口唇部には刻みが、胴部には縦方向の二枚貝腹縁押圧文が密に施されている。内面は縦方向のケズリだが、口縁付近は横方向である。図化していない破片が他に121点ある。

276～299は口縁部付近の破片である。276は口縁端近くに3段の浅い横方向貝殻押圧が、胴部には縦方向の二枚貝腹縁押圧文が付されるが、押圧文は直に深く押すものと、浅く押すものが交互にされる。その幅は1.5～3.0cmほどで、上方から下へ押されている。そのあと長い楔形突帯が貼り付けられ、上端は押圧され、側面はナデられている。内面は下半が縦方向、上半が横方向の丁寧なナデ整形である。277・278の外側は丁寧にナデたあと、やや広めの貝殻腹縁押圧が施され、そのあと楔形突帯が貼り付けられている。突帯の側面は丁寧にナデ、上も貝殻で押している。279～281の突帯は細く、頂部は二枚貝、あるいは巻貝殻頂部で突き刺している。279の押圧文は細く密である。280の口径は17.4cmと小さい。

282～285は接合できないが、二枚貝押圧が似ており、内面が明赤褐色とにぶい黄褐色の縞状になっていることから同一個体と思われる。口縁端近くには3段の横方向押圧文があり、胴部には角のはっきりした矩形押圧文が縦方向に付されている。その上に2段以上の楔形突帯が貼り付けられ、頂部は刺突されている。口縁直径は22.2cmで、口縁部周辺にはススが付着している。底部近くは右上がり沈線が施されている。



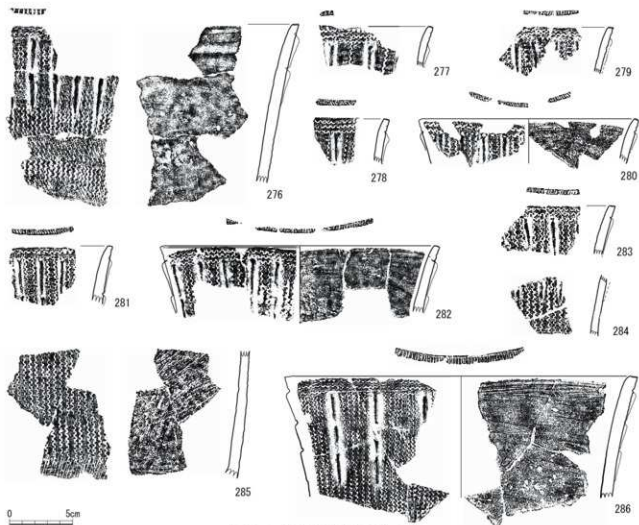
第53図 縄文時代早期の土器(16)

286は口径28.0cmと大きな土器で、3段の楔形突帯が貼り付けてある。楔形突帯の頂部は押されているが、周囲の調整はない。外面にはススが付着している。内面調整は丁寧で、口縁近くはミガキに近い。

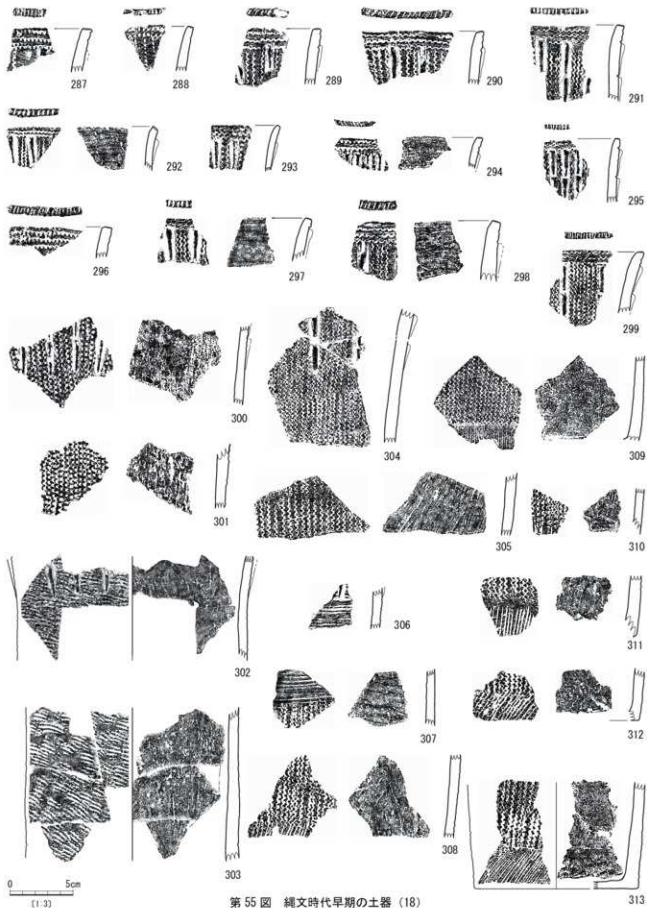
287・288は寝かせた押圧である。288は小破片のために貼付突帯の様相が不明で、口縁端押圧は2段である。289・290の口縁端押圧は直に押しであり、楔形突帯は長い。突帯周辺の調整はない。291の外面押圧は直で浅い。貼付突帯の上端は丁寧に押ししているため、重なる突帯の下端は楔形をしていない。口唇部や内面調整は丁寧である。292～295の貼付突帯は細かったり、短く、密に付いている。頂部は押ししている。292の押圧はくっきりしているが、293～295は押圧のあとナデており、押圧文がはっきりしない。296は口縁端の破片で、貼付突帯の様相は不明である。横方向の3段押圧は下から押し上げるように押ししている。297～299は分厚い破片で、大型のものかと思われる。いずれも内面調整は丁寧である。297の貼付突帯は太めで、上を押ししている。押圧は浅めで、特に下の方は細かい。298は橙色がかった色を

呈して、突帯のまわりは丁寧にナデている。299の突帯は器厚の割に細く、突帯内の貝殻押圧はざっくりと詰まっている。

300～307は胴部である。300と301はにぶい黄橙色を呈する硬質の破片で、同一個体と思われる。300は上部の破片で、直に押しした貝殻押圧が密にみられる。スマートな楔形突帯が貼り付けてあり、上を押ししている。301はやや下の破片と思われる、押圧が寝かせて押ししている。内面は縦方向のケズリだが、上の方はそのあと丁寧にナデている。302は径が18cmほどで、貝殻押圧が横方向に押しである。突帯は鋭い楔形を呈し、両側縁は丁寧にナデている。303は弧状の貝殻押圧が横あるいは右下がり方向に押しされ、直径が17cmほどである。304は外へ開く器形をした大型の土器である。楔形突帯は短く、楔形突帯間には押圧がある。305は内面が明赤褐色とにぶい黄橙色の縞状になっていることから282～285などと同一個体の可能性がある。外面にはススが付着している。306・307は外面が黒色がかった色を呈し、縦方向の密な細かい貝殻押圧を施した後、浅い横貝殻条痕で押圧



第54図 縄文時代早期の土器 (17)



第55図 縄文時代早期の土器 (18)

文を部分的に消している。細い楔形突帯を貼り付けている。

308～312は底近くの破片で、いずれも密に貝殻押圧を施し、端部近くには縦方向、あるいは斜方向の沈線が引かれている。311は底近くの押圧文をナゲ消した後、沈線を施している。

313は底径が13.0cmで、底近くの貝殻押圧は深く押しているが、浅くナゲ消した部分と、そのまま残したところがあり、文様に段がある。底近くの斜方向沈線は押圧文を完全にナゲ消した後、下から上へ丁寧に引いている。底は丁寧にナゲしており、底の厚さは薄い。

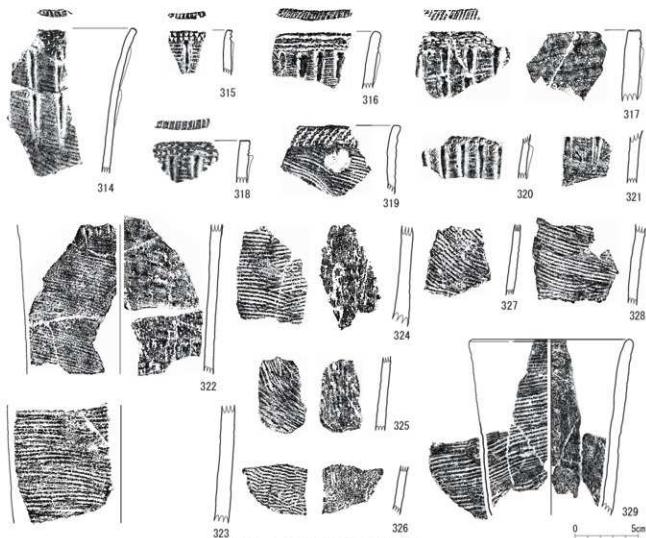
⑤ 札ノ元VII類土器（第56図314～328）

底部からやや外へ開きながらまっすぐ伸び、口縁部はやや外反するか、そのまま伸びる。口縁部に横方向の二枚貝腹縁押圧文が2～3条施されるが、斜方向あるいは二枚貝背部の押圧を施すものもある。胴部は斜位、あるいは横位の貝殻条痕が施してある。条痕幅が狭く、浅い

ものである。口縁部下には押圧文、条痕のあと楔形、あるいは長楕円形の突帯が2段ほど貼り付けてある。口唇部には刻みが施されている。内面調整は縦ケズリだが、口縁近くは横方向にナゲている。29点出土している。

314～318は口縁部で、314は外反しているが、315～318はまっすぐ伸びている。胴部の条痕は314が斜方向、他は横方向で浅い。口縁部の押圧は314が斜位、315・316・318が横位だが、315は2段、316は3段、318は4段である。317は二枚貝背部を押している。突帯文は概して短く、密に貼り付けてあるが、314はやや長い楔形を呈している。317・318は頂部を押しており、314・315・318は側面をナゲているが、316は貼り付けたままで調整をしていない。317は分厚い。

319は口縁部近くに新しい欠損のある破片である。口縁部近くでやや内反し、端部近くでは外反する器形をし、口唇部は丸みをおびた矩形を呈し、刻みはない。口唇部の一部に貝殻押圧らしき痕跡がみられる。外面の条痕は弧状を呈した所もあるが、やや右下がりである。口



第56図 縄文時代早期の土器(19)

[1:3]

縁端近くに連続する左下がりの貝殻腹縁押圧が施されている。内面はミガキに近い丁寧な横ナデ調整である。

320～322は口縁近くである。320は口縁端近くに斜位の二枚貝腹縁押圧があり、その下の条痕はナデ消された後、やや長い楔形突帯を密に貼り付け、頂部には巻貝殻頂の刺突がある。上方の側辺は軽くナデている。321・322は楔形突帯を貼り付けており、321は両側辺をナデている。条痕はともに浅い。322の径は15cmほどである。

323～328は胴部で、右下がり斜位のものが多いが、弧状のもの、横位に近いものもある。焼成度は甘いものが多いが、324・325は硬質である。323は径17cmほどやや大型である。324の内面ケズリはやや深い。328は上半に近い破片で、上端近くの条痕がナデである。

⑥ 別府原式土器 (第56図 329)

1点のみの出土である。筒状だが口縁近くでわずかに外反する器形で、口縁端は丸みをおびている。口径13.0cmで高さは14.5cmほどの小型品である。外面はやや蛇行する8条ほどの横方向条痕で、底近くはナデ消している。内面は縦・斜め方向のケズリ整形だが、口縁近くは横方向のナデとなる。外面にはススが附着している。

⑦ 石坂式土器 (第57図 330～348)

図化していない破片9点を含めてE・F-14～18区周辺で28点出土している。やや外へ開きながらまっすぐ伸びる口縁部と、口縁部へやや開きながらまっすぐ伸びる胴部から成る。

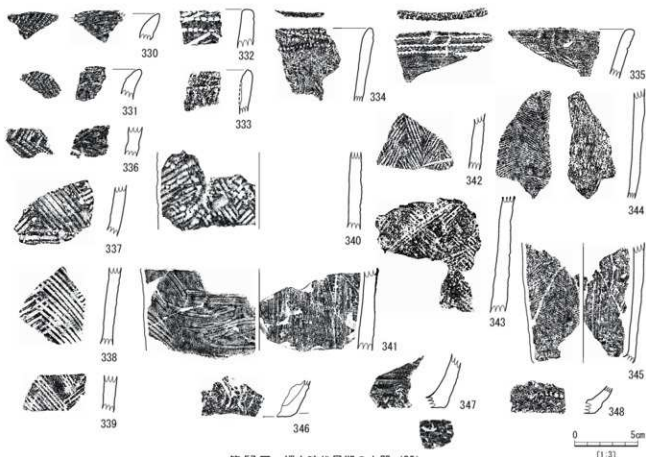
330・331は端部近くが外反し、細くなっている口縁端で、外面に綾杉状の貝殻押圧文がある。

332は直立して立ち上がる口縁部で、口唇部は平坦である。外面はナデたあと、斜方向の条痕を施し、そのあと2段に横方向の二枚貝押圧を施す。内面は丁寧なナデ整形である。

333・334はやや外へ開きながらまっすぐ伸びる口縁部で、口縁端近くに二枚貝押圧文が横あるいは斜位に施され、その下に綾杉状の条痕文が施されている。口唇部には刻みが施されている。内面は縦方向ケズリだが、口縁近くは丁寧にナデている。ともに磨滅が目立つ。

335は口径の大きな破片である。外面は丁寧な横ナデ調整で、口縁端近くに3段の二枚貝腹縁の浅い押圧文がみられる。口唇部はやや丸みをおびており、刻みが施されている。内面は横方向の丁寧なナデ仕上げである。

336～343は外面が綾杉状条痕の胴部である。条痕幅は337・338などが広いのに対して、342は狭い。内



第57図 縄文時代早期の土器 (20)

面は338などが織維状の丁寧な斜ナデであるのに対し、342などは縦方向ケズリのあと、一部ナデ仕上げがみられる。338の外にススが、342の内にオコゲが残っている。

344・345は接合できないが、同一個体の底近くの胴部破片である。図化しなかった5点の破片も含め1-10区(1点のみH-10区)で出土している。底径は8.0cmで、やや外へ開きながらまっすぐ伸びる胴部の最大径は9.8cm、残存高9.5cmの小型深鉢である。外面は縦方向のナデ整形のあと櫛目状細沈線条痕を綾形状に施している。底部近くには施されていない。内面は丁寧な縦ケズリである。

346～348は丸みをおびた底部で、外面には斜条痕や巻貝殻頂刺突文がある。346の内側には赤土が付着している。

⑧ 下刺釜式土器 (第58図 349～354)

分厚い作りで外へまっすぐ伸びる器形である。谷頭やF・G-11区で8点出土しており、349～351は同一個体と思われる。口唇部は平坦で、外面には横方向の二枚貝腹縁押圧を連続して押している。底部近くは横方向の条痕で仕上げている。内面は下半が縦方向のケズリ、上半は丁寧な横方向のケズリである。

352～354はやや丸みをおびた器形をし、集石18号で出土している28と同一個体と思われる。外面は二枚貝の貝殻腹縁押圧が横方向に繰り返され、内面はミガキ調整である。焼成良好で、胎土に白色石が多く含まれる。

⑨ 桑ノ丸式土器 (第58図 355～356)

分厚い作りで、口唇部はやや内傾しているが、平坦である。H-13区で2点出土しているが、同一個体である。外面には右下がり・左下がり方向の短い条痕が施さ

れ、内面はミガキ調整である。胎土には白色石や石英などやや大きな石粒が多く含まれ、粗い。にぶい橙色を呈し、焼成良好である。

⑩ 押型土器 (第58図 357)

G-3区で出土した。小粒な綾粒押型文で、内面は丁寧にナデている。外面は明赤褐色を呈しているが、内面はにぶい橙色である。石英・長石のほか、白色・黄白色・灰色・茶色の細石粒を多く含む砂質土を用いている。

⑪ 手向山式土器 (第58図 358～360)

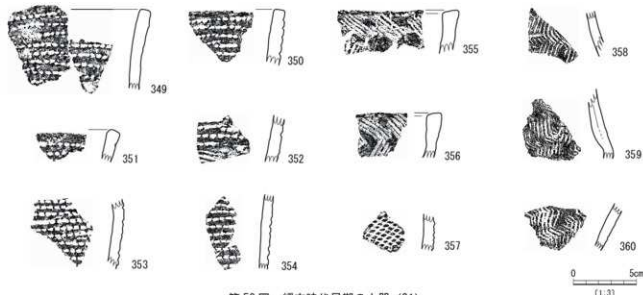
底から外傾して立ち上がり、やや丸みをおびて内傾している器形である。F-10・12区で3点出土し、同一個体と思われる。外面には山形押型文を横方向に転がしており、内面はナデ調整である。358は上半部破片で外面にススが付着している。359は屈曲部で、丸みをおびている。上半の内面には粘土を貼り付けて分厚くしている。屈曲部内面の下半にはオコゲが付着しているが、剩下半の破片である360にも内面にオコゲが付着している。

⑫ 塞ノ神A式土器 (第59図 361～373)

F-4～6区付近で36点出土している。

361は口縁端近くと、3cmほど下に横方向の連続押圧文があり、その間に横あるいは斜方向の5条ほどの凹線が引かれている。口唇部には上から押圧文が施され、内面は丁寧にナデられている。

362～369は同一個体と思われる破片で、同じような文様の施されている小破片が他に9点出土している。筒状の胴部から頭部で外傾し、ラッソ状に開く口縁部へ至る器形をしている。口縁部外面には2～3条の凹線が横



第58図 縄文時代早期の土器 (21)

方向に3段引かれ、胴部外面は縦位に網目状襷糸文が施されている。口縁外面は上から2条・2条・3条の横線が少しずつ離れて3段あり、363は上と2段目の途中に爪形の押圧文が施されている。丸みをおびた口唇部には内外から押圧文が矢羽根状に施されている。胴部には丁寧なナデ調整のあと縦位に1.2cm幅ほどの網目状襷糸文が施されている。網目状襷糸文を施したあと、口縁部の横線を引いている。内面はミガキに近い丁寧な横ナデ調整である。362～369は塞ノ神A a式土器である。

370・371は薄手の無文土器で、壺形の土器と思われる。370は平たい底からすばまる口縁へ向かう胴屈曲部破片である。371は底に近く、底径は13cmほどである。内面は貝殻条痕のあとナデ調整し、外面は粗い横ナデ調整である。焼成良好で硬質となっている。

372は幅3cm足らずの縦位沈線間に斜方向縄文を施した胴部で、外にはススが付着している。373にも縄文がみられるが、沈線区画はみられない。この2点は塞ノ神A b式土器である。

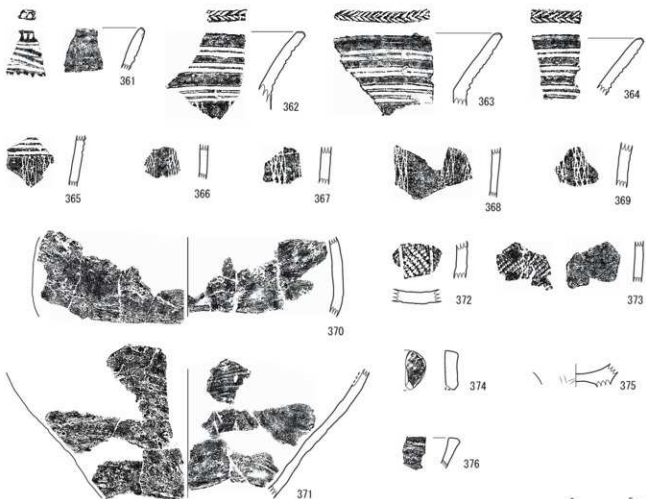
⑬ 土製品 (第59図374)

F-16区V a層で出土した円盤形の土製品である。直径3.2cm、厚さ1.0cmで、半分ほど残っている。周囲を丁寧に打ち欠いて円形にしている。文線等がはっきりしないため詳細不明だが、内外面の調整、胎土、焼成度などからして早期の土製品と思われる。

⑭ 時期不明の土器 (第59図375・376)

375は台付き深鉢の体部と脚台の接合部分で、直径は5.4cmほどである。鉢部と脚台はのちに貼り付けている。内外とも貝殻でナデているようである。白石・黄白石・灰石などの細石粒を多く含み、脚台付きの深鉢という器種から縄文時代後期の市来式土器と思われる。F-6区付近の溝状遺構2号で出土している。

376は玉縁状を呈する鉢の口縁部である。内外ともミガキに近い丁寧なナデ仕上げをしている。VI層で出土しているが、器形・調整など縄文時代晩期の土器の可能性もあることからここで扱った。



第59図 縄文時代早期の土器 (22)

4 包含層出土の石器

(1) 概要

当該期の遺構外出土石器は合計45点で、その殆どが包含層のVb・VI層から出土したものである。

分布状況は、調査区1から調査区2にかけて、緩斜面及び谷部に点在するもの、調査区1では集石の分布域にまとまりがみられる。調査区3からの出土はない(第60図)。

器種別の内訳は、包含層以外の出土石器を含めて、石鏃6点、削器1点、石核2点、小型石斧1点、剥片・砕片類13点、磨石・敲石類20点、石皿破片2点である。

剥片・砕片と石皿片を除き、ほか完形品をはじめ破片を合わせて、28点を図化した。また、石材鑑定は肉眼観察による。以下、個々の特徴について述べる。実測図の並びは調査区での分布状況に関係なく、順不同である。

(2) 出土石器

石鏃 (第61図 377～382)

6点図化した。377～378は局部磨製石鏃、379～382は打製石鏃である。377は上半部に肩をもち五角形を呈する。器体の表裏に広く縦方向の研磨を施して厚みを減じており、周縁部にのみ浅い調整剥離を加えている。頁岩製である。378は側縁を弧状として、挿入が深く発達した基部が形作られている。調整剥離は精密であり、裏面の中央稜線に横方向の研磨痕を残している。頁岩製である。379は比較的深い平坦剥離によって丁寧な形作られており、挿入の浅い窄まった基部を有する。短い脚部の一方を欠損している。玉髓製である。380は肥厚した器体に粗い調整剥離を留めた未成品とみられ、加工時に一方の脚部を破損した可能性がある。チャート製である。381は薄身にして挿入の深い基部が形作られ、一方の脚部を欠損している。チャート製である。382は薄手の剥片を用いて調整剥離を行っており、裏面中央に素材面を

残している。脚部を欠損する。石材は透明感のある黒曜石である。

削器 (第61図 383)

1点図化した。383は厚みのある剥片を素材とし、側縁及び基部に表裏両面から粗い調整剥離を施して、略二等辺三角形に整形されている。先端部に短く残置した素材縁辺に微小剥離痕が生じている。チャート製である。なお、一方で石鏃未成品といった可能性が残る。

石核 (第61図 384・385)

2点図化した。類似した384・385は斑品の含有が目立つ黒曜石製のものである。打面転移を頻繁に行い、極限まで不定形剥片を剥離した多面体を呈する残核である。

石斧 (第61図 386)

1点図化した。386は長さ5.3cmと小型短冊形の局部磨製石斧である。器体の裏面に素材面を大きく残して整形剥離は最小限であり、主に刃部を磨製として、表裏両面から非常に丁寧な研磨が施されている。刃こぼれもなく、鋭く整った刃縁を呈する。頁岩製である。

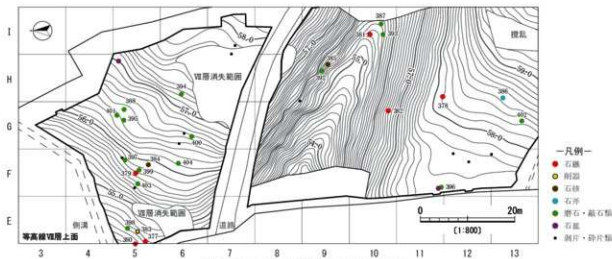
剥片・砕片類

図化は割愛した。13点あり、大きさ1～4cmの不定形で、2cm以下のものが多い。石材は、黒曜石9点の他、玉髓2点、チャートと頁岩が各1点である。

磨石・敲石類 (第62図～第64図 387～404)

20点中18点図化した。これらには、磨り痕・敲打痕・凹痕にみる各機能を併せ持ったものが存在することから、磨石・敲石・凹石を一括して扱った。以下に分類する。石材については、すべて砂岩を用いている。なお、被熱して赤化したものは、集石鏃への利用がうかがわれる。

- 1類：磨り面のみで、片面か両面、全面に及ぶもの
- 2類：磨り面と敲打痕をもつもの
- 3類：磨り面と表裏中央に凹痕をもつもの
- 4類：磨り面と敲打痕、表裏中央に凹痕をもつもの



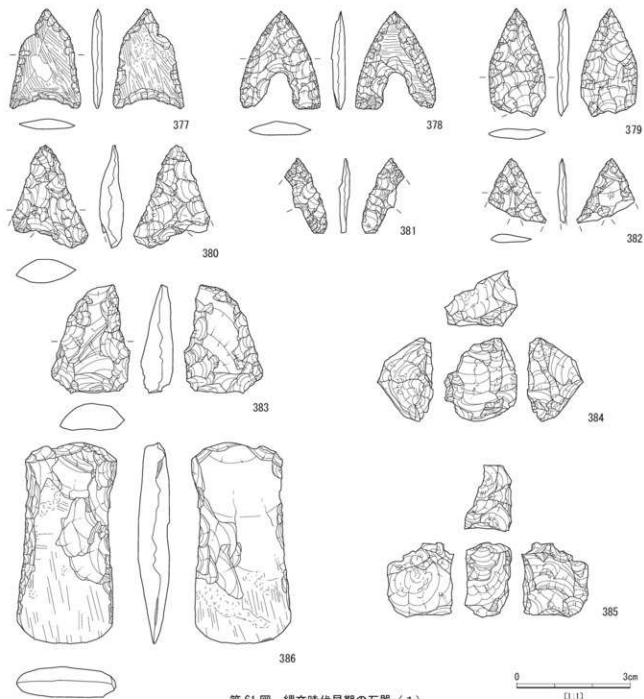
第60図 縄文時代早期の石器分布図

1類は、387・388の2点である。どちらも被熱赤化がみられるが、387は滑らかに光沢をおびた磨り面を有する。387は下半を、388は裏面を欠損する。2類は、389～397の9点であり主体をなす。このうち、389は裏面に広く作業面の再生とみられる敲打痕を有する。また特に、389・392では側面に筋状に窪んだ顕著な敲打痕が生じている。389・392・393・395・397には被熱赤化がみられ、391～397は器体的一端ないし半分ほどを欠損している。3類は、398・399の2点である。どち

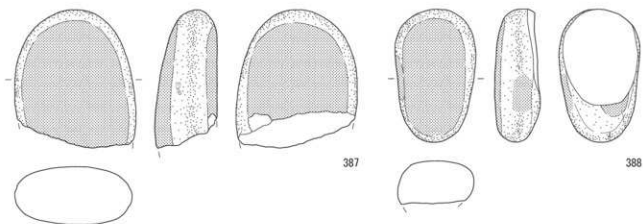
らも側面がやや平らとなり、石鏡形を呈して特徴的である。398には被熱赤化がみられ、399は下半を欠損している。4類は、400の1点のみである。400は自然産の歪な形状を留めて、中央の凹痕がより顕著である。その他、401～404は小破片である。いずれも被熱赤化しており、401には敲打による剥離が生じている。

石皿

図化は小片のため割愛した。2点とも扁平石皿の表面とみられ、被熱赤化した剥片である。花崗岩製である。

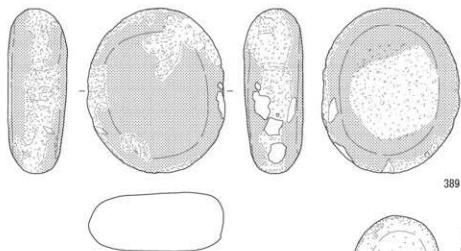


第61図 縄文時代早期の石器（1）

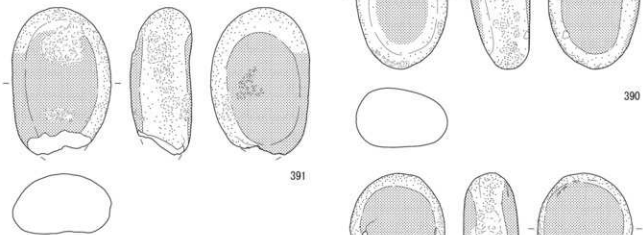


387

388

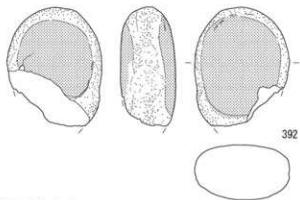


389



391

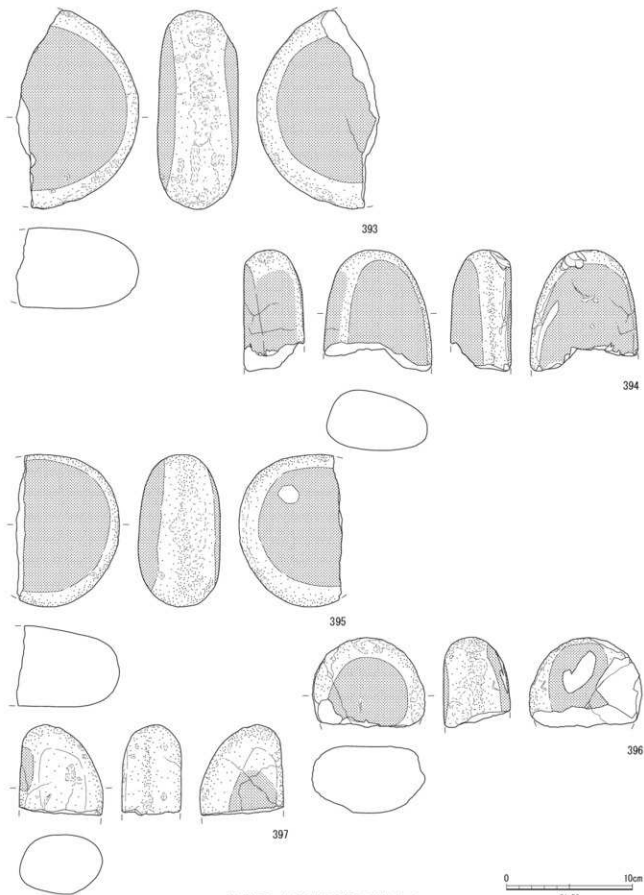
390



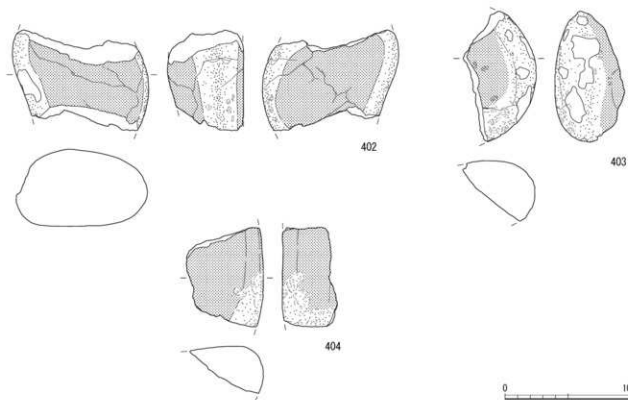
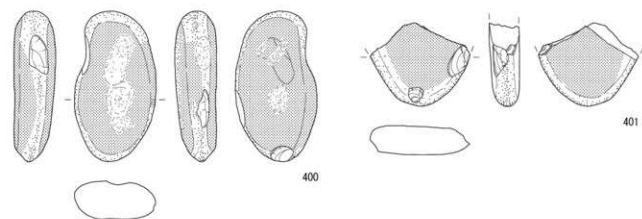
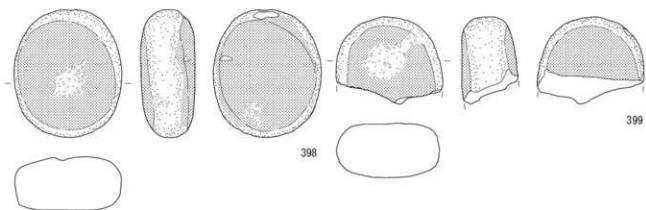
392



第62図 縄文時代早期の石器(2)



第63図 縄文時代早期の石器（3）



第64図 縄文時代早期の石器(4)

第5表 縄文時代早期集石出土土器観察表

採出番号	発掘番号	出土区	層位	取上番号	型式	部位	外面 (調染・文様)	口縁 径長器高 (cm)	調整 (無記入は内面)	色調		胎土						地味	備考	
										外面	内面	赤石	黄白石	黒石	灰石	長石	辰石			
13	S81	G3	-	1	加葉山	胴部	斜条痕・二枚貝押圧	-	丁字な縦ケズリ	橙	橙	○	○	○	○	○	○	○	良好	
14	S82	BH-5	-	2	加葉山	胴部	斜条痕・二枚貝押圧	-	丁字なケズリ	に高い 橙	に高い 橙	○	○	○	○	○	○	○	普通	
	S82	BH-5	-	1	加葉山	胴部	斜条痕・二枚貝押圧	-	縦ナデ	に高い 橙	に高い 橙	○	○	○	○	○	○	○	普通	
15	S83	G4~6, 8B	V b, VI	1	加葉山	胴部	斜条痕・二枚貝押圧・幾形突帯	-	丁字な縦ケズリ	に高い 橙	に高い 橙	○	○	○	○	○	○	○	良好	
	-	F-06	V b	10他	加葉山	胴部	斜条痕・二枚貝押圧・幾形突帯	-	丁字な縦ケズリ	に高い 橙	に高い 橙	○	○	○	○	○	○	○	良好	
	-	G6	V b, VI	169他	加葉山	胴部	斜条痕・二枚貝押圧	13.0	丁字な縦ケズリ	に高い 橙	に高い 橙	○	○	○	○	○	○	○	普通	
	S85	G5	-	1	加葉山	胴部	斜条痕	-	縦ケズリ	橙	橙	○	○	○	○	○	○	○	普通	
16	S86	G-9B	-	2	加葉山	胴部	縦貝殻押圧	-	丁字な縦ケズリ	に高い 橙	に高い 橙	○	○	○	○	○	○	○	普通	
	S86	G-9B	-	1	加葉山	口縁部	口縁部のみ・口縁に3段二枚貝横押圧	-	ナデ	に高い 黄橙	に高い 黄橙	○	○	○	○	○	○	○	普通	
	S87	B6	-	1	加葉山	胴部	横条痕・二枚貝押圧・底部上縁沈線	-	丁字な縦ケズリ	暗赤褐	に高い 赤褐	○	○	○	○	○	○	○	良好	スス
	S87	B6	-	2	加葉山	胴部	斜条痕・二枚貝押圧・幾形突帯	-	縦ケズリ	明赤褐	明赤褐	○	○	○	○	○	○	○	良好	
	S89	G6	-	1	加葉山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧・底部上縁沈線	-	丁字な縦ケズリ	明赤褐	明赤褐	○	○	○	○	○	○	○	良好	
18	SS12	E5	-	1	前平Ⅱ	胴部	横条痕	-	縦ケズリ	赤黒	赤黒	○	○	○	○	○	○	良好		
18	SS14	SS15	F11	-	6	前平Ⅱ	胴部	斜条痕	-	斜ナデ	赤	赤	○	○	○	○	○	普通	靑い土	
19	-	F11~13	V a/b, VI, 複底	2他	前平Ⅰ	完形	口縁に1段の押圧	21.8 14.8 34.2	下丁字なケズリ 上条痕	赤	赤	○	○	○	○	○	○	良好		
	SS15	F11	-	7	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	-	縦ケズリ	に高い 灰黄褐	に高い 灰黄褐	○	○	○	○	○	○	良好		
	SS15	F11	-	11	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	-	縦ナデ	赤褐	に高い 橙	○	○	○	○	○	○	普通	部分的に 下部はコゲ	
20	SS16	F10	V a	1他	前平Ⅱ	口縁~胴部	口縁に2段の横円形押圧・横条痕	14.2	横・斜ナデ	橙	に高い 橙	○	○	○	○	○	○	良好	スス・補修孔	
	SS16	F11	-	2	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	-	縦ナデ	赤褐	灰黄褐	○	○	○	○	○	○	普通		
	SS17	F12	-	2	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	-	縦ケズリ	赤褐	赤褐	○	○	○	○	○	○	良好		
	SS17	F12	-	4	前平Ⅰ	底部	-	-	外底：ナデ 内底：丁字なナデ	暗赤褐	赤褐	○	○	○	○	○	○	○	良好	
21	SS17	F12	-	3	前平Ⅰ	底部	-	-	外底：扁卵形 内底：扁卵形	赤	赤	○	○	○	○	○	○	○	良好	
	SS18	F12	-	1	前平Ⅰ	胴部	縦・斜条痕	-	丁字な縦ナデ	に高い 橙	に高い 橙	○	○	○	○	○	○	○	良好	
	SS18	F12	-	4	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	-	縦ナデ	に高い 橙	に高い 橙	○	○	○	○	○	○	○	普通	
	SS18	F12	-	5	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	-	縦ナデ	に高い 黄橙	に高い 黄橙	○	○	○	○	○	○	○	普通	
22	SS18	F12	-	2他	下銅基	口縁~胴部	横二枚貝横縁押圧	-	丁字な横・斜ナデ	灰白	灰白	○	○	○	○	○	○	○	良好	
	SS18	F12	-	2	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	-	縦ケズリ	赤褐	橙	○	○	○	○	○	○	○	良好	
26	SS24	B13	-	1	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	-	斜ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○	○	○	○	○	○	普通	
30	SS25	B13	-	1他	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	-	縦ケズリ	に高い 橙	に高い 橙	○	○	○	○	○	○	○	良好	
31	SS31	F15	-	6	札ノ元Ⅱ	口縁部	口唇部のみ・口縁に斜二枚貝押圧・横条痕・幾形突帯	-	縦ナデ 口縁は横ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○	○	○	○	○	○	良好	
	SS31	F15	-	3	札ノ元Ⅱ	胴部	横条痕	-	縦ケズリ	橙	橙	○	○	○	○	○	○	○	普通	
	SS31	F15	-	1	札ノ元Ⅱ	胴部	横条痕	-	縦ケズリ	に高い 橙	に高い 橙	○	○	○	○	○	○	○	普通	
	SS31	F15	-	4	札ノ元Ⅱ	底部	斜条痕	7.0	横ナデ	明赤褐	赤灰	○	○	○	○	○	○	○	普通	底に白粉
	SS31	F15	-	2	円筒型土製品	完形	-	2.8×2.2	丁字な縦ケズリ	に高い 橙	に高い 橙	○	○	○	○	○	○	○	普通	
32	SS32	F15	-	7他	札ノ元Ⅱ	胴部	横条痕	-	縦ナデ	赤褐	赤褐	○	○	○	○	○	○	○	普通	
	SS32	F15	-	2	札ノ元Ⅱ	胴部	横条痕	-	ナデ	橙	橙	○	○	○	○	○	○	○	普通	縦目立つ
	SS32	F15	-	6	札ノ元Ⅱ	胴部	横条痕	-	縦ナデ 口縁は横ナデ	橙	橙	○	○	○	○	○	○	○	普通	
	SS32	F15	-	4	札ノ元Ⅱ	胴部	横条痕	-	縦ナデ	橙	橙	○	○	○	○	○	○	○	普通	
41	SS33	E-F17	-	1	-	胴部	斜条痕	-	ナデ	橙	橙	○	○	○	○	○	○	○	普通	

第6表 縄文時代早期落とし穴出土土器観察表

採出番号	発掘番号	遺構名	層	取上番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
36	42	落とし穴	-	1	磨製石鏝	2.30	1.70	0.23	1.1	頁岩	

第7表 縄文時代早期土器観察表

調査区 集落名	地層 層号	出土 年次	部位	取上 番号	型式	部位	外面 (調製・文様)	口径 底径 (cm)	調整 (無記入は内面)	色調		胎土					備考	備 考		
										外面	内面	白石	黒石	赤石	黒石	長石			灰	
43	F11	V b	4	前平1	口縁部	口唇1段押圧 横条痕		-	横ナデ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	普通	
44	O6	V b	133	前平1	口縁部	口縁1段押圧 斜条痕		(12.8) (5)	ケズリ 口縁横ナデ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	良好	
45	F11-12	V b, VI	1000他	前平1	口縁部	口縁1段押圧 斜条痕		(13.0) (11)	ケズリ 口縁横ナデ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	普通	補修孔
46	F6	V b	46	前平1	口縁部	口縁1段・口唇横線押 圧 斜条痕		-	口ケズリ 口縁ナデ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	普通	
47	F5	VI	30	前平1	口縁部	口縁1段・口唇横線押 圧 斜条痕		-	横ナデ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	普通	
48	G4	V b	276	前平1	口縁部	口縁1段押圧 斜条痕		-	口ケズリ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	普通	
49	I6	VI	360	前平1	口縁部	口縁1段押圧 斜条痕		-	横ナデ	浅黄	浅黄	○	○	○	○	○	○	○	良好	
50	F11	V a	800	前平1	口縁部	口縁1段押圧 斜条痕		-	横ナデ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	良好	
51	H9-10	V b, VI	936他	前平1	口縁部	口縁1段押圧 斜条痕		(11.0) (5)	口ケズリ 口縁横ナデ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	良好	
52	G4	V b	299	前平1	口縁部	口縁1段押圧 斜条痕		-	縦横ナデ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	良好	
53	G11	V b	756	前平1	口縁部	口唇横み 口縁1段押 圧 斜条痕		-	口ケズリ 口縁横ナデ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	普通	
54	G3	V b	384	前平1	口縁部	口縁1段押圧 斜条痕		-	口ケズリ 口縁横ナデ	ぬ	ぬ	○	○	○	○	○	○	○	良好	
55	F15	V b	-	前平1	口縁部	口縁1段押圧 斜条痕		-	横ナデ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	普通	
56	G4	VI	-	前平1	口縁部	口縁1段押圧 斜条痕		-	横ナデ	黒	黒	○	○	○	○	○	○	○	良好	
57	H10	VI	871	前平1	口縁部	口縁2段押圧 条痕		-	横ナデ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	普通	
58	F14	V b	501	前平1	口縁部	口縁2段押圧 条痕		-	横ナデ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	普通	
59	I10	VI	646	前平1	口縁部	口縁2段押圧 条痕		-	横ナデ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	普通	磨滅
60	G13	V b	1118	前平1	口縁部	口縁2段押圧 条痕		-	不明	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	普通	磨滅
61	G12	VI	761	前平1	口縁部	口縁2段押圧 条痕		-	口ケズリ 口縁横ナデ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	普通	
62	F11	V b	1050	前平1	口縁部	口縁2段押圧 条痕		-	横ナデ	ぬ	ぬ	○	○	○	○	○	○	○	普通	
63	H13	V b	473	前平1	口縁部	口縁2段押圧 条痕		-	横ナデ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	普通	磨滅
64	F12	V b	265他	前平1	口縁部	口縁2段押圧 条痕		(19.9) (5)	口ケズリ 口縁横ナデ縦横ナデ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	普通	
65	O6	V b	134	前平1	口縁部	口縁2段押圧 条痕		-	横ナデ前ナデ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	普通	
66	G12	V b	760	前平1	口縁部	口縁2段押圧 条痕		-	口・横ナデ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	普通	
67	H10	V b, VI	922他	前平1	口縁部	口縁2段押圧 条痕		(17.0) (5)	口ケズリ 口縁横ナデ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	普通	
68	I7	VI	444	前平1	口縁部	口縁2段押圧		-	丁寧な斜ナデ 口縁丁寧な横ナデ	浅黄～黒 ぬ	黒黄	○	○	○	○	○	○	○	良好	補修孔
69	G11	V b	759	前平1	口縁部	口縁2段押圧 口唇横条痕		(12.0) (11)	横ナデ, 口ケズリ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	普通	補修孔
70	F12	V b	486	前平1	胴部	胴線ナデ 斜条痕		-	丁寧な横ナデ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	良好	
71	I10	VI	851	前平1	胴部	胴線2段押圧 条痕		-	口ケズリ	浅黄	浅黄	○	○	○	○	○	○	○	良好	補修孔
72	F15	V b	697	前平1	胴部	斜条痕		-	丁寧な縦ケズリ	ぬ	ぬ	○	○	○	○	○	○	○	普通	スズ
73	H-10	VI, VI	663他	前平1	胴部	斜条痕		-	口ケズリ	ぬ	ぬ灰	○	○	○	○	○	○	○	良好	
74	G4	V b	298	前平1	胴部	斜条痕		-	丁寧な縦ナデ	ぬ	ぬ灰	○	○	○	○	○	○	○	良好	
75	G3	V b	393	前平1	胴部	斜条痕		-	粗い縦ケズリ	灰	赤	○	○	○	○	○	○	○	普通	
76	F13	浅土	-	前平1	胴部	斜条痕		-	斜ナデ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	普通	全体磨滅
77	F7, G5	V b, VI	9・154	前平1	胴部	斜条痕		-	粗いケズリ	ぬ	ぬ	○	○	○	○	○	○	○	良好	
78	G13	V b	848他	前平1	胴部	斜条痕		-	口ケズリ	黒	にぶい	○	○	○	○	○	○	○	良好	スズ
79	O6	V b 浅土	176他	前平1	胴部	斜条痕		-	口ケズリ	ぬ	黒	○	○	○	○	○	○	○	普通	
80	G7	V b	57	前平1	胴部	斜条痕		-	丁寧な縦ケズリ	ぬ	ぬ	○	○	○	○	○	○	○	良好	
81	G13	V b	843	前平1	胴部	斜条痕		-	ナデ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	普通	磨滅
82	F12	V b	265	前平1	胴部	斜条痕		-	口ケズリ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	普通	
83	F12	VI	906	前平1	胴部	斜条痕		-	丁寧な縦ケズリ	明赤	明赤	○	○	○	○	○	○	○	普通	
84	H9	VI	1225	前平1	胴部	斜条痕		-	口ケズリ	ぬ	ぬ	○	○	○	○	○	○	○	普通	補修孔
85	F11	V b	1059	前平1	胴部	斜条痕		-	丁寧な縦ケズリ	浅黄	ぬ灰	○	○	○	○	○	○	○	普通	補修孔
86	I9	V b	698	前平1	胴部	斜条痕		-	丁寧な縦ケズリ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	普通	
87	I10	VI	1084	前平1	胴部	斜条痕		-	口ケズリ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	良好	コゲ
88	H9	VI	1109他	前平1	胴部	斜条痕		-	口ケズリ縦ナデ	灰黄	灰黄	○	○	○	○	○	○	○	良好	
89	H4	V b	327他	前平1	胴部	斜条痕		-	丁寧な縦ケズリ	明赤	明赤	○	○	○	○	○	○	○	良好	
90	F16	V b	587	前平1	胴部	斜条痕		(14.0) (16)	縦横ケズリ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	普通	磨滅
91	F4	V b	10	前平1	胴部	斜条痕		(16.6) (16)	口ケズリ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	普通	
92	F6	V b, VI	7・177	前平1	底底	斜条痕		(17.0) (16)	外面・胴付口縁横 条痕横ナデ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	普通	
93	H5, I7	V b, VI	358他	前平1	胴部	斜条痕		-	口ケズリ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	普通	
94	F17	V b	575	前平1	底底	斜条痕 底底上横条痕		-	不明	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	普通	
95	F12	V a	1035	前平1	底底	斜条痕 底底上横条痕		-	口ケズリ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	良好	磨滅粗く 凹み
96	F11	V a, VI	797他	前平1	胴部	斜条痕 底底上横条痕		11.9 (16)	口ケズリ 外底ナデ	明赤	にぶい	○	○	○	○	○	○	○	普通	コゲ
97	F15	V b, VI	694他	前平1	胴部	斜条痕 底底上横条痕		(16.6) (16)	丁寧な縦ケズリ	赤灰	にぶい	○	○	○	○	○	○	○	普通	
98	G11	VI	1155	前平1	底底	斜条痕 底底上横条痕		9.9 (16)	口ケズリ 内底ナデ	にぶい	ぬい	○	○	○	○	○	○	○	普通	

施設番号	施設番号	出立区	種別	取上番号	型式	部位	外装 (調剤・文様)	口径 高さ (cm)	調整 (無記入は内部)	色調		粉土							備考
										外面	内面	白	黒	黄	赤	青	紫	緑	
40	99	F15	V b	602	前半1	胴へ	斜条板 底面+横条板	(9.4) (底)	ケズリ 内底+ナゲ	にぶい黄緑	にぶい黄	○		○	○				普通
	100	H9	VI	1005	前半1	胴へ	斜条板 底面+横条板	(9.0) (底)	横ナゲ	にぶい黄緑	にぶい黄緑 →相戻	○		○	○				普通
	101	H9	VI	933	前半1	胴へ	斜条板 底面+縦割み	(9.5) (底)	縦ナゲ 内底+丁字女ナゲ	にぶい黄	にぶい黄	○		○	○				普通
	102	F15	V b	605	前半1	胴へ	底面+斜状溝	(14.4) (底)	縦ナゲ 外底+格子状圧板 内底+階間伏圧板	にぶい黄	にぶい黄	○		○	○				普通
	103	F17	V b	579	前半1	底面	-	-	外底+調日伏圧板	にぶい黄	灰褐色	○		○	○				良好 底面白粉
41	104	F11	V b, VI	1037他	前半1	底面	-	-	外底+格子状圧板後 ハケナゲ 内底+階間伏圧板	にぶい黄	明赤褐色	○	○	○	○				普通
	105	110	VI	642	前半1	底面	-	-	外底+格子状圧板後 ハケナゲ 内底+階間伏圧板	にぶい黄緑	にぶい黄	○	○	○	○				普通
	106	G4	V b	285	前半1	底面	-	-	外底+格子状圧板	黄灰	黄	○	○	○	○				良好
	107	H5-9	V a, VI	403他	前半1	底面	斜+横条板	15.0 (底)	縦ナゲ 縦ナゲ後内底上の 窓+斜状切りケズリ 外底+丁字女ナゲ	明赤褐色	明赤褐色	○	○	○	○				良好 底面は木 全積門
	108	H9	VI	965	前半1	底面	底面角に貝殻押圧	(21.4) (底)	外底+横条板	浅黄褐色	浅黄褐色	○		○	○				普通
	109	17	VI	353他	前半1	底面	斜条板	(22.4) (底)	外底+ケズリ 内底+階間伏圧板	にぶい赤褐色	にぶい黄	○		○	○				良好
	110	17	VI	356	前半1	底面	斜条板 底面+縦+斜条板	(23.4) (底)	縦ナゲ	黄	にぶい黄	○		○	○				普通
	111	G3	V b	389	前半1	口縁部	口唇状伏込み+口縁2 段押圧+横条板	-	横ナゲ 横ナゲ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	○		○	○				良好
	112	H6	VI	195	前半1	口縁部	口縁1段押圧 横条板	-	横ナゲ 口縁横ナゲ	黄	黄	○	○	○	○				良好
	113	110	VI	1093	前半1	口縁部	口縁2段押圧+横条板	-	横条板ナゲ	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○	○				普通
114	06	V b	128	前半1	口縁部	口縁2段押圧+横条板	-	横ナゲ	にぶい黄緑	にぶい黄	○	○	○	○				普通	
115	H9	VI	856	前半1	口縁部	口縁2段押圧+横条板	-	縦ナゲ 口縁条板後横ナゲ	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○	○				普通	
116	G3	V b	398	前半1	口縁部	口唇押圧+口縁1段 押圧+横条板	-	斜ナゲ 縦ナゲ	にぶい黄	にぶい黄	○		○	○				普通	
42	117	F5	V b	88	前半1	口縁部	口唇押圧+口縁1段 押圧+横条板	(16.0) (口)	縦ナゲ	にぶい黄	黄褐色	○		○	○				良好
	118	H10	VI	-	前半1	口縁部	口唇押圧+口縁1段 押圧+横条板	-	丁字女ナゲ	にぶい黄	灰黄褐色	○	○	○	○				良好
	119	113	V b	744	前半1	口縁部	口縁2段押圧+横条板	-	横ナゲ	にぶい黄	にぶい黄	○		○	○				良好
	120	H5	V b	453他	前半1	口縁部	口縁2段押圧+横条板	(8.0) (口)	丁字女ケズリ	にぶい赤褐色	にぶい黄	○		○	○	○			普通
	121	17	VI	355	前半1	口縁部	口唇押圧+口縁2段 押圧+横条板	-	横ナゲ	浅黄+黒褐色	にぶい黄褐色	○		○	○				普通
	122	G9	V b	476	前半1	口縁部	口縁2段押圧+横条板	-	浅黄褐色	浅黄褐色	○		○	○	○				普通 摩耗
	123	H10	VI	917	前半1	口縁部	口唇押圧+口縁2段 押圧+横条板	-	横ナゲ	にぶい黄緑	にぶい黄	○		○	○				普通
	124	E5, G4-5 V a, VI, VI	61他	前半1	口縁部	口唇押圧+口縁2段 押圧+横条板	(20.2) (口)	縦ナゲ 口縁横ナゲ	赤褐色	灰白+赤褐色	○	○	○	○	○				普通 スス
	125	H10, 19-19	VI	649他	前半1	口縁部	口縁2段押圧+横条板	-	縦斜ナゲ 口縁+格子ナゲ	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○	○				良好 剥離
	126	H10	V b	1102	前半1	口縁部	口唇押圧+口縁2段 押圧+横条板	-	丁字女横ナゲ	にぶい黄	にぶい黄	○		○	○				普通
127	F9	V b	-	前半1	口縁部	口唇押圧+口縁2段 押圧+横条板	-	横ナゲ	にぶい黄	にぶい黄	○		○	○				普通	
128	H10	V b	1088	前半1	口縁部	口唇押圧+口縁2段 押圧+横条板	-	-	にぶい黄	-			○	○				普通 蜂蟻孔	
43	129	17	V b	343	前半1	口縁部	口唇押圧+口縁2段 押圧+横条板	-	横ナゲ→縦ナゲ	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○	○				普通
	130	H9	VI	989	前半1	口縁部	口唇押圧+口縁2段 押圧+横条板	-	横条板→縦ナゲ	にぶい黄	にぶい黄	○		○	○				良好
	131	H9	VI	533	前半1	口縁部	口縁2段押圧+横条板	-	縦ナゲ 口縁横ナゲ	にぶい黄	にぶい黄	○		○	○				普通
	132	F4	V b	96・97	前半1	口縁部	口唇押圧+口縁2段 押圧+横条板	-	斜ナゲ 口縁横ナゲ	にぶい黄	黄	○	○	○	○				良好
	133	16	V b	-	前半1	口縁部	口唇+口縁に木の皮 押圧+横条板	-	縦ナゲ+格子ナゲ	にぶい黄	にぶい黄	○		○	○				良好
	134	H13	V b	710	前半1	胴部	口縁に押圧+横条板	-	縦ナゲ	にぶい黄	にぶい黄	○		○	○				良好 表面剥離
	135	F6	V b	-	前半1	胴部	口縁に押圧+横条板	-	横ナゲ	にぶい黄	にぶい黄	○		○	○				普通
	136	F4	V b	-	前半1	胴部	口縁に押圧+横条板	-	縦ナゲ	にぶい黄	にぶい黄	○		○	○				普通 摩耗
	137	G5	V b, VI	152他	前半1	胴部	横条板	-	丁字女横ナゲ	にぶい黄	にぶい黄	○		○	○				普通
	138	17	VI	350他	前半1	胴部	横条板	-	縦ナゲ	赤灰	赤灰	○	○	○	○				普通 コケ
139	E18	V b	546他	前半1	胴部	横条板	-	丁字女横ナゲ	赤灰	赤灰	○	○	○	○				良好	
140	G9	VI	485	前半1	胴部	横条板	-	丁字女横ナゲ	黄	黄褐色	○		○	○				普通	
141	G-H5	V b	284他	前半1	胴部	横条板	-	横条板→斜ナゲ	黄褐色	にぶい黄褐色	○		○	○				普通 コケ	
142	19	VI	721	前半1	胴部	横条板	-	縦ナゲ	にぶい黄	にぶい黄	○		○	○				普通	
143	G4	V b	280	前半1	胴部	横条板	-	縦ナゲ	赤	黄	○		○	○				良好	
144	64	V b	273他	前半1	胴部	横条板	-	丁字女横ナゲ	にぶい黄	黄褐色	○		○	○				良好	
145	G3	VI	398	前半1	胴部	横条板	-	丁字女横ナゲ	赤	灰赤	○		○	○				良好	
146	110	VI	665	前半1	胴部	横条板	-	縦ナゲ	赤褐色	期赤灰	○		○	○				良好	
147	H5	V b	322	前半1	胴部	横条板	-	丁字女横ナゲ	黄	黄	○		○	○				普通 内部剥離	
148	H5	V b	-	前半1	胴部	横条板	-	丁字女横ナゲ	にぶい黄	にぶい黄	○		○	○				良好 スス	

種別 (建築)	掲載 順	地区 名	座 位	取 組 番 号	型 式	部 位	外面 (階層・支保)	日経 記録 高 (cm)	調査 (無記入は内部)	色調				新土				地 成	備 考											
										外面		内面		白 色	灰 白 色	青 色	石 肌			黒 色	長 尺	尺 合								
										赤	赤 黒	赤 黒	赤 黒																	
44	149	H5	V b	404他	前平Ⅱ	胴部	横条組	-	縦ケズリ	赤	赤黒	○	○	○	○	○	○	○	良好	コダ										
	150	H5	V	-	前平Ⅱ	胴部	横条組	-	縦ケズリ	黒	黒	○	○	○	○	○	○	○	○	良好	コダ									
	151	H5	VI	419	前平Ⅱ	胴部	横条組	-	縦ケズリ	にぶい・黒	黒	○	○	○	○	○	○	○	○	良好	コダ									
	152	H5	VI	414	前平Ⅱ	胴部	横条組	-	縦ケズリ	にぶい・黒	にぶい・黒	○	○	○	○	○	○	○	○	普通										
	153	H5	V b	412	前平Ⅱ	胴部	横条組	-	丁寧なケズリ	艶沢	にぶい・黄褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	良好										
	154	G4	V b	290	前平Ⅱ	胴部	横条組	-	縦ケズリ	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	普通										
	155	G3	V b	394	前平Ⅱ	胴部	横条組	-	丁寧な縦ケズリ	にぶい・黄褐色	浅黄褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	普通										
	156	F6	V b	48他	前平Ⅱ	胴部	横条組	-	縦ケズリ	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	良好	剥落									
	157	J6	VI	359	前平Ⅱ	胴部	横条組	-	ケズリ	赤	赤	○	○	○	○	○	○	○	○	良好	スス									
	158	I13	V b	737	前平Ⅱ	胴部	横条組	-	丁寧な縦ケズリ	にぶい・黒	にぶい・黒	○	○	○	○	○	○	○	○	良好										
	159	T9	VI	693	前平Ⅱ	胴部	横条組	-	縦ケズリ	黒	艶沢	○	○	○	○	○	○	○	○	良好										
	160	TS	V b	363他	前平Ⅱ	胴部	横条組	底部上斜条組	-	丁寧な縦ケズリ	明赤黒	赤黒	○	○	○	○	○	○	○	良好	コダ									
	45	161	P6,H5	V b	52他	前平Ⅱ	底部	斜・横条組	(8.0) (底)	横ナゲ縦ケズリ	黒	にぶい・赤黒	○	○	○	○	○	○	○	○	良好									
		162	H9	VI	992	前平Ⅱ	底部	横条組後ナゲ	(8.0) (底)	縦ケズリ	にぶい・黒	にぶい・黄褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	普通									
		163	H10	V b	1107	前平Ⅱ	底部	横条組	(10.6) (底)	ケズリ後ナゲ 外底：貝殻状押圧痕ナゲ	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	普通									
		164	G3,H4	V b	326他	前平Ⅱ	底部	横条組	-	縦ケズリ	にぶい・黒	にぶい・黒	○	○	○	○	○	○	○	○	良好									
		165	G3	V b	301	前平Ⅱ	底部	横条組	-	縦横ケズリ	にぶい・赤黒	にぶい・赤黒	○	○	○	○	○	○	○	○	普通	裏に自動								
		166	F5	VI	37	前平Ⅱ	底部	横条組	10.9 (底)	ケズリ 外底：丁寧なナゲ 内底：指頭状押圧痕ナゲ	にぶい・赤黒	にぶい・黒	○	○	○	○	○	○	○	○	良好									
		167	F5	V b	77	前平Ⅱ	底部	横条組	-	横ナゲ 外底：貝殻状押圧痕ナゲ	にぶい・黒	赤黒	○	○	○	○	○	○	○	○	○	良好								
		168	G4	V b	309	前平Ⅱ	底部	斜・横条組	-	斜・縦ケズリ	にぶい・黒	にぶい・黄褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	良好	裏に自動								
169		H4	V b	271	前平Ⅱ	胴部	横条組	底近くナゲ	-	縦ケズリ	赤黒	赤	○	○	○	○	○	○	○	○	良好									
170		G4	VI	442	前平Ⅱ	底部	横条組	10.0 (底)	外底：仔欄ナゲ 内底：指頭状押圧痕	にぶい・黒	にぶい・黒	○	○	○	○	○	○	○	○	○	良好									
171		F6	V b	71	前平Ⅱ	底部	横条組	-	縦ケズリ	にぶい・黄褐色	浅黄褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	普通	コダ									
172		TS	V b	361他	前平Ⅱ	胴部	斜・底 部	横条組 底部上斜条組	(12.0) (底)	縦ケズリ 外底：ケズリ 内底：指頭状押圧痕	にぶい・黒	にぶい・黒	○	○	○	○	○	○	○	○	普通	コダ								
173		H11	VI	703	前平Ⅱ	底部	横条組	-	外底：内底 染斑痕ナゲ	にぶい・黒	にぶい・黒	○	○	○	○	○	○	○	○	○	普通									
174		I10	VI	669	前平Ⅱ	底部	横条組	-	外底：ケズリ 内底：指頭状押圧痕	にぶい・黒	にぶい・黄褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	○	良好									
175		H5, J7 ~ J9 VI, TS	345他	前平Ⅱ	胴部	斜・底 部	横条組	底部上斜条組	14.4 (底)	丁寧な縦ケズリ 外底：ニアゲ	にぶい・黒	にぶい・黒	○	○	○	○	○	○	○	○	良好									
176		T14	V b	747他	前平Ⅱ	口縁部	口縁に2段階の上 部横条組 下部縦条組	(11.6) 9.5 10.0	口縁は丁寧なナゲ 縦ケズリ後ナゲ 外底：格子状押圧痕 ナゲ 内底：指頭状押圧痕	明赤黒	黒	○	○	○	○	○	○	○	○	○	普通	同一躯体 積込高さ30 cm								
46		178	I14	V b	1120他	前平Ⅱ	底部	底近上横条組	-	縦ケズリ	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	普通	スス								
		179	E18	V b, VI	552他	前平	口縁部	横条組	(12.0) (底)	縦ケズリ	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	○	良好								
		180	H9	V b, VI	66他	前平	口縁部	横条組	(13.0) (底)	縦・横ナゲ・ケズリ 口縁ナゲ	赤	赤	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	良好							
		47	181	G4	V b, VI	291他	志風頭	口縁部	口縁・枕形押圧・斜条組 外底：角部巻貝押圧・2 条・斜・枕形押圧ナゲ	-	縦ケズリ 口縁横ナゲ	赤	赤	○	○	○	○	○	○	○	○	○	良好	スス 角部土器 部一体						
	182		G4	V b, VI	296他	志風頭	口縁部	口縁・枕形押圧・斜条組 外底：角部巻貝押圧・2 条・斜・枕形押圧ナゲ	-	縦ケズリ・押圧痕 口縁斜ケズリ	黒黒	黒	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	良好	角部土器 スス						
	184		G4	V b	297	志風頭	口縁部	口唇押圧 口縁に縦・ 横目巻押圧 角部に 縦竹巻押圧痕	-	縦ケズリ 口縁横ケズリ	赤黒	暗赤黒	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	良好	角部土器 スス						
	185		F4,H5	V b, VI	118他	志風頭	口縁部	口縁に3段階の横・枕形 押圧・斜条組・縦条組 底近上	-	縦ケズリ 口縁横ケズリ	にぶい・黄褐色・艶沢	にぶい・黄褐色・艶沢	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	良好	角部土器 スス					
	186		G4	V b	163	志風頭	口縁部	口唇押圧 横条組後口 縁近く横条組・角部 縦条組底近上	-	縦ケズリ後丁寧な横 ナゲ	明赤黒	黒	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	良好	角部土器 スス					
	187		G4	V b	310	志風頭	口縁部	横条組 口縁近く横条 組・口唇ナゲ	-	斜ケズリ後丁寧な横 ナゲ	明赤黒	明赤黒	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	良好	角部土器 スス				
	188		G4, J6	V b	280他	志風頭	胴部	横条組・縦条組底近上	-	丁寧なケズリ	黒	黒	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	普通	角部土器 スス					
	189		G4	V b	288	志風頭	胴部	横条組・縦条組底近上	-	丁寧な縦ケズリ	黒	黒	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	良好	角部土器 スス				
	190		G4	V b	300	志風頭	口縁部	口唇押圧 横条組後口 縁に縦・枕形押圧・2 条・横条組	-	縦ケズリ 口縁横ナゲ	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	良好	角部土器 スス 縁部孔				
	191		G3	V b	383	志風頭	胴部	横条組後2枚目を縦に 2角に押圧	-	丁寧なケズリ	赤	赤	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	良好	角部土器 スス			
	192	G4	V b, VI	287他	志風頭	胴部	前条組後3列の縦條組 底近上	-	丁寧なケズリ	黒	黒	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	普通					
	48	193	H9	VI	863他	加美山	口縁部	口唇押圧 口縁に3段 横・枕形押圧 横・斜 条組・2段階の横形突条 ・V字状の縦形突条	(31.6) (底)	横ナゲ	にぶい・黒	にぶい・黒	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	良好	
		194	G-H9	VI	972他	加美山	口縁部	口唇押圧 口縁に3段 横・枕形押圧 横・斜 条組・2段階の横形突条 ・V字状の縦形突条	-	横ナゲ	にぶい・黒	にぶい・黒	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	良好

播種年度	施設番号	出立区	種位	取上り号	型式	部位	外形 (調製、支保)	口徑 或は 長さ (mm)	調整 (無記入は内部)	色調		耐土						備考	
										外面	内面	白 石 若	黄 石 若	黒 目	黒 石	黒 長	灰 石		備 考
195	F5.06	V b	39他	加果山	胴部	餅・餅条類、塊形変態、Y字状の塊積押圧	-	縦ケズリ	にぶい・暗	にぶい・暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	190～196 は同一製
196	110	VI	611他	加果山	胴部	餅・餅条類、塊形変態、Y字状の塊積押圧	-	縦ケズリ	にぶい・暗	にぶい・暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
197	G-取 110	VI, T1	963他	加果山	胴部	餅条類、二枚貝積押圧	-	縦ケズリ	にぶい・暗	暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
198	10	VI	1188他	加果山	口縁部	口唇押圧 口縁に3段の二枚貝押圧 餅条変態、変態間貝積押圧	-	横ケズリ 口縁は横ナゲ	にぶい・暗	にぶい・暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
199	106.110	V b	183他	加果山	口縁部	口唇押圧 口縁に3段の二枚貝押圧 塊形変態、変態間貝積押圧	-	横ケズリ 口縁は横ナゲ	にぶい・暗	にぶい・暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
200	E5	V b	108他	加果山	口縁部	口唇押圧 口縁に3段の二枚貝押圧 餅条変態、変態間貝積押圧	-	-	にぶい・暗	にぶい・暗	○	○	○	○	○	○	○	普通	壁割れにより不明
201	10	V b	1238	加果山	口縁部	口唇押圧 口縁に3段の二枚貝押圧 餅条変態、変態間貝積押圧	-	横ナゲ	にぶい・黄緑	にぶい・暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
202	110	T1	629	加果山	口縁部	口唇押圧 口縁に3段の二枚貝押圧 餅条変態、変態間貝積押圧	-	横～斜ナゲ	にぶい・暗	明赤暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
203	10	VI	967	加果山	口縁部	口唇押圧 口縁に3段の二枚貝押圧 餅条類、塊形変態、Y字状間貝積押圧	-	ケズリ後斜ナゲ	にぶい・暗	にぶい・暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
204	104	V b	334	加果山	口縁部	口唇押圧 口縁に3段の二枚貝押圧 餅条類、塊形変態、塊積押圧	-	横ナゲ	にぶい・暗	にぶい・暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
205	E5	茂乱	-	加果山	口縁部	口唇押圧 口縁に3段の二枚貝押圧 餅条変態	-	横ナゲ	暗	暗	○	○	○	○	○	○	○	普通	
206	G5	V b	155	加果山	口縁部	口唇押圧 口縁に3段の二枚貝押圧 塊形変態、変態間貝積押圧	-	縦ケズリ 口縁横ナゲ	暗	暗	○	○	○	○	○	○	○	普通	
207	G5-6	IV b, V b	197他	加果山	口縁部	口唇押圧 口縁に3段の二枚貝押圧 餅条類、塊形変態、Y字状間貝積押圧	-	横ケズリ	暗	暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
208	F4-5 H-5	V b, VI	15他	加果山	口縁部	口唇押圧 口縁に4段の二枚貝押圧 餅条類、塊形変態、変態間貝積押圧	(30.4)	縦ケズリ後斜ナゲ 口縁横ナゲ	にぶい・暗	にぶい・暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
210	F4-5	V b	17他	加果山	口縁部	口唇押圧 口縁に4段の二枚貝押圧 餅条類、塊形変態、変態間貝積押圧	(1)	縦ケズリ後斜ナゲ	にぶい・黄緑	にぶい・黄緑	○	○	○	○	○	○	○	良好	208～211 は同一製
211	06.09	V b	159他	加果山	胴部	餅条類、二枚貝押圧	-	縦ケズリ後斜ナゲ	にぶい・黄緑	にぶい・黄緑	○	○	○	○	○	○	○	良好	
212	E5, G4 H-15	V b, VI	62他	加果山	口縁～ 胴部	口唇押圧 口縁に2段の横二枚貝押圧 餅条類、塊形変態、変態間二枚貝押圧	-	縦ケズリ 口縁丁寧ナゲ	明赤暗	明赤暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
213	G5	V b	229	加果山	口縁部	口唇押圧 口縁に餅条類、塊形変態	-	横ナゲ	にぶい・暗	暗	○	○	○	○	○	○	○	普通	壁割れによる補修孔
214	06	V b	126	加果山	胴部	餅条類、餅二枚貝押圧、塊形変態	-	横ケズリ	にぶい・暗	明赤暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
215	06	VI	436	加果山	胴部	餅条類、餅二枚貝押圧、塊形変態	-	横ケズリ	灰褐	にぶい・暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
216	09	V b	483	加果山	胴部	餅条類、塊形変態、縦一枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい・赤暗	にぶい・赤暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
217	G4	V b	270	加果山	胴部	餅条類、縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい・赤暗	にぶい・赤暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
218	09	VI	1226	加果山	胴部	餅条類、縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい・赤暗	にぶい・赤暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
219	17	V b	430	加果山	胴部	餅条類、縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい・赤暗	にぶい・赤暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
220	10	V b, T1	32他	加果山	胴部	餅条類、縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	暗	暗	○	○	○	○	○	○	○	普通	
221	G9	V b	480	加果山	胴部	餅条類、縦二枚貝押圧	-	横～縦ケズリ	暗	暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
222	F4	V b	1169他	加果山	胴部	餅条類、縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい・赤暗	にぶい・赤暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
223	G4	V b	277	加果山	胴部	餅条類、縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい・暗	暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
224	10	V b	516	加果山	胴部	餅条類、縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい・赤暗	にぶい・赤暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
225	17	V b	433	加果山	胴部	餅条類、縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい・黄緑	にぶい・暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
226	G-05	V b, VI	173他	加果山	胴部	餅条類、縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	暗	明赤暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
227	H-36	V b, VI	417他	加果山	胴部	餅条類、縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	明赤暗	明赤暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
228	110	VI	701他	加果山	胴部	餅条類、縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい・赤暗	灰褐	○	○	○	○	○	○	○	良好	
229	G-00	VI	1169他	加果山	胴部	餅条類、縦二枚貝押圧	-	縦～斜ケズリ	にぶい・暗	にぶい・暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
230	19	T1	691	加果山	胴部	餅条類、縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい・赤暗	にぶい・赤暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
231	110	T1	1163	加果山	胴部	餅条類、縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい・暗	にぶい・赤暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
232	110	T1	1232	加果山	胴部	餅条類、縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい・赤暗	にぶい・赤暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
233	10	V b	905	加果山	胴部	餅条類、縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい・暗	にぶい・黄緑	○	○	○	○	○	○	○	普通	
234	17	V b	1	加果山	胴部	餅条類、縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい・暗	にぶい・黄緑	○	○	○	○	○	○	○	良好	にぶい・暗 半備伏
235	10	VI	1227	加果山	胴部	餅条類、縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ～縦ナゲ	暗	暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
236	06, 09	V b, VI	120他	加果山	胴部	餅条類、縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい・赤暗	にぶい・赤暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
237	E5	V b	112	加果山	胴部	餅条類、縦二枚貝押圧	-	丁寧斜ナゲ	にぶい・暗	にぶい・暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	灰丈
238	H5	V b	457	加果山	胴部	餅条類、縦二枚貝押圧	-	横ケズリ	にぶい・暗	にぶい・赤暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
239	06	V b	135	加果山	胴部	餅条類、縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい・暗	にぶい・暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	
240	110	T2	659	加果山	胴部	餅条類、縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい・暗	暗	○	○	○	○	○	○	○	普通	
241	17	V b	427	加果山	胴部	餅条類、縦二枚貝押圧	-	丁寧横ナゲ	灰褐	灰褐	○	○	○	○	○	○	○	良好	

種別 番号	馬 番 号	出 土 区	産 地	取 得 年 号	型 式	原 産 地	外面 (彫刻・文様)	口縁 底径 高 (cm)	調 整 (無記入は内面)	色調		胎土					地 産	備 考			
										外 面	内 面	赤 色	黄 色	黒 色	灰 色	石 灰			黒 色	長 石	灰 石
S1	242	G6	V b	-	加東山	銅部	斜条痕・縦二枚具押圧	-	丁寧な縦ケズリ	にぶい	暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	磨切に上る 巻縁付	
	243	H9	VI	952他	加東山	銅部	横条痕・斜格子状痕	-	縦ケズリ	にぶい	暗	○	○	○	○	○	○	○	普通		
	244	H9	V b	-	加東山	銅部	横条痕・斜二枚具押圧	-	縦ケズリ	にぶい	暗	○	○	○	○	○	○	○	良好		
	245	G9	V b	486	加東山	銅部	縦押圧で穴開後右下がり 斜押圧に無文交互	-	縦ケズリ	にぶい	暗	○	○	○	○	○	○	○	良好		
	246	G9	V b	484	加東山	銅部	縦押圧で穴開後右下がり 斜押圧に無文交互	-	縦ケズリ	暗	暗	○	○	○	○	○	○	○	良好		
	247	H9	VI	1181	加東山	底部	同沈線	-	丁寧な縦ケズリ 外底：丁寧なナデ	暗	暗	○	○	○	○	○	○	○	普通		
	248	H10	VI	1114	加東山	銅部	縦一枚具押圧 底面上縦沈線	-	縦ケズリ	にぶい	暗	○	○	○	○	○	○	○	普通		
	249	H9	VI	982	加東山	底部	斜条痕・縦二枚具押圧 底面上縦沈線	0.90 (底)	縦ケズリ	にぶい	暗	○	○	○	○	○	○	○	良好		
	250	I7	V b	429	加東山	底部	斜条痕・縦二枚具押圧 底面上縦沈線	-	横ケズリ	暗	暗	○	○	○	○	○	○	○	普通		
	251	G6	V b	136他	加東山	底部	斜条痕・縦二枚具押圧 底面上縦沈線	-	丁寧なケズリ	暗	暗	○	○	○	○	○	○	○	良好		
S2	252	H9	VI	531他	加東山	底部	斜条痕・縦二枚具押圧 底面上縦沈線	23.0 (底)	縦ケズリ	にぶい	暗	○	○	○	○	○	○	○	良好		
	253	I9	VI	720	加東山	底部	縦沈線	9.2 (底)	外底：丁寧なナデ 内底：ケズリ後ナデ	にぶい	暗	○	○	○	○	○	○	○	普通		
	254	F14	V b	499	加東山	底部	縦沈線	11.0 (底)	外底：丁寧なナデ 内底：指頭状圧痕	明赤陶	明赤陶	○	○	○	○	○	○	○	良好		
	255	I9	VI	719	加東山	底部	縦沈線	10.8 (底)	外底：ケズリ後ナデ 内底：良好状にケズリ	明赤陶	明赤陶	○	○	○	○	○	○	○	普通		
	256	H10	V a	1090	加東山	底部	縦沈線	10.8 (底)	-	明赤陶	明赤陶	○	○	○	○	○	○	○	普通	剥離	
	257	G5	V b	219	加東山	底部	縦沈線	10.9 (底)	外底：丁寧なナデ 内底：ケズリ後ナデ	にぶい	暗	○	○	○	○	○	○	○	良好		
	258	H10	VI	1017	加東山	底部	同沈線	0.80 (底)	外底：ケズリ後ナデ 内底：ケズリ	にぶい	暗	○	○	○	○	○	○	○	良好		
	259	H10, 16	V, VI	678他	加東山	底部	縦沈線	13.4 (底)	内外底：ケズリ後ナデ	暗	暗	○	○	○	○	○	○	○	良好		
	260	H5	V b	59	加東山	底部	同沈線	14.4 (底)	外底：丁寧なナデ 内底：ケズリ	にぶい	暗	○	○	○	○	○	○	○	良好		
	261	H5	-	-	加東山	底部	縦沈線	13.6 (底)	内底：指のケズリ後 指頭状圧痕	明赤陶	明赤陶	○	○	○	○	○	○	○	良好		
262	G6	V b	132	加東山	底部	縦沈線	17.6 (底)	外底：ケズリ後ナデ	にぶい	暗	○	○	○	○	○	○	○	普通			
263	F15	V b	889	加東山	底部	同沈線	13.9 (底)	外底：ケズリ後ナデ 内底：良好状のケズリ	明赤陶	明赤陶	○	○	○	○	○	○	○	良好			
264	I10	VI	622	加東山	底部	同沈線	16.8 (底)	内外底：ケズリ後ナデ	明赤陶	明赤陶	○	○	○	○	○	○	○	良好			
265	16	浅丸	-	加東山	底部	同沈線	17.4 (底)	外底：ケズリ後ナデ 内底：ケズリ	にぶい	暗	○	○	○	○	○	○	○	良好			
266	F14	V b	507	加東山	底部	縦沈線	-	外底：丁寧なナデ 内底：ケズリ	暗	暗	○	○	○	○	○	○	○	良好			
267	H6	V b	187	加東山	底部	縦沈線	-	外底：ナデ	浅黄陶	浅黄陶	○	○	○	○	○	○	○	普通			
268	F17	V b	374	加東山	底部	同沈線	-	外底：ナデ	灰褐	明赤陶	○	○	○	○	○	○	○	普通			
269	F4	V b	92	加東山	底部	斜二枚具押圧・底面上無文	-	ナデ	暗	暗	○	○	○	○	○	○	○	良好			
270	G6	V b	174	加東山	底部	-	-	外底：ケズリ 内底： ケズリ後指頭状圧痕	にぶい	暗	○	○	○	○	○	○	○	普通			
271	G6	V b	216	加東山	銅部	斜条痕・縦二枚具押圧	-	縦ケズリ	にぶい	暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	角葉土器		
272	G6	V b	217	加東山	銅部	斜条痕・縦二枚具押圧 底面上縦沈線	-	縦ケズリ	にぶい	暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	角葉土器		
273	G4	V b	162	加東山	銅部	斜条痕・縦二枚具押圧 底面上縦沈線	-	縦ケズリ	にぶい	暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	角葉土器		
274	G9	VI	1208	加東山	銅部	縦一枚具押圧文 角は 横線状	-	縦ケズリ	暗	暗	○	○	○	○	○	○	○	良好	角葉土器		
275	H6	V b, VI	406他	加東山	底部	同沈線	-	外底：丁寧なケズリ 内底：ナデ	赤	赤	○	○	○	○	○	○	○	良好	角葉土器 底面白粉		
S3	276	F4, G-95	V b	94他	小牧3 A	白線部	口唇部のみ 白線に3段 の横二枚具押圧 縦二 枚具押圧・横形突帯	-	横ナデ	にぶい	暗	○	○	○	○	○	○	○	良好		
	277	H9	VI	988	小牧3 A	白線部	口唇部のみ 白線に3段 の横二枚具押圧 縦二 枚具押圧・横形突帯	-	内外底：丁寧な横ナデ	にぶい	暗	○	○	○	○	○	○	○	良好		
	278	I7	V b	425	小牧3 A	白線部	口唇部のみ 白線に3段 の横二枚具押圧 具體 部なし・横形突帯	-	内外底：丁寧な横ナデ	にぶい	暗	○	○	○	○	○	○	○	良好		
	279	G-95	V b	266他	小牧3 A	白線部	口唇部のみ 白線に2段 の横二枚具押圧 縦一 枚具押圧・横形突帯	-	横ナデ	にぶい	暗	○	○	○	○	○	○	○	普通		
	280	I7-9	V b, VI	346他	小牧3 A	白線部	口唇部のみ 白線に2段 の横二枚具押圧 縦一 枚具押圧・横形突帯	17.4 (口)	横ナデ	にぶい	暗	○	○	○	○	○	○	○	普通		
	281	I10	VI	655	小牧3 A	白線部	口唇部のみ 白線に2段 の横二枚具押圧 縦一 枚具押圧・横形突帯	-	口縁横ナデ 銅部縦 ケズリ	にぶい	暗	○	○	○	○	○	○	○	○	良好	
282	H9-16	V b, VI	523他	小牧3 A	白線部	口唇部のみ 白線に3段 の横二枚具押圧 縦形突 帯	22.2 (口)	横ナデ	明赤陶	明赤陶と にぶい	○	○	○	○	○	○	○	○	良好	282～285 は同者 体、口縁 文	

乗組番号	船名	出立区	乗位	取上番号	型式	部位	外注 (調度・支様)	口徑 取上高 (cm)	選定 (乗組人以外)	色調		粉土							備考							
										外注	内注	白石	黄石	碧目	碧目	碧目	碧目	碧目		碧目	碧目	碧目	碧目			
54	283	H9	VI	807 他	小軟3 A	口線部	口管部み 口線に3段横二枚員押圧・縦形押し圧・楔形突起	-	横ナゲ	橙	にぶい・暗 色黄橙	○								○	○	良好	282 ~ 285 は同一鋼 材。283: 口線スス			
	284	H9-10	V a, VI	802 他	小軟3 A	胴部	縦形押し圧・楔形突起	-	縦ケズリ	にぶい・暗	明赤帯と 浅黄橙	○									○	○		良好		
	285	H9	VI	808 他	小軟3 A	胴部	縦形押し圧 底板上斜 沈線	-	斜ケズリ	にぶい・暗	にぶい・黄橙	○										○		○	良好	
	286	G-10, 110	V b, VI, TI	670 他	小軟3 A	口線部	口管部み 口線に3段横二枚員押圧・縦形押し圧・楔形突起	(28.0) (口)	丁字な横ナゲ	橙	橙	○													良好	
55	287	110	VI	624	小軟3 A	口線部	口管部み 口線に3段横二枚員押圧・縦形押し圧・楔形突起	-	横ナゲ	橙	橙	○												普通		
	288	H5	V b	324	小軟3 A	口線部	口管部み 口線に2段の二枚員押圧 斜黄橙・楔形押し	-	横ナゲ	橙	橙	○													良好	
	289	H5	V b	449	小軟3 A	口線部	口管部み 口線に3段横二枚員押圧 縦形押し圧・楔形突起	-	横ナゲ	橙	橙	○													良好	
	290	110	TI	641 他	小軟3 A	口線部	口管部み 口線に3段横二枚員押圧 縦形押し圧・楔形突起	-	横ナゲ	明赤帯	橙	○													良好	
	291	H5	V b	60	小軟3 A	口線部	口管部み 口線に3段横二枚員押圧 縦形押し圧・楔形突起	-	横ナゲ	明赤帯	明赤帯	○													良好	
	292	110	VI	618	小軟3 A	口線部	口管部み 口線に2段横二枚員押圧 縦形押し圧・楔形突起	-	丁字な横ナゲ	にぶい赤帯	にぶい赤帯	○													良好	
	293	06	V b	205	小軟3 A	口線部	口線に3段横二枚員押圧 縦形押し圧・楔形突起	-		橙	にぶい・暗	○													普通	摩耗
	294	09	V b	493	小軟3 A	口線部	口管部み 口線に3段横二枚員押圧 縦形押し圧・楔形突起	-	横ナゲ, ケズリ	にぶい赤帯	にぶい赤帯	○													良好	
	295	09	V b	477	小軟3 A	口線部	口管部み 口線に3段横二枚員押圧 縦形押し圧・楔形突起	-	横ナゲ	明赤帯	明赤帯	○													良好	
	296	H0	VI	851	小軟3 A	口線部	口管部み 口線に3段横二枚員押圧	-	横ナゲ	にぶい赤帯	にぶい・暗	○													普通	
	297	G4	V b	374	小軟3 A	口線部	口管部み 口線に3段横二枚員押圧 斜黄橙・楔形突起	-	横ナゲ	橙	橙	○													良好	
	298	H9	TI	1006	小軟3 A	口線部	口管部み 口線に3段横二枚員押圧 縦形押し圧・楔形突起	-	横ナゲ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○													良好	
	299	110	VI	673	小軟3 A	口線部	口管部み 口線に3段横二枚員押圧 縦形押し圧・楔形突起	-	横ナゲ	にぶい赤帯	にぶい赤帯	○													良好	
	300	06	V b	148	小軟3 A	胴部	二枚員押し圧・楔形突起	-	斜ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○													良好	同一鋼材
	301	110	TI	1164	小軟3 A	胴部	二枚員押し圧	-	縦ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○													良好	
	302	110	VI, TI	623 他	小軟3 A	胴部	横員押し圧・楔形突起	-	丁字な縦ケズリ	明赤帯	明赤帯	○													良好	スス
	303	G5, H-110	V b, VI, TI	153 他	小軟3 A	胴部	弧状の横 斜員押し圧	-	縦ケズリ	赤	明赤帯	○													普通	スス
	304	H0-9, 110	V b, VI, TI	643 他	小軟3 A	胴部	縦二枚員押し圧・楔形突起	-	横ナゲ	橙	橙	○													良好	
	305	H4	V b	329	小軟3 A	胴部	縦二枚員押し圧	-	縦ケズリ	にぶい・暗	明赤帯と にぶい・黄 色の混状	○													良好	282 他と 同、か
	306	F15	V b	892	小軟3 A	胴部	横条帯・暗い楔形突起	-	横ナゲ	褐灰	橙	○													良好	
	307	F16	V b	584	小軟3 A	胴部	横条帯・暗い員縁押し圧	-	横ナゲ	黒帯	にぶい・暗	○													良好	
	308	G5-6	V b	147 他	小軟3 A	胴部	密な縦員押し圧 底板上斜沈線	-	縦ケズリ	にぶい・暗	にぶい赤帯	○													良好	
	309	G5	V b	151	小軟3 A	胴部	密な縦員押し圧 底板上斜沈線	-	縦ケズリ+横ナゲ	にぶい赤帯	にぶい赤帯	○													良好	
	310	-	I	-	小軟3 A	胴部	密な縦員押し圧 底板上斜沈線	-	縦ケズリ	にぶい赤帯	褐灰	○													良好	
	311	06	V b	58	小軟3 A	胴部	密な縦員押し圧 底板上斜沈線	-	縦ケズリ	にぶい赤帯	褐灰	○													良好	
	312	H10	V b	1897	小軟3 A	底部	密な縦員押し圧 底板上斜沈線	-	縦ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○													良好	
	313	F7	V b, VI	352 他	小軟3 A	底部	縦員押し圧	(13.0) (底)	縦ケズリ 外注: 丁字なナゲ	橙	にぶい・暗	○													良好	
	56	314	H6, 110	V b, TI	54 他	札ノ元鋼	口線部	口管部み 口線に斜員押し圧 斜条帯・長い楔形突起	-	斜ケズリ+横ナゲ	橙	橙	○												良好	
		315	09	VI	100	札ノ元鋼	口線部	口管部み 口線に3段横二枚員押し圧 横条帯・楔形突起	-	横ナゲ	赤	赤	○												普通	
		316	F6	V a	599	札ノ元鋼	口線部	口管部み 口線に3段横二枚員押し圧 横条帯・楔形突起	-	丁字な縦ケズリ 口線横ナゲ	赤	赤	○												普通	
		317	E16-17	V b	567 他	札ノ元鋼	口線部	口管部み 口線に2枚員押し圧 横条帯・短い楔形突起	-	丁字な横ナゲ	赤帯	赤帯	○													良好
	318	F16	V b	610	札ノ元鋼	口線部	口管部み 口線に4段横二枚員押し圧 横条帯・楔形突起	-	横ナゲ	にぶい・暗	にぶい・暗	○													良好	

種別 (要約)	掲載 番号	出土 区画	層位	収蔵 番号	型式	部位	外面 (彫刻・文様)	口縁 底径 (cm)	調査 (無記入は内部)	色調		胎土					備考				
										外面	内面	白 色	黄 色	赤 色	黒 色	灰 色		他 色			
																			赤 色	黒 色	灰 色
50	319	G6	V b	119	札ノ元瓦	白線部	斜条痕	-	横一線ナデ	白線横ナデ	に深い	明赤	○	○	○	○	○	○	良好	内は胎状に赤	
	320	F6	V b	72	札ノ元瓦	胴部	口縁部ニ枚貝敷線押注 横条痕・彫刻文様	-	横ナズリ	丁字ナデ	に深い	明赤	○	○	○	○	○	○	良好		
	321	F17	V b	541	札ノ元瓦	胴部	浅い横条痕・彫刻文様	-	丁字ナデ	横条痕	赤	赤	○	○	○	○	○	○	普通		
	322	H9	V b, VI	521他	札ノ元瓦	胴部	浅い横条痕・彫刻文様	-	横ナズリ	白線部分 のみにナキ	赤	赤	○	○	○	○	○	○	普通		
	323	F14-15	V b	497他	札ノ元瓦	胴部	横条痕	-	丁字ナデ	横ナデ	に深い	明赤	○	○	○	○	○	○	普通		
	324	F16	V b	106	札ノ元瓦	胴部	横条痕	-	丁字ナデ	横ナデ	に深い	明赤	○	○	○	○	○	○	良好		
	325	G4	V b	200	札ノ元瓦	胴部	斜条痕	-	横ナズリ	赤	赤	○	○	○	○	○	○	○	良好		
	326	H6	V b	185	札ノ元瓦	胴部	横条痕・斜条痕	-	赤黄・縦ナズリ	底 部ナデ	に深い	明赤	○	○	○	○	○	○	普通		
	327	G11	V b	757	札ノ元瓦	胴部	斜条痕	-	丁字ナデ	横ナデ	に深い	明赤	○	○	○	○	○	○	普通		コゲ ヌス
	328	H10	Ti	679	札ノ元瓦	胴部	斜条痕	-	丁字ナデ	横ナデ	に深い	明赤	○	○	○	○	○	○	良好		
	329	H9	V b, VI	838他	引附原	口縁へ 胴部	8条の横条痕	(13.0) (口)	-	横ナズリ	横	浅黄赤	○	○	○	○	○	○	普通		ヌス
	330	I10	VI	639他	石版	白線部	縁付枚貝敷線押注	-	横ナデ	に深い	明赤	○	○	○	○	○	○	○	普通		
331	I10	Ti	1065	石版	白線部	縁付枚貝敷線押注	-	横ナデ	に深い	明赤	○	○	○	○	○	○	○	普通			
332	E19	V b	542	石版	白線部	斜条痕・2段の横二枚 貝敷線	-	丁字ナデ	横ナデ	に深い	明赤	○	○	○	○	○	○	普通			
333	H5	V a	448	石版	白線部	口唇部・白線横・斜 二枚貝敷線	縁付枚貝敷 線	-	ナデ	浅黄赤	浅黄赤	○	○	○	○	○	○	普通	内面は灰 色に成		
334	H5	V b	446	石版	白線部	口唇部・白線横・斜 二枚貝敷線	縁付枚貝敷 線	-	横ナズリ	に深い	明赤	○	○	○	○	○	○	普通	摩耗		
335	E18	V a	549他	石版	白線部	口唇部・白線3段の 二枚貝敷線押注	-	丁字ナデ	横ナデ	に深い	明赤	○	○	○	○	○	○	普通			
336	I10	VI	631	石版	胴部	縁付枚貝敷線	-	横ナズリ	に深い	明赤	○	○	○	○	○	○	○	普通			
337	F16	V b	590	石版	胴部	縁付枚貝敷線	-	横ナデ	赤灰	赤黄	○	○	○	○	○	○	○	普通			
338	F15	V b	898	石版	胴部	縁付枚貝敷線	-	丁字ナデ	横ナデ	に深い	明赤	○	○	○	○	○	○	良好	ヌス		
339	I10	Ti	626	石版	胴部	縁付枚貝敷線	-	丁字ナデ	横ナデ	に深い	明赤	○	○	○	○	○	○	良好			
340	F16	V b	594他	石版	胴部	縁付枚貝敷線	-	丁字ナデ	横ナデ	に深い	明赤	○	○	○	○	○	○	普通			
341	F14-15	V b	498他	石版	胴部	縁付枚貝敷線	-	横ナズリ	横	横	○	○	○	○	○	○	○	良好	ヌス、コ ゲ		
342	E18	V b	551	石版	胴部	縁付枚貝敷線	-	横ナズリ	丁字ナデ	横	横	○	○	○	○	○	○	良好			
343	E17	V a,b	557他	石版	胴部	縁付枚貝敷線	-	横ナズリ	横	横	○	○	○	○	○	○	○	普通			
344	I10	V b, VI, Ti	662	石版	胴部	縁付枚貝敷線	-	横ナズリ	横	横	○	○	○	○	○	○	○	普通			
345	I-H10	V b, VI, Ti	628他	石版	胴部	縁付枚貝敷線	-	横ナズリ	横	横	○	○	○	○	○	○	○	普通	同一個体		
346	I10	T2	-	石版	底部	斜条痕や巻貝殻遺文	-	不明	に深い	明赤	赤	○	○	○	○	○	○	普通	内面土器 地付		
347	F17	V b,-	590	石版	底部	-	-	ミダキ	明赤	黒	○	○	○	○	○	○	○	普通			
348	F12	V a	793	石版	底部	巻貝殻遺文	-	横ナデ	に深い	明赤	○	○	○	○	○	○	○	普通	摩耗		
50	349	H9	VI	1175他	下割塞	口縁へ 胴部	-	-	横ナズリ	口縁丁字 ナデ	明赤	明赤	○	○	○	○	○	普通	同一個体		
	350	I10	Ti	724	下割塞	白線部	横二枚貝敷線押注	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
	351	H9	VI	1172	下割塞	白線部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	352	H10	VI	924	下割塞	胴部	横二枚貝敷線押注	底部上横条痕	-	ミダキ	明赤	明赤	○	○	○	○	○	○	普通	同一個体	
	353	G11	V b	765	下割塞	胴部	横二枚貝敷線押注	-	ミダキ	に深い	明赤	黄灰	○	○	○	○	○	○	良好		
	354	F11	V b	1049他	下割塞	胴部	横二枚貝敷線押注	-	ミダキ	に深い	明赤	黄灰	○	○	○	○	○	○	良好		
	355	H13	V b	842	巻ノ丸	白線部	斜条痕	-	ミダキ	に深い	明赤	○	○	○	○	○	○	○	良好	同一個体	
	356	H13	V b	841	巻ノ丸	白線部	斜条痕	-	ミダキ	に深い	明赤	○	○	○	○	○	○	○	良好		
	357	G2	V b	押型文	胴部	小配な巻貝殻押型	-	-	丁字ナデ	明赤	に深い	明赤	○	○	○	○	○	○	普通		
	358	F19	V a	754	向山	胴部	横方山形押型	-	横ナデ	横	横	○	○	○	○	○	○	○	普通	ヌス	
	359	F19	V a	754	向山	胴部	横方山形押型	-	横ナデ	横	横	○	○	○	○	○	○	○	普通	下平コ ス	
	360	F12	V b	997	向山	胴部	横方山形押型	-	横ナデ	横	横	○	○	○	○	○	○	○	普通	コゲ	
50	361	F5	V b	30	東ノ神A	白線部	口唇部・白線横・斜 二枚貝敷線	-	丁字ナデ	横ナデ	に深い	明赤	○	○	○	○	○	○	普通		
	362	F5	V b	14	東ノ神A	白線部	口唇部・白線横・斜 二枚貝敷線	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	363	F6	V b	3	東ノ神A	白線部	口唇部・白線横・斜 二枚貝敷線	-	-	-	明赤	に深い	明赤	○	○	○	○	○	○	良好	
	364	F6	V b	4	東ノ神A	白線部	口唇部・白線横・斜 二枚貝敷線	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	365	F5	V b	84	東ノ神A	胴部	横二枚貝敷線押注	縦に網目状遺文	-	ミダキに近い丁字 ナデ	明赤	に深い	明赤	○	○	○	○	○	○	良好	同一個体
	366	F4	V b	-	東ノ神A	胴部	縦に網目状遺文	-	-	-	明赤	に深い	明赤	○	○	○	○	○	○	良好	
	367	F5	V b	82	東ノ神A	胴部	縦に網目状遺文	-	-	-	明赤	明赤	○	○	○	○	○	○	○	良好	
	368	F4	V b	101他	東ノ神A	胴部	縦に網目状遺文	-	-	-	明赤	に深い	明赤	○	○	○	○	○	○	良好	
	369	F6	V b	2	東ノ神A	胴部	縦に網目状遺文	-	-	-	横	横	○	○	○	○	○	○	○	良好	
	370	F5	V b, VI	23他	東ノ神A	胴部	縦に網目状遺文	-	-	-	横	横	○	○	○	○	○	○	○	良好	裏面土器
	371	G3	V b	25他	東ノ神A	胴部	縦に網目状遺文	-	-	-	横	横	○	○	○	○	○	○	○	良好	裏面土器
	372	G3	V b	-	東ノ神A	胴部	縦に網目状遺文	-	-	-	横ナデ	に深い	明赤	○	○	○	○	○	○	普通	
373	F5	V b	76	東ノ神A	胴部	斜条痕	-	横ナデ	横	横	○	○	○	○	○	○	○	○	良好		
374	F16	V a	598	内野里土 製瓦	完形	無文	-	横2.1 厚1.0	丁字ナデ	明赤	明赤	○	○	○	○	○	○	○	普通	手欠け	

排図番号	発掘番号	出土区	層位	取上番号	型式	器種	部位	外形 (調整・文様)	口径 底径 (cm)	調整 (無記入は内部)	色調		胎土					焼成	備考		
											外面	内面	白 石	赤 石	黄 白 石	青 石	黒 石			灰 石	
59	375	B2	-	-	不明	磨台の 接合部	貝殻ナデ	-	-	指押さえ線上方向ナ デ	明赤色	明赤色	○	○	○	○	○	○	○	普通	古径5.4 cm
	376	F5	V b	-	不明	白線部	-	-	-	丁寧なナデ	褐色	褐色	○	○	○	○	○	○	普通	スス	

第8表 縄文時代早期石器観察表

排図 番号	発掘 番号	出土区	層	取上 番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
61	377	E5	V b	114	局部磨製石匙	2.60	1.86	0.25	1.3	頁岩	
	378	B11	V b	472	局部磨製石匙	2.59	2.10	0.38	1.5	頁岩	
	379	F5	V b	31	打製石匙	2.83	1.50	0.30	1.2	玉髄	
	380	D5	V b	117	打製石匙	2.72	2.90	0.62	(3.2)	チャート	
	381	I10	VI	640	打製石匙	1.95	(1.13)	0.28	(0.3)	チャート	
	382	G10	VI	909	打製石匙	(2.20)	(1.50)	0.22	(0.4)	磨礫石	
	383	E5	V b	113	磨石	2.85	2.95	0.85	4.7	チャート	
	384	F5	VI	89	石硯	2.29	1.90	1.45	4.7	磨礫石	
	385	B9	VI	979	石硯	1.22	1.95	1.75	4.4	磨礫石	
	386	B13	VI	475	局部磨製石片	5.30	2.60	0.80	14.9	頁岩	
387	I10	VI	619	磨石・磨石類	(10.90)	9.60	4.95	(691.6)	礫砂岩		
388	G5	V b	245	磨石・磨石類	10.50	6.40	(3.60)	(338.0)	砂岩		
389	S06	①	18	磨石・磨石類	13.00	10.92	4.70	(104.1)	砂岩		
390	F8	I	-	磨石・磨石類	11.10	7.30	5.00	(571.9)	砂岩		
391	E5	層乱	-	磨石・磨石類	(11.45)	7.85	4.85	(612.7)	砂岩		
392	B9	VI	540	磨石・磨石類	(9.40)	7.50	4.35	(342.5)	砂岩		
393	I10	VI	637	磨石・磨石類	(15.60)	(9.70)	6.40	(1249.4)	砂岩		
394	B6	V b	56	磨石・磨石類	(9.50)	(8.50)	(4.80)	(442.7)	砂岩		
395	G5	V b	251	磨石・磨石類	12.00	(8.20)	6.50	(874.0)	砂岩		
396	F11	V a	796	磨石・磨石類	(7.10)	8.95	5.30	(404.7)	砂岩		
397	F5	V b	16	磨石・磨石類	(7.20)	6.60	(4.70)	(317.9)	砂岩		
398	E5	V b	111	磨石・磨石類	10.10	8.50	4.30	(222.2)	砂岩		
399	F5	V b	24	磨石・磨石類	(6.90)	(8.40)	(4.45)	(310.2)	砂岩		
400	G6	V b	128	磨石・磨石類	11.90	6.42	3.30	(28.2)	砂岩		
401	G5	V b	263	磨石・磨石類	(6.60)	(7.90)	(2.40)	(154.1)	砂岩		
402	G13	VI	1242	磨石・磨石類	(7.90)	10.80	6.05	(105.2)	砂岩		
403	F5	V b	34	磨石・磨石類	(10.30)	(5.80)	(5.50)	(287.9)	砂岩		
404	F6	VI	51	磨石・磨石類	(7.90)	(6.00)	(4.35)	(225.2)	砂岩		

第9表 弥生時代土器観察表

排図 番号	発掘 番号	出土区	層位	取上 番号	型式	器種	部位	調整		色調		胎土					焼成	備考	
								外面	内面	外面	内面	白 石	赤 石	黄 白 石	青 石	黒 石			灰 石
65	405	-	I	-	高橋	甕	白線部	丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	黄灰	浅黄	○	○	○	○	○	○	良好	スス
	406	S06	①	13	高橋	甕	肩部	横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい黄	○	○	○	○	○	○	良好	
	407	-	I	-	入来Ⅱ	甕	白線部	ヘラナデ	ヘラナデ	橙	橙	○	○	○	○	○	○	普通	磨滅
	408	-	I	-	入来Ⅱ	甕	脚台部	ヘラ横ナデ後ヘラ ナデ	-	にぶい橙	橙	○	○	○	○	○	○	普通	内面磨滅
	409	大曾土 坑Ⅰ	③	14	入来Ⅱ	甕	脚台部	縦割ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい橙	赤	○	○	○	○	○	○	普通	磨滅 粗い土

第10表 古墳時代土器観察表

排図 番号	発掘 番号	出土区	層位	取上 番号	型式	器種	部位	調整		色調		胎土					焼成	備考		
								外面	内面	外面	内面	白 石	赤 石	黄 白 石	青 石	黒 石			灰 石	
66	410	F8	I	-	辻堂原	甕	白線部	白線はヘラ横ナデ ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	○	○	○	○	○	○	良好	スス	
	411	F8	I	-	辻堂原	甕	白線部	ヘラ横・斜ナデ	ヘラ横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	○	○	○	○	○	○	良好	スス	
	412	F13	I	-	辻堂原	甕	底部	丁寧なヘラ横ナデ	縦ナデ	にぶい橙	浅黄	○	○	○	○	○	○	普通	コゲ	
	413	F8	I	-	辻堂原	高坪	白線部	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○	○	○	○	○	良好	
	414	F8	I	-	辻堂原	高坪	白線部	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	橙	橙	○	○	○	○	○	○	○	良好	
	415	F8	I	-	辻堂原	高坪	耳高・ 脚部	ヘラ横ナデ	斜内・丁寧なヘラ 横ナデ 斜内・ヘラ 横ナデ 脚部：丁 字なナデ	灰白	褐色	○	○	○	○	○	○	○	普通	
	416	-	I	-	辻堂原	高坪	耳高・ 脚部	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ 脚 内：指押しとヘラ 横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	○	○	○	○	○	○	普通		

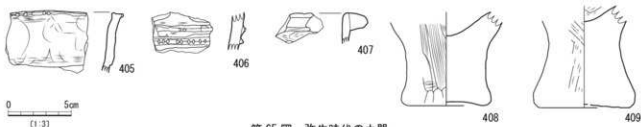
第3節 弥生時代の調査

土器が5点出土している(第65図)。近世の溝状遺構6号と中世の大型土坑1号で各1点出土しているが、ほかの3点は表土で出土している。いずれも甕形土器で、前期後葉の高橋式土器(405・406)2点、中期中葉の入来Ⅱ式土器(407～409)3点である。

405はやや外傾してまっすぐ立ち上がる器形で、口縁端が内外に張り出している。内面は削り出して張り出しているが、外側は貼り付けた低い三角突帯に浅い刻み目が施されている。口縁端は欠損が目立つ。肩部外面は段状となり、下半が薄い。内外ともヘラによる丁寧な横方向のナデ仕上げである。外面にはススが附着している。406は2条の三角貼付突帯がある。上側の突帯は不明

が、下側には細かいヘラ刻みが密にみられる。内外とも横方向のナデ仕上げである。白色石・雲母を多く含み、5mmほどの灰色石もある。

407は全体的に欠損、磨減が目立つ。逆L字状に近い口縁部だが、やや外に向かって傾いている。口唇部の凹線は不明である。内外ともヘラナデ調整である。408・409は脚台で、ともに端部の欠けが目立つが、脚台端直径は408が7.2cm、409が8.0cmである。端部は丸みを帯び、あげ底である。調整は408の外面が縦方向のハケナデのあとヘラナデである。409は内外・底ともヘラナデ調整で、外は縦・斜め方向である。外は鈍い橙色を呈しているが、赤っぽい部分もある。胎土は粗く、5mm大の石粒も多い。



第65図 弥生時代の土器

第4節 古墳時代の調査

表土から土器が57点出土している。南へ下降する谷部のF-8区で特に多く出土している。甕形土器39点(口縁部7点、胴部32点)、壺形土器6点、高坏形土器9点、鉢形土器2点、埴形土器1点である。ほとんどが小破片で、図化できたのは7点である(第66図)。

甕形土器(410・411)は口縁部が外傾してまっすぐ伸びるもので、胴部には上下からつまんだ貼付突帯のあるものがある。口縁端は丸みをもっている。410は摩耗が目立つが、外面調整は端部が横方向、その下が斜め方向のハケナデである。内面調整は横方向のヘラナデである。411の調整は内外ともヘラナデで、外面が縦・斜め、内面が縦方向である。410・411ともススが附着している。

壺形土器の底部(412)は安定した丸底で、外面調整は丁寧である。内面はやや赤っぽい。

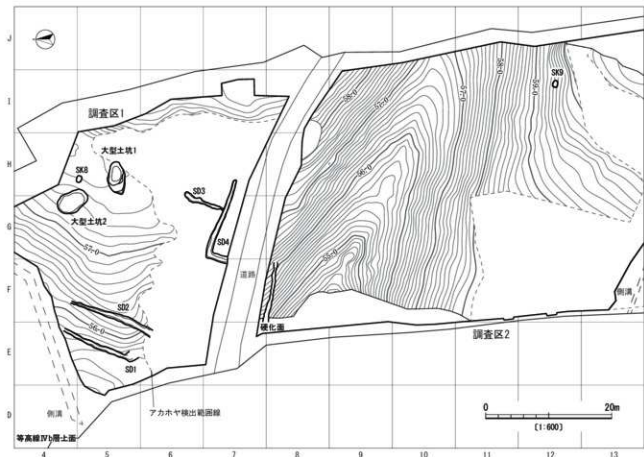
高坏形土器(413～416)は平らな底部と外へまっすぐ広がる口縁部から成る坏部と、短い筒部と外へ広がる

裾部から成る脚部である。413は底部から口縁部の破片で、接合できないが同一個体と考えられる口縁部が他に1点ある。内外とも丁寧な横方向ヘラナデである。414も413と同じような口縁部で、ミガキに近い丁寧な横ナデ調整をしている。415は坏部の底と、脚の筒部と裾部である。筒部は下の方へやや広がる形を呈し、裾部は大きく広がる。坏部と脚部のつなぎは団子状の粘土をはめ込んでいる。筒部外面は縦方向、坏部内面は丁寧なヘラナデで仕上げ、脚部の内面は横方向、裾部はミガキに近いヘラナデである。416も415と似た器形だが、坏部底の中央部はやや凹んでいる。脚部の筒部は短く、坏部の接合部から緩やかに裾部へ広がっている。坏部と脚部のつなぎは415と同じである。内外ともヘラナデだが、外面は横方向、内面は縦方向である。5mm大の灰白色石も含んでいる。

これらは辻堂原式土器に該当すると思われる。



第66図 古墳時代の土器



第 67 図 中世の遺構配置図

第 5 節 中世の調査

1 調査の概要

中世の遺構や遺物は、北側の調査区 1 に集中している。調査区 1 の表土下は畑地造成等による擾乱を受けており、第 67 図における破線以南はアカホヤ火山灰(IV b 層)より上位が削平されているなど、残存状況が悪い。遺物も土坑や溝の中から出土したものと表土一括がほとんどであり、上面の削平がなければかなり多くの遺物が出土したものと考えられる。

遺構は大型土坑 2 基、土坑 2 基、溝状遺構 4 条、硬化面 1 条が検出されている。大型土坑 2 基と礎を伴う土坑 8 号は H・G・4・5 区付近に近接している。大型土坑 1・2 号間で遺物が接合したことや、土坑 8 号内の礎と大型土坑 1 号内の礎が類似することから、これらの遺構は何かの関連が考えられる。

溝状遺構 1・2 号は E・F・4～6 区で並行に並んだ状態で、溝状遺構 3・4 号は F～H・6～7 区で交差した状態で検出されており、出土遺物から中世の遺構としたが、近世以後の可能性もある。谷部以南では土坑 9 号の 1 基のみ検出されている。

2 遺構

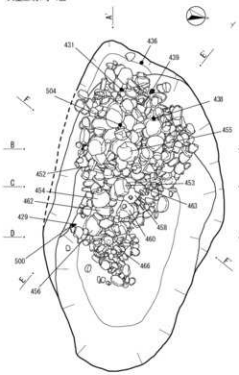
(1) 大型土坑

大型土坑 1 号 (第 68 図)

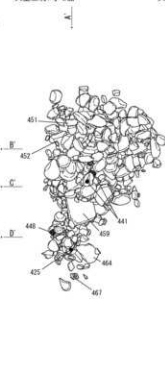
H-5 区の IV b～V 層上面で検出された。検出面より上部は削平を受けている。埋土に II・III 層土が入っていることから、II～III 層付近から掘り込まれたものと考えられる。平面は長軸約 5.2 m、短軸約 3 m の楕円形で、検出面からの深さは約 1 m で、西側にやや緩やかな段をもつ。底面は平坦で、VIII～IX 層まで掘り込まれている。

土坑内からは人頭大など、大型のものを含む大量の礎が出土した。石材は砂岩が多く凝灰岩や軽石も含まれ、ほぼすべてが円礎であり、遺跡の西側下方にある安楽川の河床礎と構成が同じであることから、出土礎は安楽川から運ばれたものと考えられる。遺物は礎に混じった状態で石塔・板葺や石臼、陶磁器等が出土している。埋土内の礎・遺物は埋土 1～3 に含まれ、埋土 4～7 には含まれない(ただし埋土 4 には一部食い込む)。埋土 1～3 中の礎は西側に多く、中央部の深い部分に流れ込むように入っている。また埋土 4～7 は遺構の掘削層と一致することから、この遺構を掘り上げた土と考えられ、位置は東側に偏る。よってこの遺構の掘削後、東側から掘削土である埋土 4～7 が入り、その後、西側から礎や埋土 1～3 が入ったと考えられる。なお礎は集中していることから、人為的に一度に入れられ、その後埋土 1～3

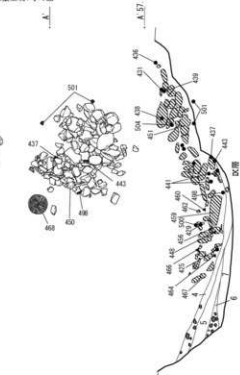
大型土坑1号-1面



大型土坑1号-2面



大型土坑1号-3面



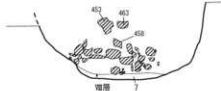
B. E 57.6m



E. F 57.6m



C. C 57.6m



F. F 57.6m



D. D 57.6m

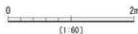


1. 黒色土(10192/1) シルト質堆積土、粘性弱い、ややしまり有り。
1~5cm次のアカホヤ粒子を10%以下含む。
2. 黒色土(10192/1) 埋土1を基本としやや赤みがかる。
0.1~5cm次のアカホヤ粒子・ブロックを20%含み目立つ。
3. 黒色土(10190/1/1) シルト質堆積土、粘性有り、ややしまり有り。
1cm次のアカホヤ粒子を若干含む。II~III層基本。
4. 黒褐色土(10192/3) シルト質堆積土、粘性やや有り、しまり有り。
埋土3とV・VI層土が混じる。壁面に5~10cm次のV・VI層ブロックが多い。
5. 褐色土(10194/4) シルト質堆積土、粘性やや有り、しまり有り。
埋・IX層を基本に5cm以下の埋土区層がブロック状に混じる。
1cm以下の赤色粒子や炭化物を若干含む。
6. 黒褐色土(10192/3) シルト質堆積土、粘性やや有り、しまり有り。
20cm以下のアカホヤ・サツマブロックを若干、硬質のV・VI層ブロックを30~40%含む。
7. 暗褐色土(10193/3) シルト質堆積土、粘性やや有り、しまり有り。
埋~埋層の混合土。埋・IX層土がブロック状に20~30%混じる。

● 土部

アカホヤブロック

V・VI層ブロック



(1/60)

第 68 図 大型土坑 1 号

が入り、縦間まで入り込んだと考えられる。

大型土坑 2号 (第 69 図)

G・H-4・5区のIV b層上面で検出された。検出面より上位は削平を受けている。遺構の東側と西側の壁面付近は攪乱を受けており、平面は長軸約6m、短軸約2mの楕円形で検出面からの深さは約40cmである。柱穴や施土等はみられない。床面は平坦であり、V層まで掘り込まれている。遺物は青磁や須恵器、鉄製品が出土している。埋土はアカホヤ火山灰ブロックを含む黒色土である。アカホヤ火山灰ブロックは床面付近に多く含まれ、上位は黒色土が主体である。埋土はほぼ水平に分層できるため、掘り上げて地表面に置かれた掘削土が、地表面の黒色土が主体となり自然流入したと推定される。遺物も床面付近は無く、土の流入に伴い入り込んだと考えられる。

大型土坑内出土遺物

2基の大型土坑からは多くの遺物が出土しており、互いに接合できた遺物もあることから、①大型土坑1号の出土遺物②大型土坑2号の出土遺物③大型土坑1・2号出土の接合遺物と3つに分けて記載する。

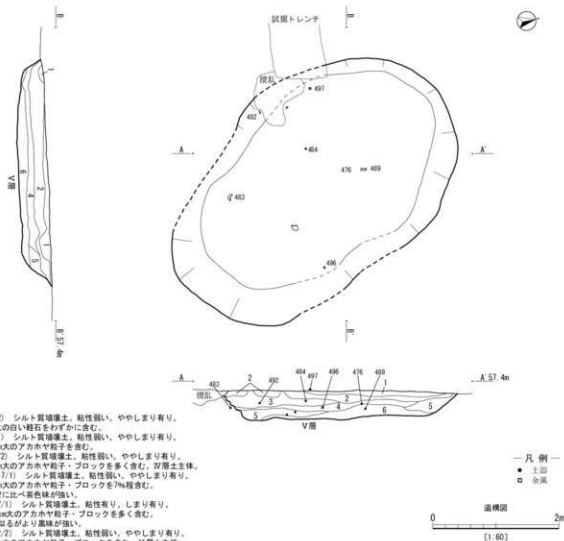
大型土坑1号の出土遺物

(第70図～第73図 417～468)

417・418は土師器で、皿か杯の口縁部である。417は口縁先端に向け細くなり、垂直に立ち上がる。418は幅3mm程度と極めて薄く、やや外反する。

419は土師質土器の鉢である。底部から胴部へほぼ直角に立ち上がり、内面及び底面に回転ナデの痕跡が残る。420は瓦質の羽釜である。胎土は灰白色で、鏝の貼り付け跡が明瞭である。鏝から下にススはみられない。

421は東播系須恵器の握鉢である。胎土は灰黄色で、口唇付近で内湾する。



第 69 図 大型土坑 2号

422・423は中世須恵器甕の胴部である。422は矢羽根状、423は斜格子状のタタキが外面に残る。

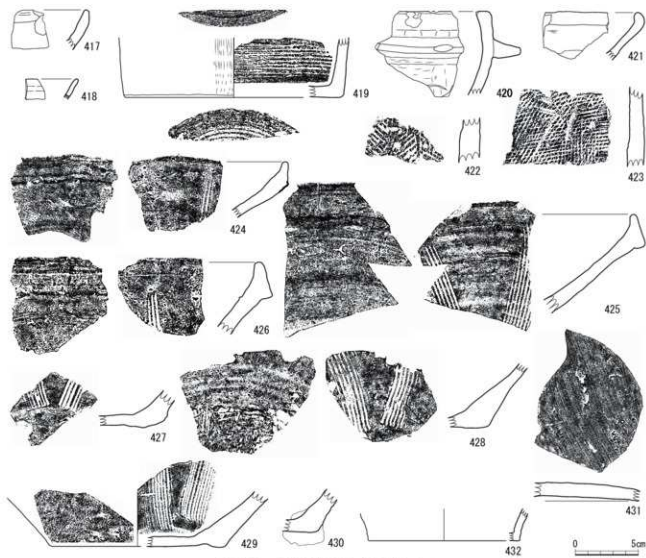
424～431は備前焼である。424は口縁が上方に突出する。柳目は3条のみ確認できる。425・426は口縁上端と下端の突出が強いもので、425は8条以上の柳目が確認でき、柳目上端付近まで摩耗した使用痕が残る。426は外面が赤褐色で口縁外面に光沢がみられ、柳目は4条のみ確認できる。427～429は底部で、427は柳目が1単位5条と7条の箇所がみられ、内面が大変滑らかである。428は柳目が1単位7条で、底面に蕨状の繊維痕が残る。429は柳目が1単位10条で1条が他より細く、底面に淡黄色の粘土が付着している。430・431は壺の底部である。430は内外に暗オリーブ色の自然釉がかかる。底面に置台に使用したと考えられる砂入りの硬質土が付着しており、内面にも砂が付着する。431は底面で、中央が上げ底となり、内面にへら状の痕跡が残る。

432は無軸陶器の壺で、薄く褐色を呈す。

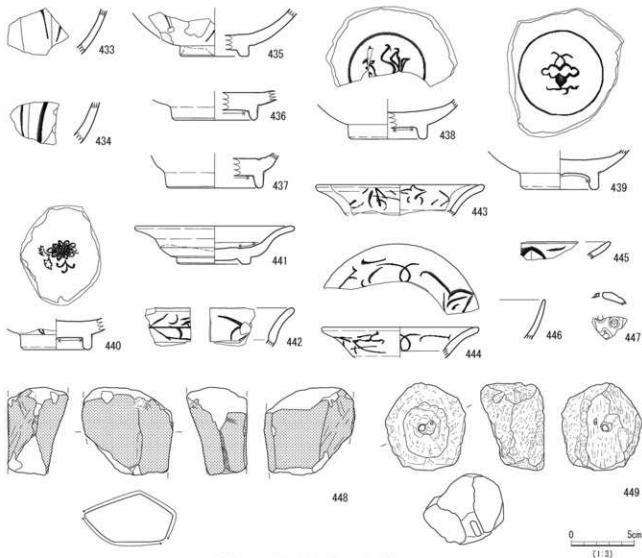
433～445は龍泉窯系青磁である。433～440は碗で、433～435は上田B類に比定され、蓮弁文をもつものである。433は青緑色を呈し、鋳がみられず、434は稜で蓮弁を表現している。435は蓮弁を片切形で表現しており、畳付の軸は高台内面途中までかかる。436・437は軸が高台内面までかかり、高台内の軸は掻き取られている。438～440は底部付近のみ残存しており、見込みに草花文様の印文がみられ、440は胴部外面に蓮弁と考えられる文様の一部が残る。441～444は口縁が外反する皿で、441は体部下半から高台内面まで露胎で、見込みの軸を輪状に掻き取っており、露胎部分は赤褐色の発色がみられる。442～444は胴部内外面に草花文様の線刻が施されている。445は外面に蓮弁を持つ、浅型碗の口縁の一部と考えられる。

446は白磁碗の口縁で、無文である。

447は円状の孔が1か所あり、凸部に金色の着色が残



第70図 大型土坑1号の出土遺物(1)



第71図 大型土坑1号の出土遺物(2)

る白磁で、人などの形状をした袋物や水滴の一部である可能性がある。

448は砂岩製の砥石で、5面に研いだ痕跡が残る。449は軽石製品で、円錐状に削り抜き、奥に2か所穿孔を施している。

450～467は石塔・石碑と考えられる石製品で、450～460は五輪塔の一部である。

450・451は空風輪で、450は軽石製で空輪が低く、ホゾが比較的大きい。451は凝灰岩製で丁寧に造られており、風輪の上面は外側に傾斜し、空輪は風輪と比較して幅が狭く、側面は稜がみられる。

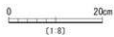
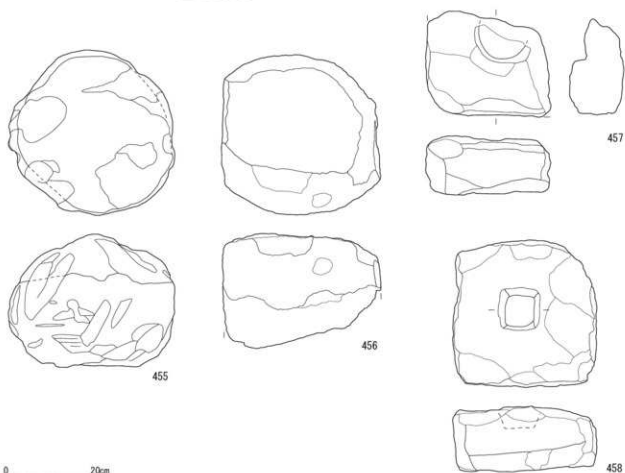
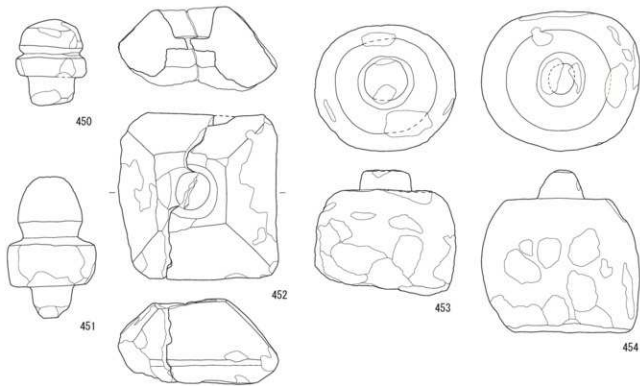
452は凝灰岩製の火輪で、上下両面にホゾ穴がみられる。軒口は反りが無く、下に向かい傾斜する。

453～455は水輪である。453は軽石製で、形状は上面が円形、側面が隅丸方形である。454は凝灰岩製で、ホゾが先端に向け幅が狭くなる。形状は上面・側面とも隅丸方形に近く、側面は左右非対称である。455は破損

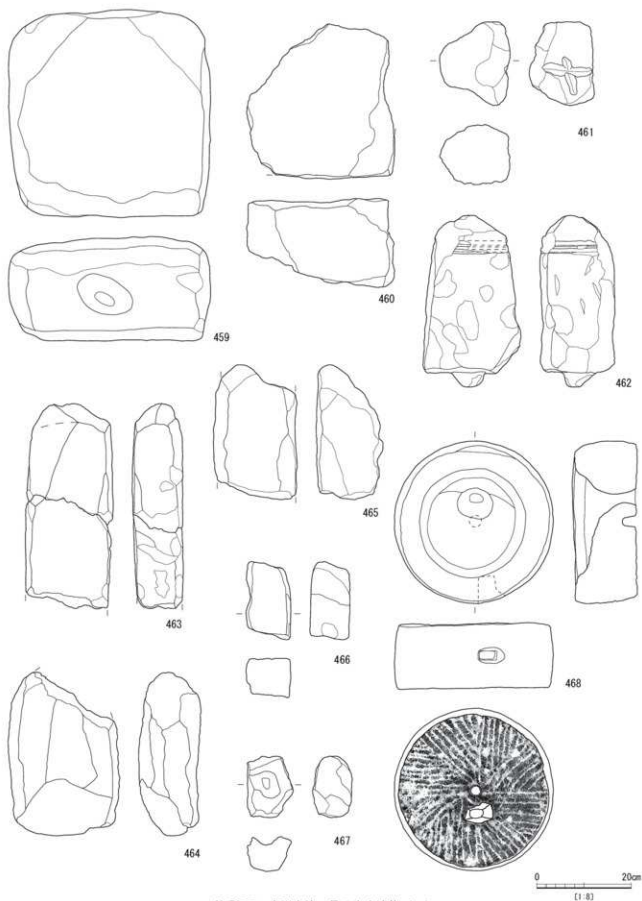
部分が多く、ホゾがあったかは不明である。灰黒色の凝灰岩製で、志布志湾の夏井海岸でみられる石材と類似する。

456～460は地輪である。456は凝灰岩製で、溶結が弱く剥離が激しいため、側面の欠損部が大きい。457は幅約30cmの軽石製でホゾ穴は円形、458は凝灰岩製でホゾ穴は方形である。459は456と同じ溶結の弱い凝灰岩製で、側面に楕円状の凹みがみられ、重量は52kgと重い。460は凝灰岩製で、上面と下面の大きさはほぼ均等である。

461～463は軽石製の板碑である。461は、側面に薬研影りの一部が残る。462の頭部は三角柱状に加工され、額部に2条の線を正面及び側面に刻んでいる。正面に梵字等の文字はみられない。また、底面にホゾがあるという特徴がある。463は正面及び両側面は丁寧に平坦に加工されている。頭部が三角状になっているが、破損が多く明瞭ではなく、額部の2条線や梵字の刻みはみられな



第72図 大型土坑1号の出土遺物(3)



第73図 大型土坑1号の出土遺物(4)

い。底面は破損しており、全体の高さは不明である。

464・465は凝灰岩製で破損部が多いが、形状から板碑の可能性はある。

466・467は石塔等の一部と考えられるものである。466は凝灰岩製で、側面が平坦に加工されている。467は軽石製で、石材は461に近く、側面に楕円形の穴がみられる。

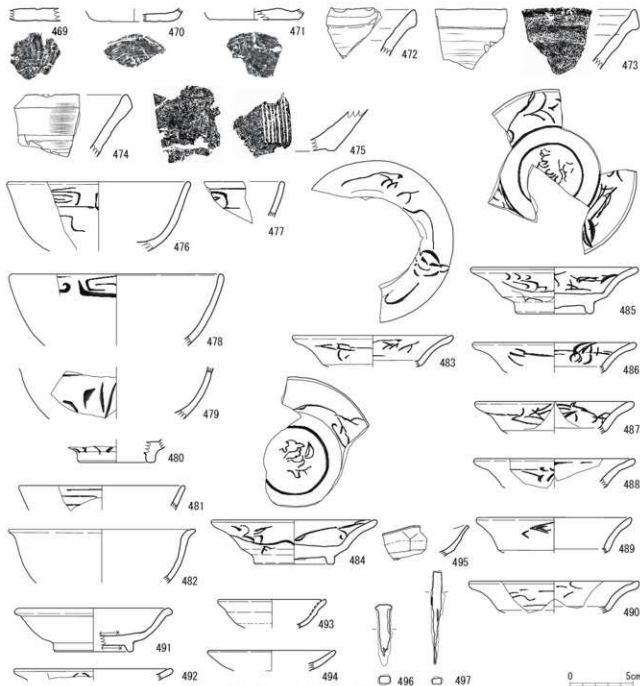
468は石臼の上臼部で、臼面は8分割である。

大型土坑 2号の出土遺物 (第74図 469～497)

469～471は土師器皿の底部である。469は底面、471は底部内面に凹凸がみられ、470は底面に糸切りとヘラ状工具の痕跡が残る。

472～474は東播系須恵器の埴鉢である。472は注ぎ口で、口縁外面に光沢のある釉がかかる。473は口縁端が上下にやや突出し、内面に積み上げ痕が残る。474は外面に回転ハケの痕跡が明瞭である。

475は備前焼の埴鉢である。内面は黄白色で、7条の櫛目が確認できる。



第74図 大型土坑 2号の出土遺物

476～492は龍泉窯系青磁である。476～478は上田C類に比定される、雷文帯をもつ碗である。476は雷文帯の下に一部文様が残る、口縁はやや外反する。477は口縁がやや内弯する。478は黒色が強く、軸が厚いため文様が不明瞭な部分が多い。479は外面に蓮弁、その上に雷文とみられる一部が残る。480は底部で、高台近くに蓮弁の一部が残る。481は口縁外面に横線の文様のみ残る。482は口縁部が外反する碗で上田D類に分類される。483～491は外反する皿である。483～490は体部内面及び外面に草花文か蓮花文と考えられる文様を有する。484・485は見込み部分に花文の印がみられる。491は文様が無く、見込みと高台内は輪状に釉剥ぎがなされる。492は坏と考えられる口縁部で、外面に蓮弁文の上端が残る。

493～495は白磁である。493はやや黄味を帯び、口縁が外反し体部外面下半が露胎の皿で、森田E群に比定される。494は緩く立ち上がる皿の口縁で、森田D群に比定されるものと考えられる。495は多角坏で、体部下面が露胎である。

496・497は断面が長方形をなす角釘である。厚さは、496は8×6mm程度、497は7×5mm程度である。

大型土坑1・2号出土の接合遺物

(第75図～第77図 498～510)

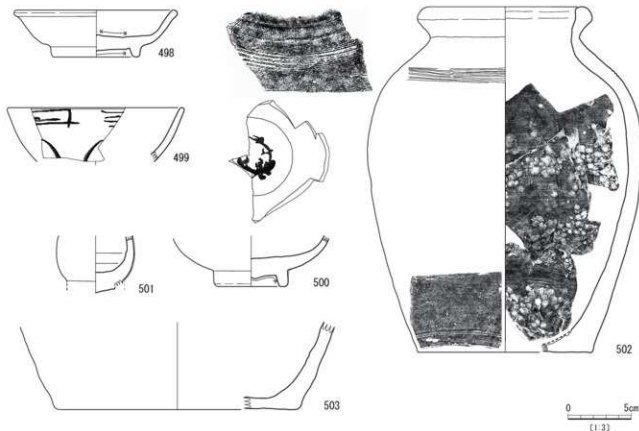
498～500は龍泉窯系青磁である。498は皿で、口縁部がやや外反し、見込みと高台内に輪状の釉剥ぎがなされる。499は上田C類に比定される碗で、外面口縁付近の雷文帯の下に蓮弁文の一部が残る。500は碗で、高台内が輪状に釉剥ぎされ、見込みに圏線と花文の印を有する。

501は青磁の小型台付瓶である。底部は厚みがあり、口縁に向かい薄くなっている。高台内は釉が残る。

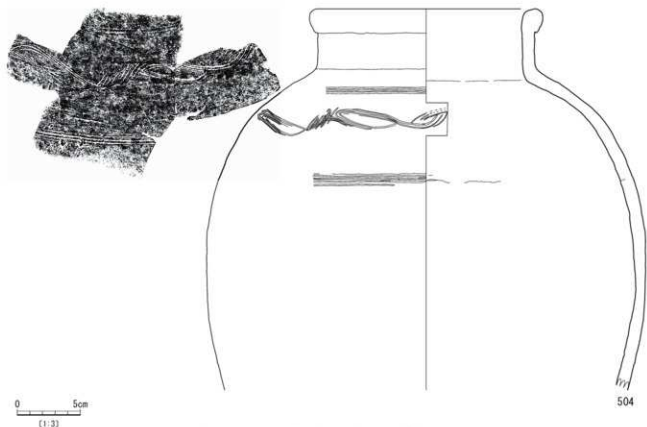
502は備前焼か中国産と考えられる陶器の壺である。肩部に櫛状の工具で横方向に浅い沈線を描き、内面は剥離が目立ち、底面は厚さ4mm程度と薄い。

503・504は備前焼の壺である。503は底径19.0cmの底部で、外面は灰白色を呈する。504は玉縁状の口縁で、肩部に櫛を用い2条の圏線、その間に交差する波状の文様を描く。

505～510は接合できないが、同一個体と考えられるタイ産暗緑灰釉陶器の四耳壺である。下半部が埋められた時に、二次焼成を受けており、底部近くは火を受けていないが、口縁部から胴下半部まで釉薬が溶けている。口縁は垂直に立ち上がり、最大径18.0cmである。頸部



第75図 大型土坑1号・2号の出土遺物(1)



第76図 大型土坑1号・2号の出土遺物(2)

は最小径10.4cmまで縮れ、最小径部の下に1条の突帯と、耳部の付け根部分が残る。胴部は最大径34.0cmで、底部付近まで軸がかかり、内面に輪積み痕が部分的に残存する。第77図には想定復元図を示す。

(2) 土坑

土坑8号(第78図)

H-4・5区のⅦ層上面で検出された。上位は攪乱を受けている。平面形は整然とした楕円形を呈し、検出面での規模は約110×80cmで、深さは約20cmである。埋土は黒褐色土の単一埋土であり、Ⅱ層もしくはⅢ層土の可能性が高く、上面からの流入土と推測される。側壁に沿うように長径20～30cm、短径10～20cm程度の楕円形の礫が並べられており、東壁沿いは2～3段に積まれている。北側は円礫が置かれていないが、人為的に外されたか、元から無かったかは不明である。約4m南側に礫が多量に入った大型土坑1号があり、類似した礫が入っていることから、関連する可能性がある。

土坑9号(第78図)

I-12区のIVb層で検出された。上位は攪乱を受けている。平面形はやや不定形な楕円形であり、検出面での規模は約110×80cm、深さは約45cmで、床面はVb層付近である。埋土は黒色土にアカホヤ火山灰ブロックが混ざっており、遺構掘削土の一部と考えられる。ほぼ垂直に掘り込まれており、床面は平坦である。遺物は出

土していないが、形状が比較的しっかりしており、埋土が大型土坑と類似することから、中世の遺構と考えられる。

(3) 溝状遺構

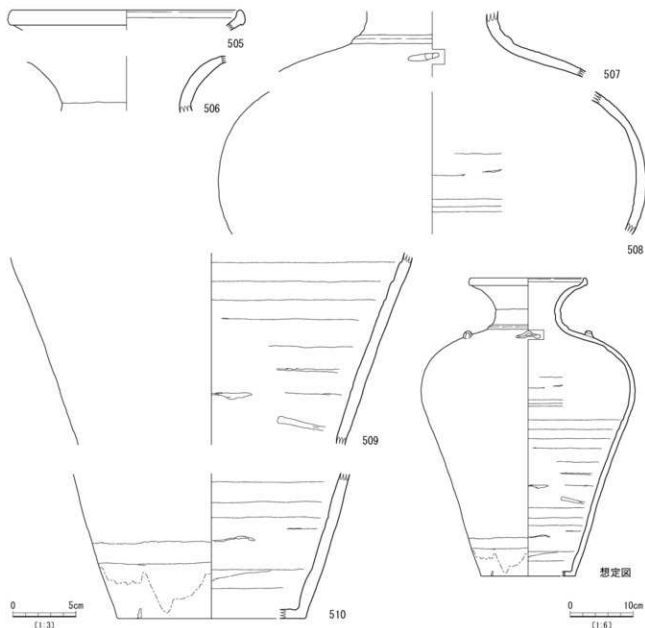
溝状遺構1号(第79図・第80図)

E-4・5区のIVb～V層上面で検出された。上位は攪乱を受けている。北北東から南南西方向へ地形に沿ってほぼ直線状に掘り込まれている。南側で南東方向へ曲がるが、その先は攪乱を受けている。検出できた部分は長さ約12m、幅約50～80cm、深さは約20cmである。特に北側は上部を大きく削平されており、深さは5cm程度しか残存していない。埋土は黒色土にアカホヤ火山灰ブロックが混じっており、遺構掘削土の一部と考えられ、B断面の埋土状況より、標高が高い東側から流入したと考えられる。

埋土内で出土した遺物を2点図化した。511は備前焼の壺形部で、外面に3条の沈線がある。512は龍泉窯系青磁の碗か杯の外反する口縁部で、体部外面に草花文と考えられる文様がみられる。

溝状遺構2号(第79図・第80図)

E・F-4～6区のIVb～V層上面で検出された。上位は攪乱を受けている。溝状遺構1号に並行し、北北東から南南西方向へ直線状に掘り込まれている。南側は攪乱を受けており、どの付近まで延びるかは不明である。



第77図 大型土坑1号・2号の出土遺物(3)

検出できた部分は長さ約12m、幅約50～100cm、深さは約40cmである。埋土分布をみると、遺構掘削土であるアカホヤ火山灰ブロックと黒色土の混合土が入り込んだ後、地表上の黒色土が入ったものと推定される。埋土1から中世の遺物や破砕した礎が出土している。

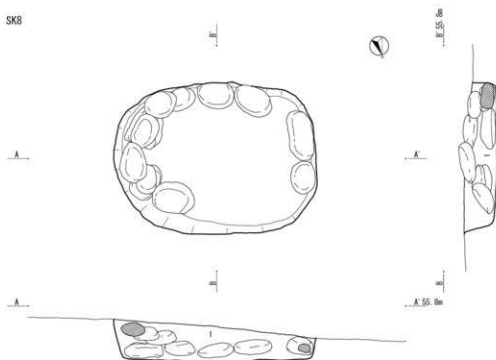
埋土内から出土した遺物を7点図化した。513は東播系須恵器の捏鉢口縁部で、口縁端が上下に突出する。514は瀬戸焼の灰軸陶器で、壺の胴部付近と考えられ、やや緑色を呈した軸がかかる。515は常滑焼甕の頭～肩部で、同一個体の可能性が高い胴部が大型土坑1号から2点出土している。516は備前焼播鉢の口縁部で、赤灰色を呈し、端部が上下に突出する。517は中国産と考えられる陶器瓶の口縁部で、残存部全面に鉛軸がかかる。

518は口弁の白磁で、大宰府分類の白磁碗IX類に比定されるものである。胴部下位は無軸である。519は青花で、小野分類の皿B群に比定されるものである。見込みに獅子、胴部外面に唐草文と考えられる一部が残る。

溝状遺構3号(第80図)

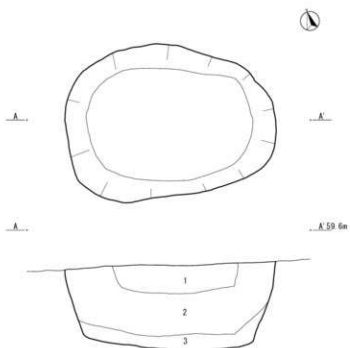
H・G-6・7区のVI層上面で検出された。上面は攪乱を受けている。溝状遺構1・2号に並行しているが、約20m離れているため関連は不明である。南側は溝状遺構4号に切られており、その南側は上部を削平されたためか、検出されていない。残存部分は長さ約6.5m、幅約50～80cm、深さは10cm程度である。埋土はしまりの弱い黒色土で、Ⅲ層など上部の土と推定される。遺物は出土していない。

SK8



1: 黒褐色土 (10R2/3) しまり弱い。粘性有り。

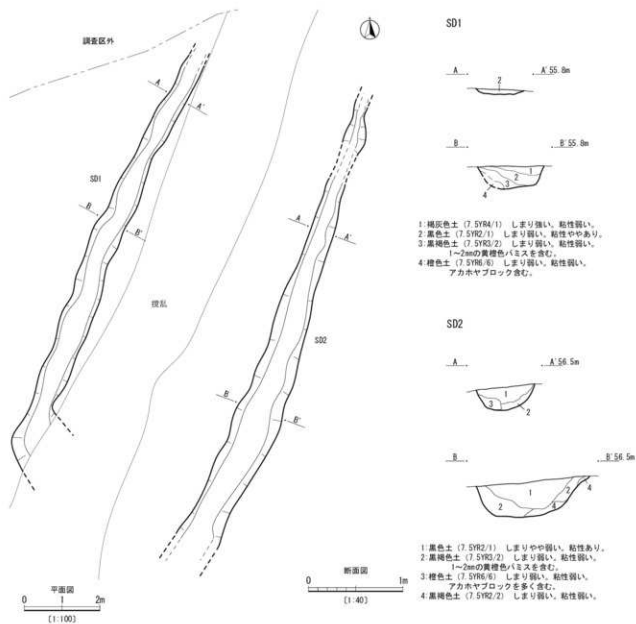
SK9



1: 棕褐色土 (7.5YR2/3) しまり弱い。粘性有り。1~2mの黄褐色パミスを多く含む。
 2: 褐色土 (7.5YR4/4) しまり弱い。粘性やや有り。黄褐色パミスを多く、アカホヤブロックを含む。
 3: 褐色土 (7.5YR4/6) しまり有り。粘性有り。



第78図 土坑8号・9号



第79図 溝状遺構1号・2号

溝状遺構4号(第80図)

H~F-7区のVI層上面で検出された。上面は攪乱を受けている。溝状遺構3号に垂直に、地形に沿って下るように延びている。最も標高が低い西側では、90度曲がり現在の道路に切られている。残存部分は東西に長さ約13m、南北に約4m、幅は約50~100cm、深さは10~20cm程度である。埋土は茶褐色土を含む黒褐色土でしまりがあり、どの層の土がは不明である。

埋土内で出土した遺物を4点図化した。520は土師器皿の口縁部である。521は龍泉窯系青磁の碗で、外面に蓮弁文の一部とみられる盛り上がり有する。522・523は白磁である。522は口壳皿の底部で、灰白色で見込みに圏線がみられる。523は森田D群に比定される皿で、体部下位が露胎である。

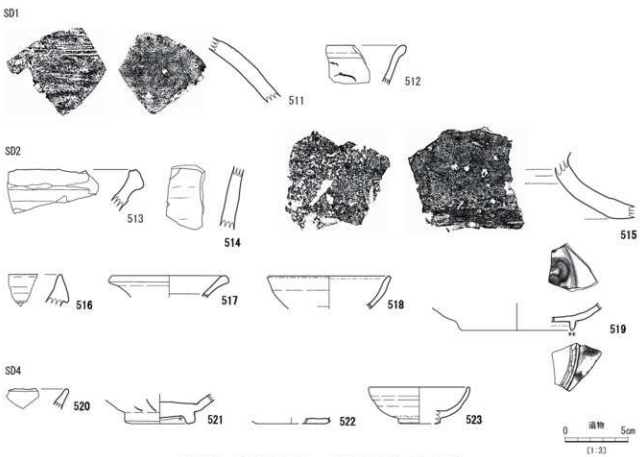
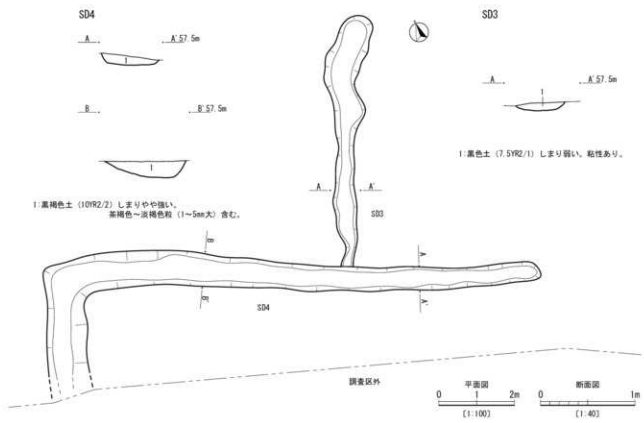
(4) 硬化面(第81図)

F-7・8区で検出された。幅は40~80cm程度であり、約9.5m程度残存している。上面はほぼ黒色土である。現在の道路に並行し、西側の川へ下るように延びている。中世の遺物が上面で出土しており、中世の遺構としたが、近世以降である可能性がある。

遺物は1点出土している。524は土師器皿であり、底部の切り離しは糸切りである。

3 遺構外遺物(第82図)

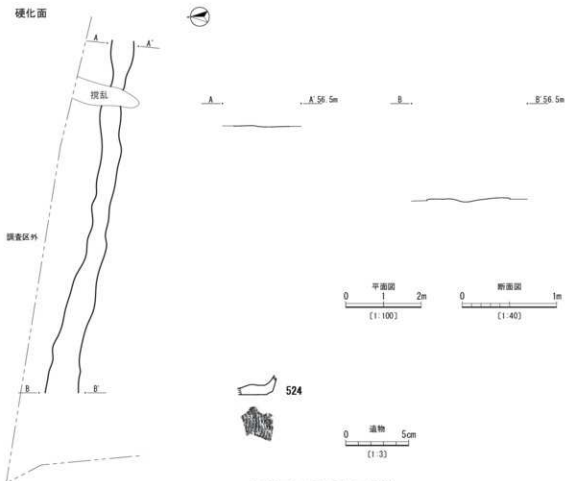
525は土師器皿の口縁部である。ほぼ直線状に立ち上がり、外面にススが附着している。526は土師質土器の鍋の口縁部で、外面下方にススが多く附着している。527・528は東播系須恵器の捏鉢である。527は口縁下端の突出が弱く、528は強い。529は中世須恵器甕の胴部



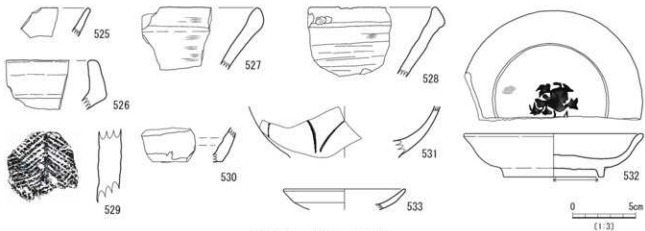
第 80 図 溝状遺構 3 号・4 号と溝状遺構の出土遺物

である。生焼けで土師質であり、外面が赤褐色で矢羽根状のタタキ痕が残る。530は黒軸の天目碗である。底部付近で、底面に軸はみられない。531・532は龍泉窯系青磁である。531は碗の胴部で、蓮弁文と考えられる縦方向の切彫りの文様がみられ、上田B類の可能性はある。

また、回転させ製作した際に残った沈線が文様状に残る。532は口縁が外反する皿で、見込みに圈文や花文の印を有し、見込みに1cm弱の砂目が1か所残る。533は白磁の皿か坏で、体部中位でやや屈曲する。残存部は全面旋軸されている。



第 81 図 硬化面と出土遺物



第 82 図 中世の出土遺物

第11表 中世遺構出土土師器・須恵器・陶器等観察表

館蔵番号	発掘番号	出土遺構	層位	取土番号	種別	産地	器種	部位	口縁底径器高(cm)	調整		色調		白土	赤土	黄白土	赤灰	黒石	他	備考		
										外面	内面	外面	内面									
417	大型土灰1	-	-	-	土師器	-	皿	口縁部	-	横ナゲ	横ナゲ	にぶい黄緑	褐色	○	○	○	○	○	○	○	普通	
418	大型土灰1	-	-	-	土師器	-	皿	口縁部	-	丁寧な横ナゲ	丁寧な横ナゲ	にぶい黄緑	褐色	○	○	○	○	○	○	○	良好	
419	大型土灰1	-	-	-	土師質土器	-	鉢	底部	(17.4)	丁寧なへら横ナゲ	横回転へら横ナゲ	にぶい赤褐色	褐色	○	○						外底：回転痕 内底：ヒガキ 横ナゲ	
420	大型土灰1	-	-	-	瓦質土器	-	羽釜	口縁部	-	口縁横ナゲ 縦ナゲ	縦ナゲ	褐色	褐色	○	○						良好	
421	大型土灰1	-	-	-	中世須恵器	東播系	椀	口縁部	-	横ナゲ	横ナゲ	暗青灰	灰黄	○	○						普通 口縁暗青灰	
422	大型土灰1	-	-	-	中世須恵器	-	壺	胴部	-	矢羽根状タタキ	横ナゲ	暗	灰白	○	○						普通	
423	大型土灰1	①	-	-	中世須恵器	-	壺	胴部	-	羽格子タタキ	-	にぶい黄	灰黄	○	○						良好 内面割線	
424	大型土灰1	④	-	-	陶器	備前	楕鉢	口縁部	-	へら横ナゲ	へら横ナゲ	灰赤、黄緑 黄ゾマ	褐色	○	○						良好 輪目不明	
425	大型土灰1	①・②・③	10	-	陶器	備前	楕鉢	口縁部	-	横ナゲ	横ナゲ	褐色、口縁白ゾマ	褐色	○	○						良好 8条以上のかき目	
426	大型土灰1	⑤	-	-	陶器	備前	楕鉢	口縁部	-	横ナゲ	横ナゲ	にぶい赤褐色 下半灰赤	褐色	○	○						良好 輪目不明	
427	大型土灰1	-	-	-	陶器	備前	楕鉢	底部	-	横ナゲ	-	赤灰	にぶい赤褐色	○	○						良好 使用による磨耗 跡の少き白 磁瀬織灰質	
428	大型土灰1	⑥	-	-	陶器	備前	楕鉢	底部	-	横ナゲ	横ナゲ	赤褐色	にぶい赤褐色	○	○						良好 使用による磨耗 跡の少き白 磁瀬織灰質	
429	大型土灰1	①	6	-	陶器	備前	楕鉢	底部	(13.8)	へら斜ナゲ	へら斜ナゲ	暗赤褐色	赤褐色	○	○						良好 蓋に黄緑粘土付着 10条のかき目	
430	大型土灰1	-	-	-	陶器	備前	蓋	底部	-	-	砂付青	暗赤褐色	暗赤褐色	○	○						良好 内外に自然灰緑 (緑ナリーフ) 面に黄緑付着	
431	大型土灰1	①	8	-	陶器	備前	蓋	底部	-	-	青灰	褐色	褐色	○	○						良好 外底：丁寧なナ ゲ。粘土付着 内底：へらナゲ	
432	大型土灰1	-	-	-	陶器	-	蓋	底部	-	横ナゲ	横ナゲ	褐色	褐色	○	○						良好	
469	大型土灰2	-	-	-	土師器	-	皿	底部	-	-	黄緑	黄緑	○	○							普通 底部赤切り跡し	
470	大型土灰2	⑤	-	-	土師器	-	皿	底部	(6.4)	-	-	褐色	にぶい黄緑	○	○						普通 底部赤切り跡し	
471	大型土灰2	⑥	-	-	土師器	-	皿	底部	(7.0)	-	-	にぶい黄緑	にぶい黄緑	○	○						普通 底部赤切り跡し	
472	大型土灰2	-	-	-	中世須恵器	東播系	椀	口縁部	15.5	横ナゲ	横ナゲ	灰、口縁は黄緑のある点	灰	灰白ゾマ	○	○						良好
473	大型土灰2	-	-	-	中世須恵器	東播系	椀	口縁部	-	横ナゲ	横ナゲ	灰	灰	○	○						良好	
474	大型土灰2	-	-	-	中世須恵器	東播系	椀	口縁部	-	へら横ナゲ	横ナゲ	灰、口縁は褐色	灰	○	○						良好	
475	大型土灰2	-	-	-	陶器	備前	楕鉢	底部	-	横ナゲ	横ナゲ	灰褐色	灰褐色	○	○						良好	
502	大型土灰1-3	-	-	-	陶器	備前	蓋	完形	(12.0) (13.8) 27.4	横ナゲ	横ナゲ	青灰、口縁は褐色	青灰	○	○						良好 肩部に輪状沈線 内面割線 底近くスス	
503	大型土灰1-3(1)	⑥	5	-	陶器	備前	蓋	底部	(19.0)	横ナゲ	横ナゲ	灰白底、赤褐色	灰	○	○						良好 内底ゾマ	
504	大型土灰1-2・3(1・2)	①・②・③	大土1-9	-	陶器	備前	蓋	口縁へ胴部	(17.0)	横ナゲ	横ナゲ	灰赤、赤	暗赤褐色	○	○						良好 肩部に割線、胴に輪状沈線 外と肩と上面にゾマ	
505	大型土灰1	①	-	-	陶器	タイ	四耳蓋	口縁部	(18.0) (15.0)	丁寧なナゲ	丁寧なナゲ	暗赤灰	暗赤灰	○	○						505～510は同一 製体とみられる。 肩部にぶい、角 突き、耳 柄物は一次的に焼 割下へ底面 磨耗は黄緑、灰 白、緑ナリーフ	
506	大型土灰2	-	-	胴部				暗赤灰				暗赤灰	○	○								
507	大型土灰2	③	-	胴部				暗赤灰				青灰	○	○								
508	大型土灰2	①	-	胴部				暗赤灰				青灰	○	○								
509	大型土灰1-2	①・②	-	胴部				暗赤灰				青灰	○	○								
510	大型土灰2	-	-	底部	横へら横ナゲ	横へら横ナゲ	暗赤灰	青灰	○	○												
511	S01	-	-	-	陶器	備前	蓋	肩部	-	横ナゲ	横ナゲ	褐色、黄白色ゾマ	褐色	○	○						良好 外面に3条沈線	
513	S02	①	-	-	中世須恵器	東播系	椀	口縁部	-	横ナゲ	横ナゲ	緑灰	緑灰	○	○						普通 口縁にやや割い	
514	S02	-	-	-	中世須恵器	古瀬戸	壺	胴下部	-	ナゲ	ナゲ	オリーブ	オリーブ	○	○						良好 粘土灰白	
515	S02	①	-	-	陶器	常滑	壺	胴部	-	横ナゲ	横ナゲ	灰白	灰	○	○						良好	
516	S02	-	-	-	陶器	備前	楕鉢	口縁部	-	横ナゲ	横ナゲ	赤灰	赤灰	○	○						良好	
517	S02	①	-	-	陶器	-	皿	口縁部	(9.0)	-	-	黒褐色	黒褐色	○	○						普通 内面一箇所きぶ くれ、粘土灰色	
520	S04	-	-	-	土師器	-	皿	口縁部	-	横ナゲ	横ナゲ	黄緑	黄緑	○	○						普通 精製土	
524	硬化面	①	-	-	土師器	-	皿	底部	-	-	-	褐色	褐色	○	○						普通 底部赤切り跡し	

第12表 中世遺構出土青磁・白磁等観察表

排瓦番号	複製番号	出土遺構	層位	取上 番号	種別	産地	器種	部位	白磁 器種 寸法 (cm)	文様	釉種範囲	釉の色調	胎土の色調	焼成	備考	
	433	大型土坑1	-	-	青磁	龍泉	碗	体部	-	遼弁	-	明緑灰	灰白	良好	上田B	
	434	大型土坑1	㊸	-	青磁	龍泉	碗	体部	-	磁連弁	-	オリーブ灰	灰	良好	上田B	
	435	大型土坑1	㊸	-	青磁	龍泉	碗	高～高 行部	(5.6) (底)	遼弁	-	灰オリーブ	灰	良好	上田B	
	436	大型土坑1	①	1	青磁	龍泉	碗	底部	(6.3) (底)	-	-	高台内無釉	オリーブ灰	灰白	良好	
	437	大型土坑1	㊸	18	青磁	龍泉	碗	底部	(7.4) (底)	-	-	高台内無釉	オリーブ灰	灰白	良好	
	438	大型土坑1	①	3	青磁	龍泉	碗	底部	6.2 (底)	見込みに龍縁と草花 印文	-	高台内無釉	明緑灰	黄味がかった 灰白	良好	貫入
	439	大型土坑1	①	2	青磁	龍泉	碗	底部	6.2 (底)	見込みに龍縁と草花 印文	-	高台内無釉	オリーブ灰	灰白	良好	貫入
	440	大型土坑1	㊸	-	青磁	龍泉	碗	底部	(5.6) (底)	見込みに草花印文	-	高台内無釉	灰白	良好		
	441	大型土坑1	㊸	12-13	青磁	-	皿	兜形	12.6 5.8 3.9	-	-	見込み輪状積 層付・胴下部 ～高台無釉	灰白	灰白	良好	
	442	大型土坑1	㊸	-	青磁	龍泉	皿	口縁部	-	内外草花文	-	オリーブ灰	灰白	良好	上田B	
	443	大型土坑1	㊸	17	青磁	龍泉	皿	口縁部	(12.0) (口)	外草花文 内草花文	-	明オリーブ灰	灰白	良好	上田B	
	444	大型土坑1	-	-	青磁	龍泉	皿	口縁部	(13.0) (口)	外草花文 内草花文	-	灰オリーブ	灰白	良好	上田B	
	445	大型土坑1	㊸	-	青磁	龍泉	戊型碗	口縁部	-	磁連弁	-	明オリーブ灰	灰白	良好		
	446	大型土坑1	-	-	白磁	-	鼠小碗	口縁部	-	-	-	青味がかった灰白	灰白	良好		
	447	大型土坑1	①	-	白磁	強化小	-	-	-	-	内面無釉	灰白	灰白	良好	水滲などの 文具小器物か	
	476	大型土坑2	㊸	3	青磁	龍泉	碗	口縁部	(14.0) (口)	雷文	-	オリーブ灰	灰白	良好	上田C	
	477	大型土坑2	-	-	青磁	龍泉	碗	口縁部	-	雷文	-	明オリーブ灰	灰白	良好	上田C	
	478	大型土坑2	-	-	青磁	龍泉	碗	口縁～ 体部	(17.0) (口)	雷文	-	オリーブ灰	灰白	良好	上田C	
	479	大型土坑2	-	-	青磁	龍泉	碗	体部	-	口縁雷文 胴部連弁	-	オリーブ灰	灰白	良好		
	480	大型土坑2	-	-	青磁	龍泉	碗	底部	(6.2) (底)	胴部下遼弁	-	オリーブ灰	灰白	良好		
	481	大型土坑2	-	-	青磁	龍泉	碗	口縁部	(13.2) (口)	雷文	-	明緑灰	灰白	良好		
	482	大型土坑2	①	-	青磁	龍泉	碗	口縁～ 体部	(14.0) (口)	-	-	オリーブ灰	灰白	良好	上田D	
	483	大型土坑2	㊸	6	青磁	龍泉	皿	口縁部	12.8 (口)	外草花文 内草花文	-	明緑灰	灰白	良好		
	484	大型土坑1-①	㊸・ ㊸	大土 1-4・大 土2-7	青磁	龍泉	皿	口縁～ 底部	(13.2) 6.4 3.5	見込みに龍縁と草花 印文 内外草花文	-	高台内に輪状 の砂目肌	オリーブ灰	灰白(濃濁)	良好	
	485	大型土坑2	-	-	青磁	龍泉	皿	口縁～ 底部	13.4 6.2 3.7	見込みに龍縁と草花 印文・外草花文 内草花文	-	高台内に砂目 肌・緑測ぎ	灰オリーブ	灰白	良好	
	486	大型土坑2	-	-	青磁	龍泉	皿	口縁部	(13.0) (口)	外草花文 内草花文	-	明オリーブ灰	灰白	良好		
	487	大型土坑2	①	-	青磁	龍泉	皿	口縁部	(12.6) (口)	内外草花文	-	オリーブ灰	灰白	良好		
	488	大型土坑2	-	-	青磁	龍泉	皿	口縁部	(12.0) (口)	内外草花文	-	明緑灰	灰白	良好		
	489	大型土坑2	㊸	2	青磁	龍泉	皿	口縁部	(12.2) (口)	外草花文か	-	オリーブ灰	灰白	良好		
	490	大型土坑2	-	-	青磁	龍泉	皿	口縁部	(13.0) (口)	草花文か	-	明オリーブ灰	灰白	良好	気泡多い	
	491	大型土坑2	-	-	青磁	龍泉	皿	口縁～ 体部	(12.6) (6.4) 3.4	-	-	見込み輪状積 層付 高台内無釉	オリーブ灰	灰白	良好	
	492	大型土坑2	㊸	9	青磁	龍泉	杯	口縁部	(12.6) (口)	遼弁	-	明緑灰	灰白	良好		
	493	大型土坑2	-	-	白磁	-	皿	口縁～ 体部	(8.6) (口)	-	-	外周胴下無釉	黄味がかった灰白	灰黄	普通	森田王
	494	大型土坑2	-	-	白磁	-	皿	口縁部	(10.2) (口)	-	-	胴下無釉	緑がかった灰白	灰白	良好	森田王 貫入
	495	大型土坑2	-	-	白磁	-	多角杯	口縁～ 体部	-	-	-	胴下部無釉	灰白	灰白	良好	
	498	大型土坑2	-	-	青磁	龍泉	皿	口縁～ 底部	12.8 6.8 3.7	-	-	見込み輪状積 層付 高台内無釉	明緑灰	灰白	良好	
	499	大型土坑1-2	㊸	-	青磁	龍泉	碗	口縁部	(14.0) (口)	口縁雷文 胴部連弁	-	オリーブ灰	灰白	良好	上田C	
	500	大型土坑1-2	①	大土 1-10	青磁	龍泉	碗	底部	5.8 (底)	見込みに龍縁と草花 スタンプ文	-	高台内無釉・ 砂目	オリーブ灰	灰白	良好	
	501	大型土坑 1-30)	㊸	大土1 -19-20	青磁	龍泉	小型碗	体部	-	-	-	内面部分的に 無釉	緑灰	灰白	良好	
	512	S01	-	-	青磁	龍泉	碗②+杯	口縁部	-	草花文か	-	オリーブ灰	灰	良好	貫入	
	518	S02	①	-	白磁	-	碗	口縁部	(11.0) (口)	-	-	口周子・胴下 無釉	緑がかった灰白	灰白	良好	大等時白磁 磁器用
	519	S02	①	-	青花	中国	皿	底部	(9.2) (底)	見込みに獅子 外周草文	帯付・高台内 無釉	透明釉	灰白	良好	小野分類目 群	

検出番号	掲載番号	出土遺構	層位	取上番号	種別	産地	器種	部位	口径 底径 器高 (cm)	文様	輪軸縮図	軸の色調	胎土の色調	焼成	備考	
80	521	5B4	-	-	青磁	龍泉	碗	底部	5.6 (底)	蓮弁	-	高台内無軸	明緑灰	灰白	良好	
	522	5B4	-	-	白磁	-	皿	底部	5.8 (底)	見込みに墨線	-	異味がかった灰白	灰白	良好		
	523	5B4	-	-	白磁	-	皿	口縁～ 底部	(8.0) (5.3) 2.9	-	-	縁がかった灰白	灰白	良好		

第13表 中世遺構出土石製品観察表

検出番号	掲載番号	出土遺構	層位	取上番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
71	448	大型土坑1	㊸	11	砥石	6.90	7.20	(4.8)	(244.0)	砂岩	
	449	大型土坑1	-	-	軽石製品	6.9	6.4	-	46.2	軽石	
	450	大型土坑1	-	㊸	空風輪	18.4	15.0	(13.3)	(9.90)	軽石	
72	451	大型土坑1	-	㊸	空風輪	30.2	18.9	(17.3)	(7.90)	凝灰岩	
	452	大型土坑1	-	㊸・㊹	水輪	19.2	(34.2)	35.6	(18.90)	凝灰岩	
	453	大型土坑1	-	㊸	水輪	26.8	36.2	26.8	6.250	軽石	
	454	大型土坑1	㊸	㊹	水輪	34.7	33.8	29.7	38000	凝灰岩	
	455	大型土坑1	-	㊸	水輪	29.4	35.5	35.2	(17950)	凝灰岩	
	456	大型土坑1	-	㊸	地輪	34.0	(34.1)	(24.4)	(22800)	凝灰岩	
	457	大型土坑1	-	-	地輪	12.6	(26.7)	(22.5)	(5800)	凝灰岩	
	458	大型土坑1	-	㊸	地輪	10.4	30.8	31.4	5300	軽石	
73	459	大型土坑1	-	㊸	地輪	22.0	42.6	44.0	52450	凝灰岩	
	460	大型土坑1	-	㊸	地輪	18.8	(31.4)	(22.9)	(17150)	凝灰岩	
	461	大型土坑1	-	-	砥石	(14.8)	(17.7)	(14.8)	(2150)	軽石	裏研削
	462	大型土坑1	-	㊸	砥石	36.3	(26.7)	(15.8)	(4050)	軽石	
	463	大型土坑1	-	㊸	砥石	(13.4)	18.6	18.8	(2960)	軽石	
	464	大型土坑1	-	㊸	砥石	(34.5)	23.6	13.2	(7750)	凝灰岩	
	465	大型土坑1	-	-	砥石	(28.5)	17.8	(14.1)	(7390)	凝灰岩	
	466	大型土坑1	-	-	木削	16.5	9.5	8.5	1300	凝灰岩	
	467	大型土坑1	-	㊸	木削	(13.0)	(9.7)	(8.7)	(650)	軽石	
	468	大型土坑1	㊸	大土1-15	石臼	径 33.5×34.3		14.0	20000	安山岩	

第14表 中世遺構出土金属製品観察表

検出番号	掲載番号	出土遺構	層位	取上番号	器種	部位	大きさ	重量 (g)	備考
74	496	大型土坑2	㊸	4	角釘	頭～胴部	残存長 3.9 cm	11.9	頭は長方形
	497	大型土坑2	㊸	1	角釘	胴～先端部	残存長 7.3 cm	9.8	

第15表 中世土師器・須恵器・陶器観察表

検出番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	種別	産地	器種	部位	口径 底径 器高 (cm)	調整		色調		白石	黄石	紫石	黒石	長石	灰石	焼成	備考				
										外面	内面	外面	内面												
										○	○	○	○												
82	525	-	I	-	土師器	-	皿	口縁部	-	環状ハコク横ナツ	横ナツ	浅黄緑	浅黄緑	○	○					○	普通	スス 摩耗			
	526	-	I	-	土師質土器	-	鉢	口縁部	-	ハコ横ナツ	横ナツ	に深い楕	に深い楕	○	○	○						○	普通	外面磨蝕・スス	
	527	FR	I	-	中世須恵器	東播磨	骨鉢	口縁部	-	横ナツ	横ナツ	褐色	褐色	○			○					○	良好	口縁が味がる	
	528	-	I	-	中世須恵器	東播磨	骨鉢	口縁部	-	横ナツ	横ナツ	褐色	褐色	○			○						○	良好	口唇部は使用による摩耗 口縁は部分的に光沢
	529	FR	I	-	中世須恵器	-	葉	胴部	-	先折羽状ク タテ	ナツ	橙	浅黄	○	○	○							○	良好	内面は著しく磨蝕
530	-	I	-	陶器	大日	碗	底部	-	-	-	緑赤灰	赤黒	○										○	良好	

第16表 中世青磁・白磁観察表

検出番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	種別	産地	器種	部位	口径 底径 器高 (cm)	文様	輪軸縮図	軸の色調	胎土の色調	焼成	備考	
82	531	-	I	-	青磁	龍泉	碗	胴部	-	蓮弁	-	灰オリーブ	灰白	良好		
	532	FR	Ⅲ	63	青磁	龍泉	皿	口縁～底部	14.2 8.0 3.4	見込みに墨線、草花印文	-	高台内無軸	オリーブ灰	灰白	良好	見込みに砂目痕
	533	FR	I	-	白磁	-	皿	口縁部	(9.8) -	-	-	異味がかった灰白	灰黄	普通		

第6節 近世の調査

1 調査の概要

近世の遺構は1-6・7区で隣り合った石塔・石碑が1基ずつ、その周辺に土坑が4基、その南側に溝状遺構が1条検出されており、石塔周辺に集中している。遺物も石塔周辺の表土で多数出土しており、供献物など、この石塔に関係のある遺物と考えられる。他にはF~H-12~14区で溝状遺構が1条検出されている。

2 遺構

(1) 溝状遺構

溝状遺構5号(第84図)

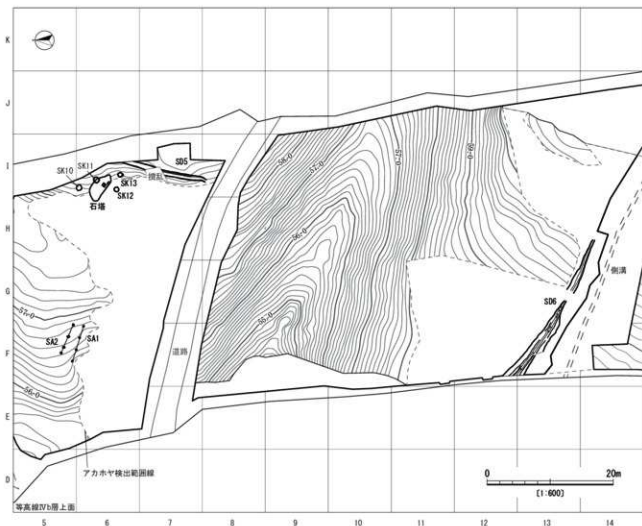
I-6~8区のIV b層上面で検出された。上位は削平を受けている。北は調査区域外、南は道路付近まで直線状に延びている。検出できた部分は長さ約13m、幅約80cm、深さは30cm程度である。埋土は黒色土に少量のアカホヤ火山灰が混じっており、遺構掘削土の一部と考

えられる。床面はほぼ平坦である。

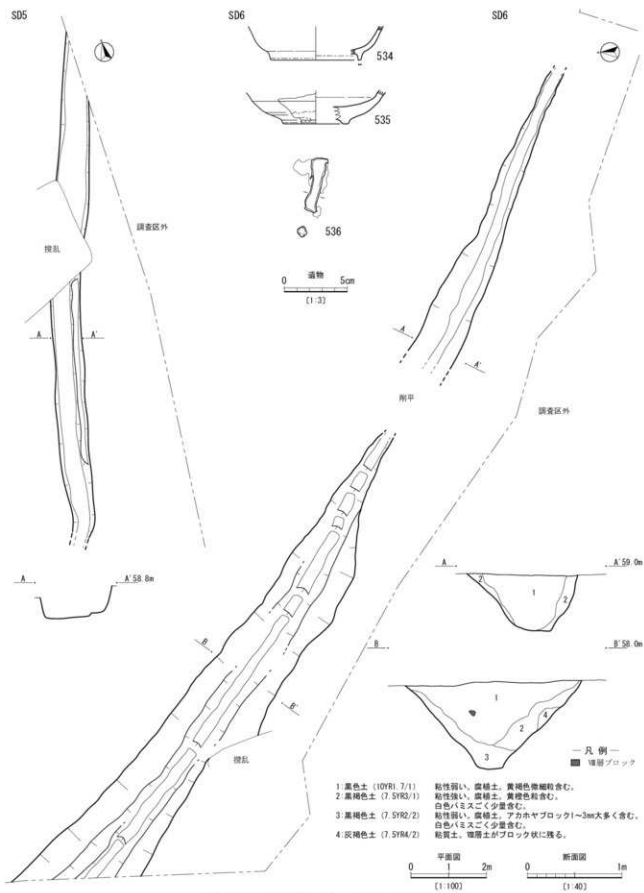
溝状遺構6号(第84図)

F~H-12~14区のV b~X層上面で検出された。上位は東側を中心に大きく削平を受けている。東南東から西北西方向に直線状に延びている。検出面の長さは約25mで、残存度の良い西側は幅約2m、深さは1.0~1.5mで、東側もこの程度の大きさであった可能性がある。断面形状は逆三角形で床面は狭く、埋土はほぼ黒色土であり、下部にアカホヤ火山灰などが混じりあっている。現在の側溝や道路跡と並行であり、床面が階段状になる部分があること、硬化した部分がみられることから、道路跡であった可能性が高い。

534は白磁の皿で、森田E群に比定されるものである。535は唐津焼の甕で、内面や外面の体部下半を除き、灰褐色の釉がかかる。536は鉄釘である。角釘とみられ、頭部付近のみ残存する。

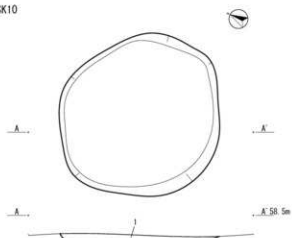


第83図 近世と時期不明の遺構配置図



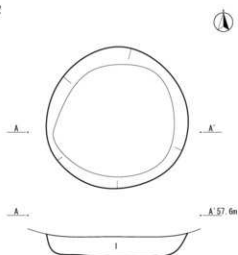
第 84 図 溝状遺構 5号・6号と出土遺物

SK10



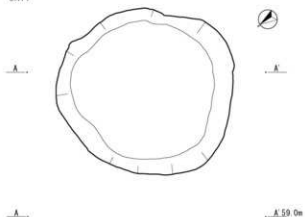
1: 黒褐色土 (7.5YR2/2) しまり弱い, 粘性弱い。

SK12



1: 黒褐色土 (7.5YR2/2) しまり弱い, 粘性弱い。

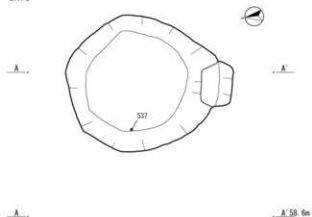
SK11



1: 黒色土 (10YR1.7/1) しまり強い, 粘性あり。
 2: 黒褐色土 (7.5YR2/2) しまり弱い, 粘性弱い, 白色粒子含む。
 3: 暗褐色土 (7.5YR3/3) しまり弱い, 粘性弱い。
 4: 褐色土 (7.5YR4/3) しまり弱い, 粘性弱い。



SK13



1: 黒褐色土 (7.5YR2/2) しまり弱い, 粘性弱い。
 2: 灰褐色土 (7.5YR4/2) しまりややあり, 粘性弱い, 埋土1よりやや硬い。
 3: 灰褐色土 (7.5YR5/2) しまりややあり, 粘性弱い, ブロック状に入る。

一凡例一
 □ 余灰



⑤ 537

第85図 土坑10号~13号と出土遺物

(2) 土坑

土坑 10 号 (第 85 図)

I-6 区の IV b 層上面で検出された。平面は円形で直径 80 cm 程度である。残存度は極めて悪く、床面より 5 cm 程度しか残らない。埋土は黒褐色土で、II・III 層土などと考えられる。遺物はみられず、用途も不明である。

土坑 11 号 (第 85 図)

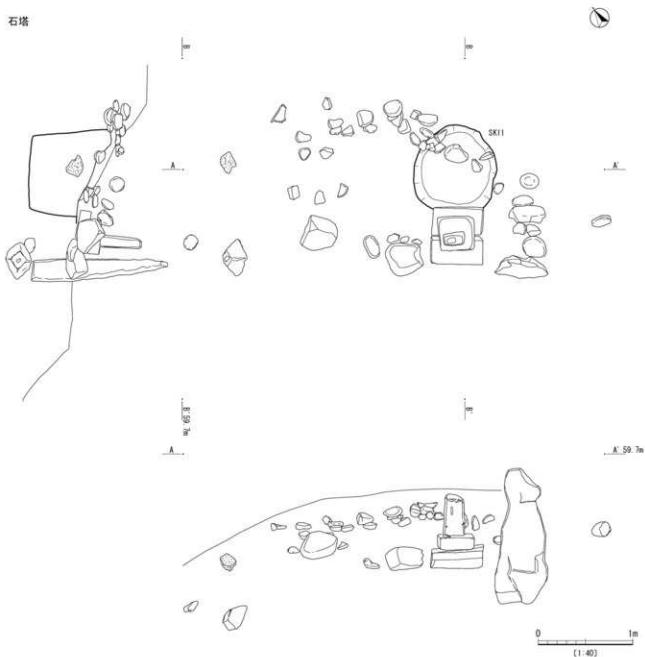
I-6 区の IV b 層上面において、石塔を取り外した後に出された。平面は円形に近く、直径は 90 cm 程度で、深さは残存度の良い北側で 80 cm ほどである。VI 層付近まで掘削されており、埋土 4 は IV~VI 層土が含まれていることから遺構掘削土の一部、埋土 1 はほぼ黒色土である。

り、II・III 層土など上部の土と考えられる。この土坑は石塔のほぼ真下にあり、土坑の南側は低くなっているが、最初から低かったか、石塔建立時に削平されたかは不明であるが、削平されていた場合は石塔と建立時期が異なると推測される。遺物が出土しておらず、土坑墓であったかなど、用途は不明である。

土坑 12 号 (第 85 図)

I-6 区の VII 層上面において検出された。付近は削平が激しく、上部のほとんどを失っており、床面から 10 cm 程度しか残存していない。平面はきれいな円形で、直径 70 cm 程度である。埋土はしまりの弱い黒褐色土である。用途は不明である。

石塔



第 86 図 石塔と土坑 11 号

土坑 13号 (第85図)

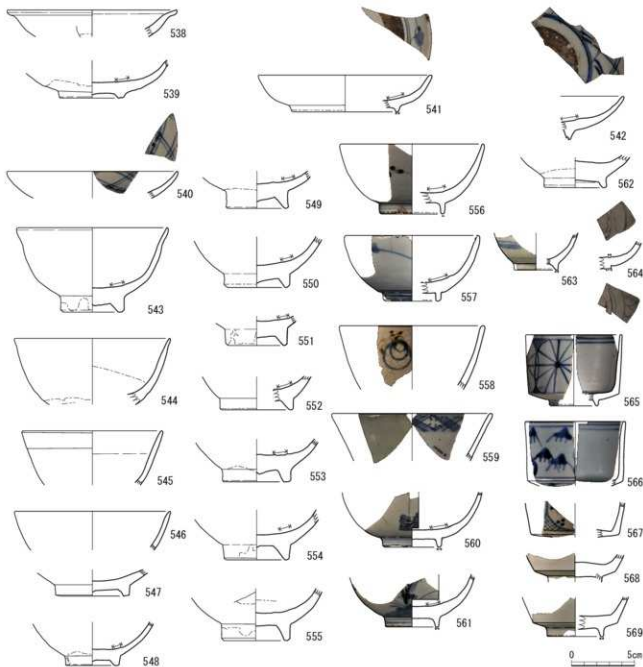
1-6区のIV b層上面において検出された。上位は削平を受けている。平面は円形に近く、直径は80×70 cm程度で、南側に幅20 cm程度の段が付く。深さは50 cm程度で、段部分は約40 cmである。埋土中にアカホヤ火山灰は少なく、遺構掘削土の多くは埋め戻しに使われなかったと推測される。埋土2中から鉄釘が出土していることから、土坑墓であった可能性がある。

537は鉄製の角釘で、残存する長さは約5 cm、厚さ5 mm程度で、ほぼ真ん中で90度の角度で曲げられている。

(3) 石塔・石碑 (第86図)

1-6区の地表面において、草に埋もれた状態で検出された。3段に積み重ねられた石塔と板状の石碑が南西側を向いた状態で並んでいる。石塔・石碑の石材は凝灰岩で、どちらも文字や文様は刻まれていない。

石塔は棹石・中台・芝台の三段の加工石で構成される。1段目の芝台は、約50×30×10 cmの長方形の石を2点南北に並べて造られており、上面は丁寧に研磨されている。南側の石がやや南に傾いているが、地震等による影響と考えられる。なお、検出時はこの台の上面近くまで埋められていた。2段目の中台は、約40×40×10



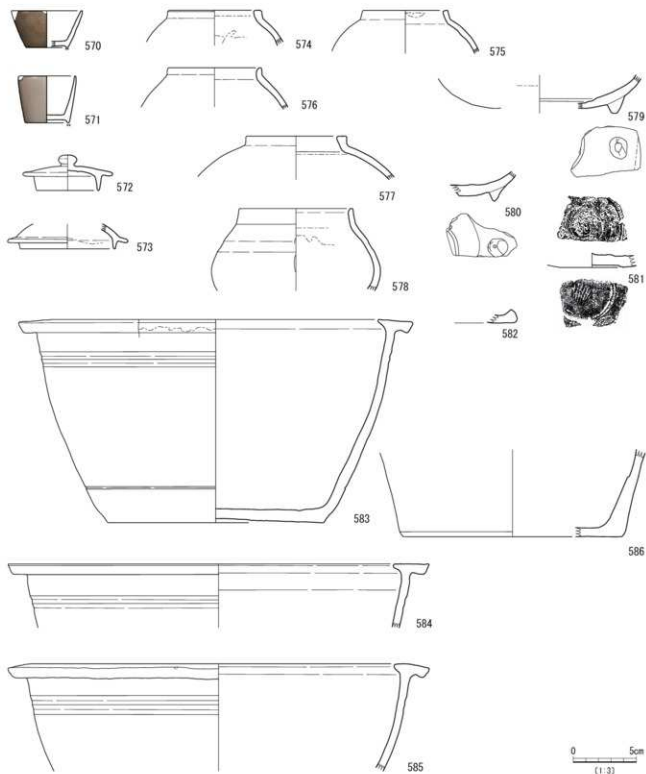
第87図 石塔周辺の出土遺物 (1)

cmで、断面は台形に近く、側面はやや雑な仕上がりである。上面中央部には正方形のホゾ穴がある。椀石は約45×20×10cmで、角は緩やかに加工されている。

石碑は、下から35cm部分まで土に埋まった状態で検出された。板状大型石の正面部分を平坦に加工している

が、何も刻まれておらず、石塔や周辺土坑との関連は不明である。周囲には多くの人頭大の礫がみられ、五輪塔の一部や陶磁器等も含まれており、これら石塔・石碑や土坑に関連するものである可能性がある。

これらの石塔について、周辺の民家で聞き込みを行っ



第88図 石塔周辺の出土遺物(2)

たが、由来等は不明であった。地域の重要な供養碑であった可能性が高いため、道路建設予定地端に移設した。石塔や石碑の形態から、近世頃に建立されたと考えられる。

3 遺物 (第 87 図～第 91 図)

ほぼ石塔周辺で出土しており、器種別に分け 71 点を図化した。

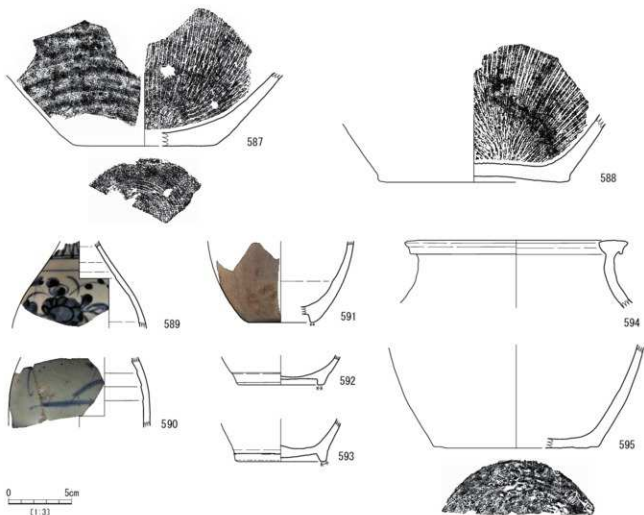
皿・碗 (第 87 図 538～569)

538～542 は皿である。538・539 は薩摩焼龍門司系の陶器で、白化粧土に透明釉がかかる。538 は口縁部で、端部がやや外反する。539 は、白化粧土が底部下位にかからず、見込みは蛇の目軸剥ぎされ、重ね焼きの際の高台痕が残る。540～542 は肥前系の磁器で、540 は口縁部で内面に四方禰文がみられる。541・542 は見込み部分を蛇の目軸剥ぎし、体部内面に 541 は山水文、542 は四方禰文が描かれる。

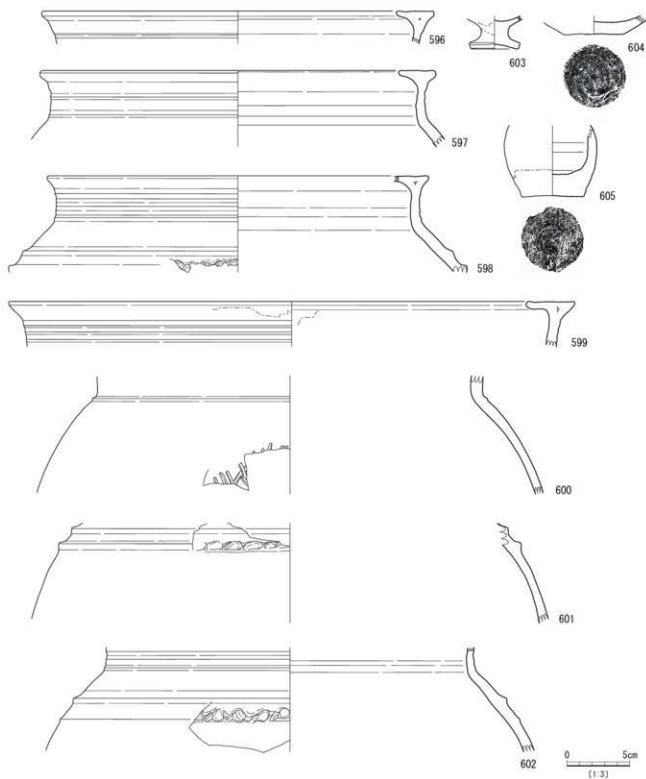
543～569 は碗である。543～555 は龍門司系の陶器である。543 は見込み部分に蛇の目軸剥ぎがなされ、畳付から高台内は露胎である。544～546 は口縁部～体部

で、544 は内面上位と外面の口縁近くから下位まで白化粧土を塗り、施釉している。545 は暗赤灰色で他と比べ黒色が強く、回転ナデの跡が明瞭である。546 は口唇部内面が削られ、先端に向け細くなる。547～555 は体部～底部で、すべて高台付近は無釉で、見込み部分は蛇の目軸剥ぎがなされる。547 は高台削り出し部が高く残っており、段となっている。弱く、間に隙間がみられる。549・550・554 は褐釉のみ体部下位までかかる。

556～569 は肥前系磁器の碗である。556～564 は丸碗で、底部が残存するものはすべて見込みが蛇の目軸剥ぎである。556・557 は外面に草花文が、558 は宝珠が描かれる。559 は口縁まで直線状となり、口縁内面に四方禰文が描かれる。560 は体部外面の下位に圏線、中に花の印文が 2 か所確認できる。561 は外面に草花文、高台内に圏線と「大明年製」の文字が描かれる。565～569 は筒型碗である。565 は外面に圏線 2 条と菊花文を、圏線と菊花文の隙間に斜格子文を描いている。566 は 2 条の圏線の間に雪持笹文が、567 は残存部位が小さく文



第 89 図 石塔周辺の出土遺物 (3)



第90図 石塔周辺の出土遺物(4)

様は明確でないが、円の中に3つの黒点を数か所に描き、円と圏線の隙間に565と同様の斜格子文を描いている。568・569は底部で、腰部から胴部に向けやや開き、文様はみられない。

小坏(第88図570・571)

570・571は肥前系磁器の小坏である。570は口が開き、やや黄色を帯びた白色を呈す。571は口縁まで垂直気味に立ち上がり、ほぼ白色である。猪口の用途が考えられる。

土瓶 (第88図572～581)

572～581は薩摩焼苗代川産の土瓶である。572・573は土瓶の蓋で、572は上面に鉄軸、573は透明軸がかかる。574～578は口縁から胴部で、すべて外面に鉄軸がかかる。574・575・577は口唇部から口縁内面まで、576・578は口唇部の軸を掻き取っている。579～581は底部で、内面には鉄軸がかかり、外面は無軸である。579・580は三角錐状で底面が平坦な脚が1か所のみ残存する。579は煤が底面のほぼ全面に付着する。581は底面に弧状に段が付き、中央に貝目痕が残る。

蓋 (第88図582)

582は蓋である。口縁部分のみ残存し、上面に鉄軸がかかる。

鉢 (第88図583～586)

583～586は鉢で、586以外は薩摩焼苗代川産である。583は高さが16.0cmで、口唇部に貝目の跡が残る。584・585は口唇部は雑な軸刺ぎがなされ、口縁部下の外面に2重の沈線が巡る。586は底部で、産地は不明である。底面にも軸がかかり、内面の調整は良い。

擂鉢 (第89図587・588)

587・588は擂鉢である。587は無軸で赤褐色を呈し、糸切り底で、肥前系陶器の可能性がある。588は苗代川産で、底部内面に軸が付着している。

瓶 (第89図589～595)

589～593は磁器の瓶で、589・590は肥前系で、外面に草花文が描かれる。591～593は底部で、591は外面が灰白色、内面が茶色で回転ナデ跡が明瞭である。592は外面に透明軸がかかり、丁寧なつくりである。593は薄く青みがかった白色を呈し、底部付近の外面に1条の薄青色の圓線が巡る。594・595は苗代川産の壺である。594は口縁部で、口唇部は平坦であり、口縁部は内外に

突出し、外面は凹線風にくぼんでいる。595は底部で、内外面に鉄軸がかかり、底面に貝目痕が残る。

壺 (第90図596～602)

596～602は苗代川産の壺である。596～599は口縁部で、口縁端部を外側に折り曲げて、断面三角形に作るもので、折り曲げた際に小さい隙間ができていたものが多く、いずれも頸部付近に1～2条の凹線が巡る。599は内面へ向け口縁の突出が強く、口唇部に軸がほぼ全面に残っている。600は胴部に幅2～3mm程度の工具で縦や斜方向に軸を掻き落とし、何らかの文様を描いているが、一部のみしか残存しないため詳細は不明である。598・601・602は肩部に1条の突帯と、その下に縄状突帯が巡る。

仏具等 (第90図603～605)

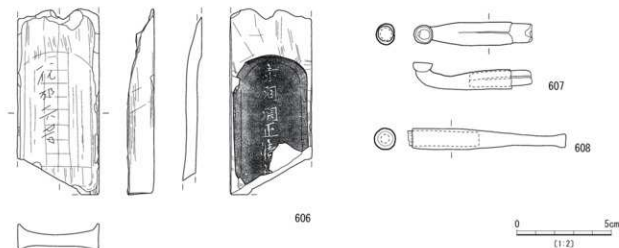
603～605は龍門司系の陶器である。603は高杯の形をした小型の陶器で、仏飯器としての使用が考えられる。604は灯明皿で、見込み目にゴマ目が残る、外面は無軸である。605は底部糸切りの仏花瓶で、外面に黒軸がかかる。

石硯 (第91図606)

606は石硯で、底面に「赤間関正清作」の文字が明瞭に刻まれており、山口県下関市の赤間産と考えられる。また、陸部には使用時に刻んだ梯子状及び4文字の判読不明の文字が残る。

煙管 (第91図607・608)

607・608は煙管(キセル)で、607の首(頸部)、608の吸口(尾部)と共に、木製の羅字片がそれぞれに残り、中央部は欠損している。青銅製で、首部と火皿の間に補強帯は無く、首部の弯曲が弱く直線的であることから、比較的新しい18世紀後半頃に製作されたものとみられる。



第91図 石塔周辺の出土遺物(5)

第17表 近世石塔周辺出土陶磁器観察表

標記番号	掲載番号	出土遺構	層位	取上番号	種別	産地	器種	部位	口径・底径・高さ(cm)	文様	施釉範囲	釉の色調	胎土の色調	焼成	備考	
84	534	SD6	①	2	白磁	中国	皿	底面	(7.0) (5.2)		裏付無釉	灰白	灰白	良好	森田王群	
	535	SD6	①	6	陶器	肥前系か	埴	底面	(3.2) (0.5)		胴下～高台無釉	灰白・ア～灰白	灰青	良好	津津	
87	538	石塔周辺	-	-	陶器	龍門司	皿	口縁部	(13.4) (7)		内外面	白化靨土・透明	にがい・褐	良好		
	539	石塔周辺	-	-	陶器	龍門司	皿	体部	5.2 (0.1)		見込み靨ノ自釉割否 高台内無釉	白化靨土・透明	にがい・褐	良好	18c 後半	
	540	-	1	-	磁器	肥前系	皿	口縁部	(13.6) (7)	四方雜文	内外面	透明	灰白	良好		
	541	石塔周辺	-	-	磁器	肥前系	皿	口縁～ 底面	(13.8) 2.9	山水文	見込み靨ノ自釉割否 裏付無釉	透明	灰白	良好		
	542	石塔周辺	-	-	磁器	肥前系	皿	口縁～ 底面	-	四方雜文	見込み靨ノ自釉割否	透明	灰白	良好		
	543	石塔周辺	-	-	陶器	龍門司	埴	口縁～ 底面	(12.0) 2.0 6.7		見込み靨ノ自釉割否 高台内無釉	梅杓赤釉	黄	良好	18c 後半	
	544	石塔周辺	-	-	陶器	龍門司	埴	口縁～ 体部	(12.4) (7)		見込み靨割否	白化靨土・梅杓	にがい・赤褐	良好	18c 後半	
	545	-	1	-	陶器	龍門司	埴	口縁～ 体部	(11.2) (7)		内外面	梅杓灰	灰白	良好		
	546	-	1	-	陶器	龍門司	埴	口縁～ 体部	(12.4) (7)		内外面	梅	にがい・赤褐	良好		
	547	石塔周辺	-	-	陶器	龍門司	埴	口縁～ 底面	5.8 (0.2)		椎倉部無釉	-	にがい・赤褐	良好	18c 後半	
	548	石塔周辺	-	-	陶器	龍門司	埴	口縁～ 底面	4.3 (0.2)		見込み靨ノ自釉割否 高台内無釉	梅杓赤	にがい・黄	良好	18c 後半	
	549	石塔周辺	-	-	陶器	龍門司	埴	口縁～ 底面	(5.0) (0.2)		見込み靨ノ自釉割否 高台無釉	黒褐	にがい・褐	良好	18c 後半	
	550	石塔周辺	-	-	陶器	龍門司	埴	口縁～ 底面	4.6 (0.2)		見込み靨ノ自釉割否 高台内無釉	黒褐	にがい・褐	良好		
	551	石塔周辺	-	-	陶器	龍門司	埴	口縁～ 底面	4.8 (0.2)		見込み靨ノ自釉割否 高台内無釉	梅杓	にがい・赤褐	良好		
	552	E5	覆瓦	-	-	陶器	龍門司	埴	口縁～ 底面	(5.7) (0.2)		見込み靨ノ自釉割否 裏付無釉	梅子アープ褐	黄灰	良好	
	553	石塔周辺	-	-	陶器	龍門司	埴	口縁～ 底面	5.4 (0.2)		見込み靨ノ自釉割否 高台内無釉	梅	灰青	良好		
	554	石塔周辺	-	-	陶器	龍門司	埴	口縁～ 底面	5.2 (0.2)		見込み靨ノ自釉割否 高台内無釉	梅杓灰	にがい・褐	良好		
	555	石塔周辺	-	-	陶器	龍門司	埴	口縁～ 底面	5.4 (0.2)		見込み靨ノ自釉割否 高台内無釉	白化靨土・梅杓 梅杓赤～梅	にがい・褐	良好		
	556	E4・E5	覆瓦	-	-	磁器	肥前系	丸皿	口縁～ 底面	4.8 5.5	草花文	見込み靨ノ自釉割否 裏付無釉	透明	灰白	良好	
	557	石塔周辺	-	-	磁器	肥前系	丸皿	口縁～ 底面	(4.6) 5.2	草花文	見込み靨ノ自釉割否 裏付無釉	透明	灰白	良好		
	558	石塔周辺	-	-	磁器	肥前系	丸皿	口縁部	(11.4) (7)	宝珠	内外面	透明	黄味がかった灰白	良好	貫入, 18c 後半	
	559	E5	覆瓦	-	-	磁器	肥前系	丸皿	口縁部	(12.0) (7)	四方雜文	内外面	青面青靨 (梅鉢式)	灰白	良好	
	560	石塔周辺	-	-	磁器	肥前系	丸皿	胴部～ 底面	4.6 (0.2)	團扇・花 の印文	見込み靨ノ自釉割否	透明	灰白	良好	黄灰見小	
	561	F13	覆瓦	-	-	磁器	肥前系	丸皿	胴部～ 底面	4.2 (0.2)	草花文・ 高台内 大判年 製	見込み靨ノ自釉割否	透明	灰白	良好	18c 後半
	562	E5	覆瓦	-	-	白磁	肥前系	丸皿	底面	(5.0) (0.2)		胴下～高台無釉	緑灰	灰白	良好	見込みノ砂目跡 内野山か
	563	-	1	-	磁器	肥前系	丸皿	底面	(3.4) (0.2)		裏付無釉	透明	灰白	良好		
	564	石塔周辺	-	-	陶器	肥前系	丸皿	底面	-		見込み靨割否	透明	灰白	良好		
	565	石塔周辺	-	-	磁器	肥前系	筒型碗	口縁～ 底面	(7.6) (3.8) 5.6	團扇・菊 花紋	裏付無釉	透明	灰白	良好		
566	石塔周辺	-	-	磁器	肥前系	筒型碗	口縁部	(7.0) (7)	團扇・帯 袴文	内外面	透明	灰白	良好			
567	石塔周辺	-	-	磁器	肥前系	筒型碗	胴～腰 部	-		内外面	青灰	灰白	良好	貫入		
568	石塔周辺	1	-	磁器	肥前系	筒型碗	底面	-		内外面	灰白	灰白	良好			
569	66	覆瓦	-	-	磁器	-	筒型碗	底面	(4.3) (0.2)		裏付無釉	白磁釉	灰白	良好		
88	570	石塔周辺	-	-	磁器	肥前系	坪	口縁～ 底面	(5.6) 3.4 2.9		内外面	灰白	灰白	良好		
	571	石塔周辺	-	-	磁器	肥前系	坪	口縁～ 底面	4.6 3.4 2.7		裏付無釉	灰白	灰白	良好	19c	
	572	-	1	-	陶器	唐代川	土瓶の蓋	完形	7.2 (7) 2.8		外面受付部～ 内面無釉	オリーブ黒	梅灰黄	良好		
	573	石塔周辺	-	-	陶器	唐代川	土瓶の蓋	受付部	(9.6) (7)		内面無釉	白化靨土に透明釉 灰	灰	良好		
	574	-	1	-	陶器	唐代川	土瓶	口縁部	(7.2) (7)		口唇～内面口縁無釉 内面胴部無釉	梅杓灰	にがい・赤褐	良好		

種別 番号	掲載 番号	出土遺構	層位	取上 番号	種別	産地	器種	部位	口縁 径 高さ (cm)	文様	葉柄輪郭	釉の色調	胎土の 色調	焼成	備考	
88	575	-	1	-	陶器	當代川	土瓶	口縁部	(6.9) (11)	-	内面口縁無釉	黒褐色	にぶい・赤褐色	良好		
	576	E4	覆瓦	-	陶器	當代川	土瓶	口縁部	(7.4) (11)	-	口唇無釉	暗褐色	明赤褐色	良好		
	577	J13	覆瓦	-	陶器	當代川	土瓶	口縁部	(8.9) (11)	-	口唇～内底面まで 無釉	オレンジ黒	にぶい・赤褐色	良好	そろばん玉型	
	578	石塔周辺	-	-	陶器	當代川	土瓶	口縁部	(9.9) (11)	-	内面口縁無釉	黒褐色	にぶい・赤褐色	良好		
	579	石塔周辺	-	-	陶器	當代川	土瓶	胴～底 部	-	-	底面無釉	灰オレンジ	にぶい・赤褐色	良好	18c 後半 底面 ヌス	
	580	石塔周辺	-	-	陶器	當代川	土瓶	底部	-	-	外面無釉	暗灰黄	暗	良好		
	581	-	1	-	陶器	當代川	土瓶	底部	5.9 (底)	-	底面無釉	暗灰黄	明赤褐色	良好	底面に貝目	
	582	-	1	-	陶器	當代川	土瓶の蓋	口縁部	-	-	内面縁割ぎ	オレンジ黒	にぶい・赤褐色	良好		
	583	石塔周辺	-	-	陶器	當代川	鉢	口縁～ 底部	(31.3) (17.2) (6.9)	-	口唇部縁割ぎ	オレンジ黒	にぶい・赤褐色	良好	18c 後半 貝目痕	
	584	石塔周辺	-	-	陶器	當代川	鉢	口縁部	(33.4) (11)	-	口唇部縁割ぎ	オレンジ黒	にぶい・赤褐色	良好		
	585	石塔周辺	-	-	陶器	當代川	鉢	口縁部	(33.4) (11)	-	口唇部縁割ぎ	灰オレンジ	にぶい・赤褐色	良好		
	586	石塔周辺	-	-	陶器	-	雙か鉢	底部	(12.4) (底)	-	底面に土粒	灰	にぶい・赤褐色	普通		
	89	587	石塔周辺	-	-	陶器	-	鉢鉢	胴～底 部	(11.4) (底)	-	-	-	にぶい・赤褐色	普通	底面糸切り跡し
		588	石塔周辺	覆瓦	-	陶器	當代川	鉢鉢	胴～底 部	(14.8) (底)	-	底面無釉	オレンジ黒	暗赤褐色	良好	18c 以降
		589	石塔周辺	-	-	磁器	肥前系	瓶	胴～胴 部	-	-	内面一部無釉	透明	灰白	良好	
		590	石塔周辺	覆瓦	-	磁器	肥前系	瓶	胴部	-	-	内面無釉	透明	灰白	良好	
591		石塔周辺	-	-	磁器	肥前系	瓶	底部	(5.4) (底)	-	内面・底付無釉	灰白	灰白・にぶ い・暗	良好	底面見か	
592		303	1	-	磁器	-	瓶	底部	7.9 (底)	-	内面無釉	灰白	灰白	良好		
593		E4・5	1・ 覆瓦	-	磁器	肥前系	瓶	底部	(7.2) (底)	-	継線あり 底付縁割、内面無釉	灰白	灰白	普通		
594		石塔周辺	-	-	陶器	當代川	壺	口縁部	(17.6) (11)	-	口唇部縁割ぎ	黒褐色	灰褐色	良好		
595		石塔周辺	-	-	陶器	當代川	壺	胴～底 部	(13.8) (底)	-	内外面	オレンジ黒	にぶい・赤褐色	良好	貝目痕 18c	
596		石塔周辺	-	-	陶器	當代川	壺	口縁部	(31.6) (11)	-	内外面	オレンジ黒	にぶい・赤褐色	良好	18～19c	
597		石塔周辺	-	-	陶器	當代川	壺	口縁部	(31.6) (11)	-	口唇部縁割ぎ	オレンジ黒	にぶい・赤褐色	良好		
598		石塔周辺	-	-	陶器	當代川	壺	口縁部	(30.2) (11)	-	縄状突起	口唇部縁割ぎ	オレンジ黒	にぶい・赤褐色	良好	
599		石塔周辺	-	-	陶器	當代川	壺	口縁部	(44.8) (11)	-	-	口縁内外・底無釉	オレンジ黒	赤灰	良好	18～19c
600		石塔周辺	-	-	陶器	當代川	壺	胴～胴 部	-	柱き落と し・支	内外面	オレンジ黒	にぶい・黄褐色	良好	18c 後半	
601		石塔周辺	-	-	陶器	當代川	壺	胴部	-	縄状突起	内外面	オレンジ黒	にぶい・赤褐色	良好		
602		石塔周辺	-	-	陶器	當代川	壺	胴部	-	縄状突起	内外面	オレンジ黒	にぶい・赤褐色	良好		
603	E4	覆瓦	-	陶器	龍門司	仏瓶	底部	3.8 (底)	-	底面無釉	白化粧土・暗緑 釉・オレンジ黒	灰	良好			
604	E5	覆瓦	-	陶器	龍門司	灯明籠	底部	4.8 (底)	-	外面無釉	褐色	灰白	良好	底面糸切り跡し 見込みにおり目 痕るが湧有り		
605	石塔周辺	-	-	陶器	元庵院	仏花瓶	底部	5.9 (底)	-	外面胴下部・内面無 釉	黒褐色	にぶい・赤褐色	良好	底面糸切り跡し		

第 18 表 近世石塔周辺出土土製品観察表

種別 番号	掲載 番号	出土遺構	層位	取上 番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
91	606	E4	覆瓦	-	磁	(9.80)	4.30	1.49	(69.2)	頁岩	

第 19 表 近世石塔周辺出土金属製品観察表

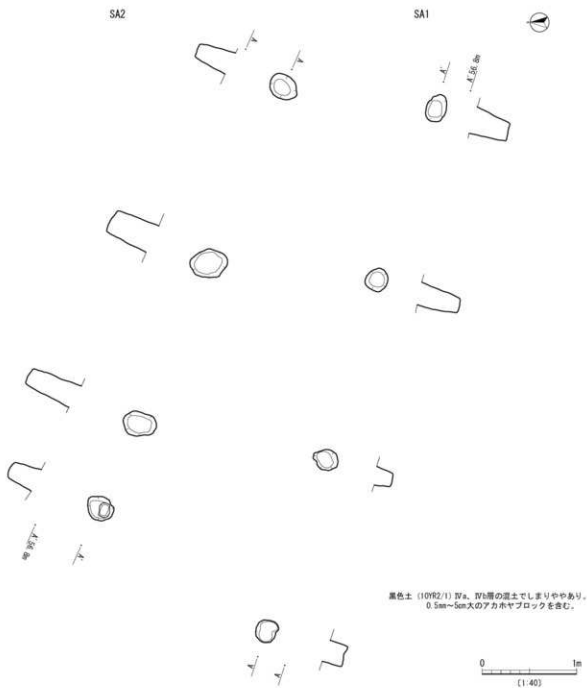
種別 番号	掲載 番号	出土遺構	層位	取上 番号	器種	部位	大きさ	重量 (g)	備考
84	536	S06	-	16	角釘	銅釘	残存長 4.5 cm 厚さ推定 6 mm	11.8	
85	537	SK13	-	1	角釘	最先端	残存長約 2 cm 釘頭部分付着している。 木質が残存。	2.3	2点の釘が付着 木質が残存
91	607-608	-	1	-	樽蓋	完形	火皿 (口径) 1 cm 高さ 0.5 cm 深さ 5.1 cm 最大厚 1.2 cm 口径 8.1 cm 最大厚 1.15 cm	(607) 7.8 (608) 11.8	18c 後半頃と推定 (古泉氏の分類)

第7節 時期不明の遺構

杭列（第92図）

F-5・6区のIVb層上面で検出された。この付近は比較的ピットが多くみられ、そのうち並んだものを杭列とした。南側の杭列1号・2号とも東西に並び、すぐ西側の溝状遺構1・2号と直交する。ピット間の間隔はほぼ1.8m程度で一定であるが、2号の西側2基のピット間のみ1m程度と短い。大きさは、平面で1号が約20～30cm、2号が約25～35cm、深さは1号が約20～45cm、

2号が約30～55cmであり、2号の方が大きく深い。これは1号上面がより削平を受けているためであると考えられる。ピットの底面はほぼ標高56.3m付近で一定である。埋土はアカホヤ火山灰を含んだ黒色土で、1号より2号の方がより多く含んでいる。埋土中に遺物や炭化物は含まれておらず、時期は不明である。



第92図 杭列1号・2号

第5章 自然科学分析

集石遺構内から出土した炭化物について、平成30年度にパリオ・サーヴェイ株式会社、令和元年度に株式会社パレオ・ラボに放射性炭素年代測定の実験を行った。以下にその分析結果を掲載する。なお、報告書発行における集石号名の変更に伴い、分析時の号名も報告書と同様に変更し、順序も号数どおりに変更している。

第1節 出土試料の自然科学分析(年代測定)

パリオ・サーヴェイ株式会社

1. 試料

試料は、集石7号、集石10号、集石16号、集石17号、集石19号から出土した炭化物5点である。

2. 分析方法

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HC1により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC1によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去を行う(酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。

液体窒素と液体窒素+ヘタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

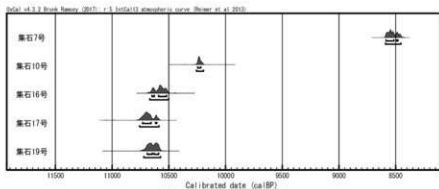
化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシェウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いてδ13Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も用いる。暦年較正に用いるソフトウェアは、Oxcal4.3 (Bronk, 2009)を用いる。較正曲線はIntcal13 (Reimer et al., 2013)を用いる。

第20表 放射性炭素年代測定結果

試料名	性状(種類)	分析方法	測定年代 yrBP	δ 13 C (‰)	暦年較正値	暦年較正年代		Code No.		
						年代値	標準			
集石7号	炭化材 (コナツ藻属 コナツ藻)	AAA	7750 ± 25	-27.69 ± 0.46	7751 ± 27	1σ cal BC 6636 - cal BC 6567	8685 - 8516 calBP	0.490	pal- 11601	8703
						2σ cal BC 6544 - cal BC 6331	8493 - 8489 calBP	0.192		
						2σ cal BC 6641 - cal BC 6205	8599 - 8454 calBP	0.954		
集石10号	炭化材	AAA	9075 ± 30	-29.30 ± 0.45	9075 ± 31	1σ cal BC 8297 - cal BC 8269	10246 - 10218 calBP	0.121	pal- 11602	8754
						2σ cal BC 8308 - cal BC 8246	10257 - 10195 calBP	0.251		
						2σ cal BC 8297 - cal BC 8269	10246 - 10218 calBP	0.121		
集石16号	炭化材 (コナツ藻属 コナツ藻)	AAA	9355 ± 30	-27.67 ± 0.59	9357 ± 29	1σ cal BC 8699 - cal BC 8679	10648 - 10628 calBP	0.490	pal- 11604	8796
						2σ cal BC 8641 - cal BC 8571	10590 - 10520 calBP	0.192		
						2σ cal BC 8719 - cal BC 8554	10668 - 10503 calBP	0.954		
集石17号	炭化材 (コナツ藻属 コナツ藻)	AAA	9450 ± 30	-36.64 ± 0.53	9452 ± 30	1σ cal BC 8783 - cal BC 8707	10732 - 10636 calBP	0.490	pal- 11605	8757
						2σ cal BC 8668 - cal BC 8658	10617 - 10607 calBP	0.192		
						2σ cal BC 8899 - cal BC 8638	10758 - 10587 calBP	0.954		
集石19号	炭化材 (カヤ)	AAA	9415 ± 30	-23.52 ± 0.61	9416 ± 29	1σ cal BC 8741 - cal BC 8697	10690 - 10646 calBP	0.490	pal- 11603	8755
						2σ cal BC 8682 - cal BC 8640	10631 - 10589 calBP	0.192		
						2σ cal BC 8772 - cal BC 8624	10721 - 10573 calBP	0.954		

1) 年代値の算出は、Libbyの半減期5,568年を使用。2) yrBP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。3) 付した誤差は、測定誤差(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。4) AAAは酸・アルカリ・酸処理を示す。5) 暦年の計算には、Oxcal4.3を使用。6) 暦年の計算には裏に示した丸の値を使用している。7) 1桁目を丸の範囲内だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行っていないように、1桁目を丸でないない。8) 統計的に真の値が入る確率は±68%、2σは95%である。



第93図 暦年較正結果

3. 結果

結果を第20表と第93図に示す。測定年代は集石7号が7750 ± 25yrBP, 集石10号が9075 ± 30yrBP, 集石16号が9355 ± 30yrBP, 集石17号が9450 ± 30yrBP, 集石19号が9415 ± 30yrBPであった。

第20表には較正した暦年代も併記する。暦年較正は、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、その後訂正された半減期(14Cの半減期5730 ± 40年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。測定誤差2σの暦年代は、集石7号が8590 ~ 8454 calBP, 集石10号が10257 ~ 10195 calBP, 集石16号が10668 ~ 10503 calBP, 集石17号が10758 ~ 10587 calBP, 集石19号が10721 ~ 10573 calBPである。集石16号, 集石17号, 集石19号の年代値の範囲は重なる。集石7号, 集石10号はそれ以降の値を示している。

材同定の結果は集石7号がコナラ亜属コナラ節, 集石16号がコナラ亜属コナラ節, 集石17号がコナラ亜属コナラ節, 集石19号がカヤであった。

調査所見によると、縄文時代早期の遺構が検出されているとされ、今回の年代測定結果はすべて縄文時代早期の年代の範囲内に入り、調和する結果である。

引用文献

Bronk Ramsey, C., & Lee, S., 2013, Recent and Planned Developments of the Program OxCal, Radiocarbon, 55, 720-730.

Reimer PJ, Bard E, Bayliss A, Beck JW, Blackwell PG, Bronk Ramsey C, Buck CE, Cheng H, Edwards RL, Friedrich M, Grootes PM, Guilderson TP, Hafidason H, Hajdas I, Hatte C, Heaton TJ, Hoffmann DL, Hogg AG, Hughen KA, Kaiser KF, Kromer B, Manning SW, Niu M, Reimer RW, Richards DA, Scott EM, Southon JR, Staff RA, Turney CSM, van der Plicht J., 2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon, 55, Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data, Radiocarbon, 19, 355-363.

第2節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹
Zaur Lomtadize・小林克也

1. はじめに

鹿児島県志布志市の宇都上遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

試料は、集石遺構である集石1号, 集石3号, 集石5号, 集石7号, 集石8号, 集石29号から出土した炭化材各1点の、計6点(試料No.1~6: PLD-38829~38834)である。いずれの試料も、最終形成年輪は残っていないかった。

測定試料の情報、調製データは第21表のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ, コンパクトAMS: NEC製 1.5SDM)を用いて測定した。得られた14C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14C年代, 暦年代を算出した。

3. 結果

第22表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比(δ13C), 同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した14C年代, 第94図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。14C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。14C年代(yrBP)の算出には、14Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した14C年代誤差(±1σ)は、測定の統計誤差, 標準偏差等に基づいて算出され、試料の14C年代がその14C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された14C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、および半減期の違い(14Cの半減期5730 ± 40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。14C年代の暦年較正にはOxCal4.3(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された14C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は14C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 考察

以下、14C年代および2σ暦年代範囲(確率95.4%)に着目して結果を整理する。なお、暦年代と縄文土器との対応については、小林(2017), 工藤(2012), 新東(2008)を参照した。

集石1号の試料No.3(PLD-38831)は、14C年代が9345 ± 35 14C BPで、2σ暦年代範囲は8720-8540 cal BC (92.2%) および8509-8487 cal BC (3.2%)の暦年代

を示した。これは、縄文時代早期前葉に相当する。集石3号の試料No.5 (PLD-38833) は、14C年代が9275 ± 35 14C BPで、2σ 暦年代範囲は8622-8422 cal BC (87.7%)、8407-8389 cal BC (2.3%)、8381-8349 cal BC (5.4%)の暦年代を示した。これは、縄文時代早期前葉に相当する。集石5号の試料No.4 (PLD-38832) は、14C年代が9515 ± 35 14C BPで、2σ 暦年代範囲は9125-8998 cal BC (40.1%) および8924-8737 cal BC (55.3%)の暦年代を示した。これは、縄文時代早期前葉に相当する。集石7号の試料No.1 (PLD-38829) は、14C年代が9375 ± 35 14C BPで、2σ 暦年代範囲は8746-8561 cal BC (95.4%)の暦年代を示した。これは、縄文時代早期前葉に相当する。集石8号の試料No.2 (PLD-38830) は、14C年代が9445 ± 40 14C BPで、2σ 暦年代範囲は8833-8621 cal BC (95.4%)の暦年代を示した。これは、縄文時代早期前葉に相当する。集石29号の試料No.6 (PLD-38834) は、14C年代が8505 ± 30 14C BPで、2σ 暦年代範囲

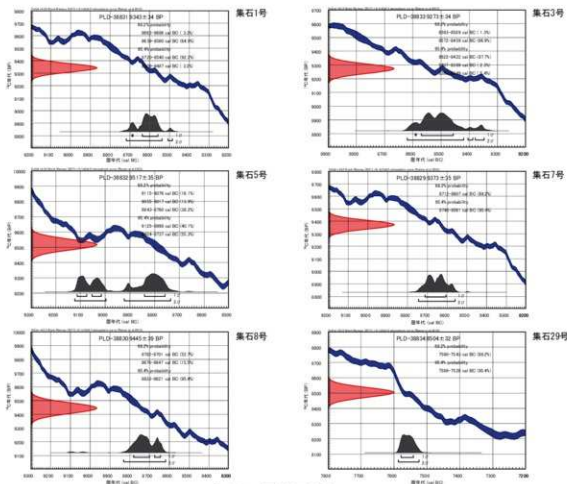
は7589-7526 cal BC (95.4%)の暦年代を示した。これは、縄文時代早期中葉に相当する。

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1), 337-360.
- 小林謙一 (2017) 縄文時代の実年代—土器型式編年と炭素14年代—, 263p, 同成社.
- 工藤雄一郎 (2012) 旧石器・縄文時代の環境文化史—高精度放射性炭素年代測定と考古学—, 373p, 神泉社.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hadjason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J.,

第21表 測定試料および処理 (全試料同じ)

試料データ	前処理
種類: 炭化材 試料の性状: 炭粒形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/l, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/l, 塩酸: 1.2 mol/l)



第94図 暦年校正結果

Hoffmann, B.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) *IntCal13 and Marine13*

Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55 (4), 1869–1887.

新東晃一(2008) 早期南九州貝殻文土器。小林達雄編「総覧 縄文土器」: 186–193, アム・プロモーション。

第22表 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年代 ($\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 ($\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に校正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
				PLD-38811 集石 1号	-28.80 ± 0.15
PLD-38813 集石 3号	-26.98 ± 0.14	9273 \pm 34	9275 \pm 35	8593–8589 cal BC (1.3%) 8572–8459 cal BC (0.6, 9%)	8622–8422 cal BC (0.7, 7%) 8487–8389 cal BC (2.2%) 8381–8349 cal BC (5.4%)
PLD-38812 集石 5号	-25.96 ± 0.20	9517 \pm 35	9515 \pm 35	9115–9076 cal BC (1.6, 1%) 9055–9017 cal BC (13.9%) 8843–8769 cal BC (3.8, 2%)	9125–8998 cal BC (4.0, 1%) 8924–8727 cal BC (5.5, 2%)
PLD-38829 集石 7号	-28.60 ± 0.18	9373 \pm 35	9375 \pm 35	8712–8667 cal BC (0.8, 2%)	8746–8561 cal BC (0.5, 4%)
PLD-38830 集石 8号	-30.76 ± 0.22	9445 \pm 39	9445 \pm 40	8782–8701 cal BC (5.2, 7%) 8676–8647 cal BC (15.7%)	8833–8621 cal BC (0.5, 4%)
PLD-38834 集石 29号	-26.11 ± 0.14	8504 \pm 32	8505 \pm 30	7580–7543 cal BC (0.8, 2%)	7589–7526 cal BC (0.5, 4%)

第3節 宇都上遺跡出土土物の化学分析

鹿児島県立埋蔵文化財センター

本遺跡出土の土器について、双眼実体顕微鏡による形状観察及びエネルギー分散型蛍光X線分析装置による成分分析を行った。

1 試料

表面に塗布または付着している赤色粒子 土器 2点

2 観察・分析方法

(1) 形状観察

以下の機器を使用して、形状を観察し撮影を行った。

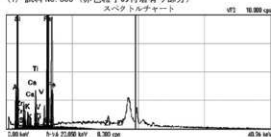
双眼実体顕微鏡 (ニコン製 SMZ1000) での 8 ~ 80 倍観察

(2) 成分分析

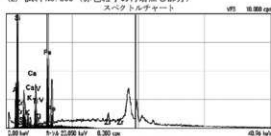
エネルギー分散型蛍光X線分析装置 (堀場製作所製 XGT-1000, X線管球ターゲット: ロジウム, X線照射径 100 μm) を使用し、次の条件により分析を行った。

X線管電圧: 15/50kV 電流: 自動設定

(1) 試料 No. 305 (赤色粒子の付着有り部分)



(2) 試料 No. 305 (赤色粒子の付着無し部分)



第95図 成分分析結果

測定時間: 200 秒 X線フィルタ: なし

試料セル: なし パルス処理時間: P3

定量補正法: スタンダードレス

赤色粒子の付着している部分と付着していない部分の分析を行い、比較した。

3 結果

試料の蛍光X線分析スペクトルチャート (成分分析) と FPM 定量結果の 1 例である。

4 考察

蛍光X線分析の結果から赤色粒子を分析すると、鉄の成分であり、場所によって差が生じた。赤色粒子の付着の有無によるものであり、付着有る部分の方が鉄の濃度が高い。このため、土器 (試料 2点) に付着する赤色粒子は鉄を成分とする赤色顔料であり、双眼実体顕微鏡による形状観察により、針状結晶は見られなかったため、パイプ状ベンガラではなく、鉱物由来のベンガラと考えられる。

第23表 FPM定量結果

元素	ライン	FPM 定量結果 強度 (cps/m)	質量濃度 (%)
アルミニウム	K	36.32	21.16
けい素	K	139.91	52.15
硫黄	K	1.46	0.19
カリウム	K	17.51	2.48
カルシウム	K	9.04	1.04
チタン	K	69.77	1.99
バナジウム	K	1.87	0.04
マンガン	K	41.59	0.66
鉄	K	1539.93	20.18
ジルコニウム	K	28.17	0.13

元素	ライン	FPM 定量結果 強度 (cps/m)	質量濃度 (%)
アルミニウム	K	29.89	23.13
けい素	K	107.3	61.92
硫黄	K	0.57	0.13
カリウム	K	9.58	2.4
カルシウム	K	6.22	1.26
チタン	K	54.14	2.79
バナジウム	K	2.19	0.08
鉄	K	386.67	8.18
ジルコニウム	K	14.97	0.12

第6章 総括

ここでは、検出遺構・出土遺物が多い縄文時代早期・中世・近世について記述する。

第1節 縄文時代早期

1 遺物

(1) 年代等

型式別の出土量を比較すると、前平式土器が最も多く、加栗山式土器が続き、この2型式で大半を占める。このことから調査区付近では、早期前葉において主に活動が行われたと考えられる。また早期中葉から後葉にかけては出土量が少なく、周辺の遺跡では多くみられることから、この時期はごく短期間の活動にとどまったか、時期による選地の違いなどが考えられる。

(2) 縞状を呈する土器

小牧3A式土器の282～285、305は、内面の色調が浅黄褐色と赤褐色に分かれる。これらは同一個体と考えられるため、未実測も含め、写真図版22内に掲載した(ただし、図版22内の下の2点は別個体)。

蛍光X線分析(第5章第3節)によると、内外面とも赤褐色の部分は浅黄褐色の部分より鉄分の反応が強く出しており、鉄分(ベンガラ)を含む液体を塗りつけたと考えられる。

顔料は、内面全体に渡って縞縞状に塗られている。口縁部の下位及び底部から3cm程度上位には幅広く、それらの間は幅1cm程度の細めの線が引かれている。これらの線が横方向に輪状に数回塗られたか、あるいは螺旋状を呈するのか、詳細は不明である。口縁部の内面は、全面に塗布した後、上位の縦幅2cm程度を工具で横方向にナゲ消している。口唇部は顔料が部分的に塗られている。外面については、焼成時に火を直接受けたためか内面よ

りかなり不明瞭である。285は外面も横方向に塗られているが、内面と同様であったかは不明である。断面を観察すると、顔料が塗られていない部分には中がアンコ状に黒色化しているが、赤褐色に塗られた部分は黒色化が極めて弱い。これは鉄分が黒色化を弱めた結果と推測される。顔料は何らかの文様を意図した可能性があるが、破片のため、全体は不明である。類似例として、口縁内面上位に赤色顔料(ベンガラ)を塗布する資料が、日置市の稲荷原遺跡や上山路山遺跡などにあり、型式はいずれも岩本式土器となっている。

2 遺構

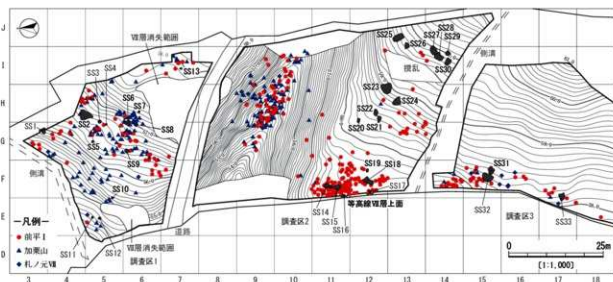
(1) 分布

遺構は、集石33基と土坑7基及び落し穴が検出されている。集石は主に調査区1～3に分かれており、遺物分布図(第96図)と比較すると、調査区1は加栗山式土器、調査区2は前平式土器I類、調査区3は札ノ元Ⅶ類土器が多い。礫は安楽川から8～10区の谷部を通り運んだと考えられ、早期前葉の頃、調査区2→1→3の順で主な活動場所が変更されたことが推測される。

(2) 集石の年代

集石内から土器や炭化物が出土しており、年代を考える参考となる。出土した土器の型式及び炭化物の較正年代値(2σ暦年代)を第24表に記した。遺構内遺物は、調査区1は加栗山式土器、調査区2は前平式土器I類、調査区3は前平式土器I類・札ノ元Ⅶ類土器が主体となっており、遺物分布とほぼ一致する。

土器型式ごとの放射性炭素14年代値と較正年代値は立神倫史・小林謙一両氏によりまとめられている(立神・小林2019)。それによると較正年代値は、前平式土



第96図 縄文時代早期集石・遺物分布図

器は11,080～10,565calBP、加葉山式土器は10,775～10,230calBPで、札ノ元VII類土器は数が少ないため、年代値はない。調査区1内の集石内炭化物は6基分の資料があり、較正年代値は、集石5号の米や古くになっているが、ほぼ加葉山式土器の年代と重なる。ただし集石7号のみかなり新しい年代が出たため、別試料で2回目の測定を実施すると、ほぼ他試料と近似した測定結果が得られた。調査区2内の集石内炭化物は4基分の資料があり、較正年代値は3基は前平式土器の値にほぼ一致するが、集石29号の1基のみは新しい早期中葉となる値が出ている。調査区3では炭化物が出した集石はなく不明である。

このように、土器型式ごとの放射性炭素14年代値と較正年代値の分析成果と本遺跡出土土器を比較すると、やや異なる部分もあるが、大きな相違点はみられなかった。

(3) 土坑等

土坑については谷部の南側にあたる12～14区にやや集中して検出された。形状は楕円形が多く、15～30cm程度の深さである。埋土はVI層土主体で、いずれも遺物や炭化物を含まない。集石に近いものが多く、調理施設に関連する可能性も考えられる。

H-13区において1基のみ検出した落とし穴は、東側が攪乱を受けており、攪乱箇所にも他の落とし穴が存在した可能性がある。埋土が他の土坑と異なり、V A層上位部分の性質であったことから、早期後葉頃の遺構と考えられる。周辺の集石はすべて早期前葉のものであり、早期後葉には狩猟場として利用されていたと推測される。なお、落とし穴の上部から磨製石鏃が出土したが、落とし穴がほぼ埋没したところに入りこんだものであり、落とし穴と時期が異なる可能性が高い。

3 周辺遺跡との関連

宇都上遺跡が立地する安楽川下流域では、他にも多くの縄文時代早期の遺跡がある。そのうち調査された遺跡は、宇都上遺跡より1km北側の緩斜面に位置する稲荷上遺跡、本遺跡の対岸で、安楽川・尾野見川の浸食を受けた瘦根根の台地上に位置する稲荷迫遺跡、隣接した台地縁辺部に位置する高吉B遺跡、その南側の台地上に位置する船迫遺跡である。その遺跡ごとの遺構・遺物型式の概略は第25表のとおりである。

周辺域を外観すると、早期前半は最も河川に近く標高が低い宇都上遺跡・稲荷迫遺跡や高吉B遺跡の台地縁辺部で集石等を利用した調理場として、早期後半は高吉B遺跡・稲荷上遺跡などで調理場として、また台地上の船迫遺跡は石鏃が出土しており、狩猟場であったと考えられる。

縄文時代早期の遺跡は安楽川上～下流域でくまなくみられるが、前～晩期は下流域に多くなるため、早期にお

いて河川近くの段丘から台地縁辺部へ移動し、下流域では定住化したと推測される。なお、いずれの遺跡でも竪穴建物跡などは1軒も検出されていないが、遺物や集石の量から定住していた可能性が高く、調査区外に存在すると推測される。

第24表 炭化物年代測定結果と遺構内土器型式

調査区	集石	測定値		遺構内土器
		測定値1	測定値2	
調査区1	1号	バレオ	10670-10490 cal BP (92.2%)	加葉山
	2号			加葉山
	3号	バレオ	10572-10372 cal BP (87.7%)	加葉山
	5号	バレオ	11075-10948 cal BP (40.1%) 10874-10667 cal BP (55.3%)	加葉山
	6号			加葉山
	7号	バリノ	8190～8154 cal BP (95.4%)	加葉山
		バレオ	10096-10511 cal BP (95.4%)	加葉山
	8号	バレオ	10763-10571 cal BP (95.4%)	
	9号			加葉山
	11号	バリノ	10257～10195 cal BP (95.4%)	
	12号			前平
調査区2	14号			前平
	15号			前平
	16号	バリノ	10668～10503 cal BP (95.4%)	前平
	17号	バリノ	10758～10597 cal BP (95.4%)	前平
	18号			前平や下割
	19号	バリノ	10721～10572 cal BP (95.4%)	
	23号			前平
	24号			前平
調査区3	25号			前平
	29号	バレオ	9539-9476 cal BP (95.4%)	札ノ元VII
	31号			札ノ元VII
	32号			札ノ元VII
33号			札ノ元VII	

※1 測定会社は、[バリノ]はバリン・サーヴェイ、[バレオ]はバリオ・ラボを示す。※2 なお、バレオ・ラボの測定結果では、BとCのみの測定であったため、1900をラウス比で補正し、加えている。また、80%以下の値はカットしている。

第25表 周辺遺跡の遺構と土器型式

遺跡名	縄文早期の遺構	土器型式別の遺物量					
		前平	加葉山	下割	赤山	葉ノ神	葉ノ神
稲荷上	集石3基	×	×	×	×	×	×
稲荷迫	集石64基・竪穴土坑3基・土坑2基	◎	◎	◎	△	△	△
宇都上	集石33基・土坑7基・落とし穴1基	◎	◎	△	△	△	△
高吉B	集石141基・竪穴土坑4基・土坑8基	△	△	△	△	△	◎
船迫	なし	×	×	×	×	×	×

◎多い ○やや多い △少ない ×なし

第2節 中世

1 遺物

(1) 遺構内遺物等

中世の包含層は、後世の攪乱によって完全に削平されている。またタイ産陶器や青磁皿のように、完形に近い個体が出土したこともあるが、多くの遺物は一部のみの出土であることから、遺構の上部も削平されたと考えられる。このように、中世の遺物は、遺構内における上部以外と表土出土のものに限られる。

遺構内遺物を見ると、大型土坑2基の埋土内には石塔類とともに土師器・青磁・白磁・備前焼鉢などが出土しており、これらはほぼ15～16世紀代の資料である。このうち青磁皿・碗などの輸入陶磁器や備前焼・常滑焼など、他地域からの搬入品が多く出土している。

一方、これらの出土品の中には、小破片ながら古瀬戸

壺、東播系須恵器器鉢、口壳白磁皿、鍋連弁青磁碗など、13世紀後半頃ののものも含まれている。

溝状遺構1・2号の遺物は大型土坑に比べ少ないことから、溝が造られた時期に大型土坑の上部が破壊され、当時の表土に含まれていたものが溝に入り込んだ可能性もある。

(2) タイ産四耳壺

1個体と思われるタイ産暗緑灰陶四耳壺が大型土坑から出土している。底・胴下部以外は二次的に火を受けて釉が溶けており、下部が地中に埋められた状態で火を受けたと考えられる。また、この四耳壺以外に二次的に焼けたものはないことから、この壺だけは他の遺物と離れた場所に置かれていたと推測される。

時期について、吉岡康暢氏によると、タイ産陶磁器の移入は大きく第一段階（14世紀後半～16世紀前半）と第二段階（16世紀後半～17世紀前半）に分かれ、四耳壺は15世紀前半～中葉に移入のピークを迎える（吉岡・門上2011）。その大部分は沖縄で出土しており、南九州でも少量であるが出土している。これらは南九州において、中世の商人が沖縄島との通商を介し、直接または間接的に中国陶磁に随伴して流入したようである。南九州では中世の拠点港湾をひかえた場所に出土する傾向がみられ、志布志はその一つでもある。四耳壺は志布志市内では、宝満寺遺跡や高城遺跡で出土している。

(3) 五輪塔

大型土坑1号内より出土した五輪塔については石材で分類できる。やや硬質の白色系溶結凝灰岩である451・452・454・459は一体と考えられ、水輪にホゾをもち火輪と連結させる南九州に多い形態で、14世紀代のもつと推定される。軽石製の450・453も一体のもので、熊本や鹿児島市の五輪塔の特徴をもつ水輪の最大径が中心部より上位にくるナツメ型で、15世紀代のもつと推定さ

れる。やや赤みがかった軟質の溶結凝灰岩である456・457・460は地輪で、小型化の傾向がみられ、16世紀代と推定される。

2 遺構

(1) 大型土坑

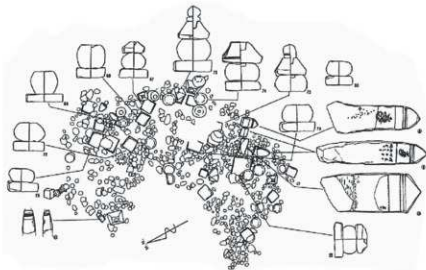
大型土坑1号内には多くの礎が入っている。礎の位置から、西側から石塔や陶磁器などの遺物とともに一気に投げ入れられ、その後埋戻されたと考えられる。よって周囲に礎を敷いた石塔群が西側のG・F-5区付近に建立されていたが、なんらかの事情で破壊され、この土坑に廃棄されたと推測される。石塔群の周囲に礎が敷かれた例は多く、宮崎市山内石塔群跡（第97図）などがある。石塔群がこの付近にあったと仮定した場合、時期不明としている杭列が極めて近くで検出されており、何らかの関係がある可能性がある。

大型土坑2号の埋土内には石塔や礎が含まれておらず、陶磁器等のみである。このことから、大型土坑2号は1号より後に掘り込まれ、埋設過程で地表面に残存していた遺物片や、木製品など植物質のものが入ったと推測される。

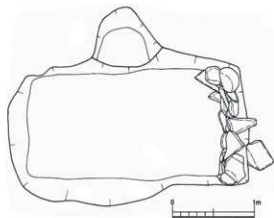
(2) 礎を伴う土坑

土坑8号は、他の土坑が素掘りであるのに対し、周りに礎を2段以上積んだ様子うかがえる。このような礎を伴う遺構の例として、県内では大崎町永吉天神段遺跡における火葬土坑1号があり、主体部の側面に角礎が3～4段重ねられている。また未報告であるが、鹿屋市小牧遺跡でも検出されている。

側面に礎を積み、床面に礎を敷き詰めた土坑としては、始良市の市頭C遺跡や鹿屋市領家西遺跡があり、いずれも内部に被熱を受けた跡がみられる。隣接する宮崎県都城市では、床面に礎を敷き詰め、側面に礎を積み上げた土坑が加治屋B遺跡・鶴喰遺跡で1基ずつ検出されてい



第97図 宮崎市山内石塔群の例



第98図 鶴喰遺跡22号土坑

る。また、床面に縄を敷き詰めた土坑が加治屋B遺跡で2基、西側の側面のみ縄を積み上げた土坑が都城市鶴喰遺跡で1基検出されている。宮崎県えびの市の北田遺跡では、床面に円縄を敷き詰めた土坑が1基検出されている。

類例をみると、床面に縄を敷き詰め、側面に縄を積み重ねる土坑は、その多くが被熱を受け、炭化物などもみられるため、火葬土坑墓もしくは土坑墓の可能性が考えられる。床面のみに縄を敷き詰める土坑も同様である。宇都上遺跡のように、側面の一部に縄を積み上げる例は鶴喰遺跡で1基みられたのみで(第98図)、ほとんど例がない。なお、鶴喰遺跡では鉄釘も出土しているため、土坑墓の可能性が高い。

また、大型土坑1号に廃棄された石塔は、土坑8号の上にあった可能性があり、その場合、土坑8号の上に積まれていた縄や石塔を大型土坑1号内に入れたこととなり、石塔は墓塔であったと考えられる。このように類例や検出状況を見ると、土坑8号は土坑墓の可能性が高く、墓の一部であったと判断することができる。

(3) 溝状遺構・硬化面

溝状遺構は4条検出されており、地点により1・2号と3・4号の2つに大別される。1・2号はほぼ北から南に直線状に延びており、等高線に平行である。大型土坑出土の遺物と同時期の遺物が含まれることから、大型土坑と近い時期と想定される。大型土坑は石塔群が破壊された頃に造られており、その後当地が畑などに作り替えられた際の区域境の可能性が高い。3号は1・2号と平行であり、同様の用途が考えられる。4号及び硬化面は、現在の道路とほぼ平行であり、旧道の一部の可能性が考えられる。

第3節 近世

1 土坑及び石塔・石碑

土坑4基及び石塔・石碑(第86図)は1-6区に集

中している。土坑10・12号は底面付近しか残存していないため、用途等は不明である。11・13号については、埋土断面に挿突の痕跡がみられたこと、13号の埋土内に鉄釘が入っていたことから、土坑墓の可能性が高い。

石塔・石碑については、文字が刻まれておらず詳細な年代は不明であるが、土坑との位置関係から、15～16世紀頃にそれまで建てていた五輪塔などの石塔を廃棄し、その場所に新たにこれらの石塔・石碑を建立したと推測される。ただし、このような石塔・石碑は近世に建立される場合が多いことから、近世において、過去に五輪塔などの石塔があった場所で、供養等の意味で新しく建立された可能性がある。周辺から18世紀後半頃の遺物が出土することから、少なくともそれ以前に建立されたと考えられる。

遺物は、仏具など供養塔に供えられたと考えられるのみがみられるが、播鉢・鉢・甕なども多いため、近くに日常生活の捨て場もあったと推測される。

2 溝状遺構

溝状遺構は2条検出されている。5号については、供養塔に近接し、底面が平坦であることから、供養塔への道として使用されていたと考えられる。6号は、底面に階段状の段があること、現在の側溝や道路と並行であることから、河川から台地上へ上がる際の道路などの用途が考えられる。

(参考文献)

- 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 2009『加家西遺跡 天神平溝下遺跡』
 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(141)
 2012『稲荷道遺跡』
 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(169)
 2014『船迫道遺跡・高吉B遺跡』
 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(180)
 鹿児島県教育委員会(公財)埋蔵文化財調査センター
 2018『永吉天神段遺跡3 第2地点-2 古代・中世・近世編』
 (公財)埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(17)
 給良市教育委員会
 2013『市頭A遺跡 市頭B・C遺跡』
 給良市埋蔵文化財発掘調査報告書第4集
 志布志町教育委員会
 1985『中原遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)
 2003『稲荷上遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(32)
 宮崎県都城市教育委員会
 2007『鶴喰遺跡(中世編)』都城市文化財調査報告書第79集
 2008『加治屋B遺跡(平安時代～近世編)』
 都城市文化財調査報告書第86集
 中世墓資料集成研究会 2004
 『中世墓資料集成-九州・沖縄編(2)』
 吉岡康暢・門上秀敏 2011『琉球出土陶磁社会史研究』真陽社
 立神倫史・小林謙一 2019『鹿児島県における縄紋時代草創期～早期の年代測定事例-土器付着炭化物を中心に-』『研究紀要 年報 論文の森から』第11号 鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（204）
主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）改築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

宇都上遺跡

発行年月 2020年3月
編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
TEL. 0995-48-5811
印刷所 濱島印刷株式会社
〒899-0052 鹿児島市上之園町17番2号
TEL. 099-255-6121 FAX 099-259-1629



鹿児島県